

アレクサンドリアのクレメンス  
『ストロマテイス』（『綴織』）第1巻  
—全訳—

秋 山 学

序

筆者は先に、初期ギリシア教父の一人であるアレクサンドリアのクレメンス（150－215）の著作のうち、『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』、全1巻）および『パイダゴーゴス』（『訓導者』、全3巻）に関して、その全訳を本学の紀要類に順に掲載した<sup>1</sup>。本号には、クレメンスの最大主要著作である『ストロマテイス』（『綴織』、全7巻；第8巻は偽作の可能性が高い）のうち、その第1巻の全訳を掲載する。第2巻の拙訳も、本稿と同時に公けにされる予定である<sup>2</sup>。既刊の拙稿に記したように、註釈や訳文の整備は、教文館版（『キリスト教教父著作集』）による公刊の際に本格的に取り組む予定であり、本稿はあくまでも試訳としての意味しか持たない。

本著作『ストロマテイス』は、クレメンスの神学の核心部分を成す「覚知」（者）の思想が展開される主要著作であるが、その写本伝承は乏しく、パリ写本（Paris.Suppl.gr.250）およびフィレンツェ写本（Laur.plut.5,3）の2本のみで伝えられる。もっとも、そのうち前者は後者の写しであることが知られている。したがって、部分的にはエウセビオス（263－339）による『福音の準備』などを参照しうる箇所もあるが、写本の読みに難がある箇所などは、直ちに近代校訂学者による提唱読みを参観する必要がある。この点で、オットー・シュテーリン（Otto Stählin, 1868－1949）の校訂になる校訂版テキスト（*Stromata* Buch I-VI / Clemens Alexandrinus ; herausgegeben im Auftrage der Kirchenväter-Commission der Königl. Preussischen Akademie der Wissenschaften von Leipzig : Hinrichs, 1906 ; Die Griechischen christlichen Schriftsteller der ersten drei Jahrhunderte, Bd. 2）の価値はきわめて大きいと言わねばならない。このGCS版は、その後Ludvig Früchtel（1897－1963）およびUrsula Treuの手によって改訂が施され、現在第4版を数えるものの（1985

年刊行)、本文部分は変改を加えられることなく、ただ異読一覧 (apparatus criticus) 部分、および引用・参照箇所一覧部分が大幅に刷新改良されているに留まる。本稿は、シュテーリンの功績を多とする意味で、旧版を用いて訳出を試みたが、その結果修正読みに関して、あるいは典拠表示に際して、新しい知見を活かしきれていない部分が多々散見されよう。この点については、教文館版を準備する段階で改良に努めたいと考えている。

近代語訳としては、イタリア語訳 (Clemente Alessandrino, *Gli Stromati: Note di vera filosofia*, Introduzione, traduzione e note di Giovanni Pini, Milano 1985)、スペイン語訳 (Clemente de Alejandría, *Stromata I: Cultura y Religión*, Introducción, traducción y notas de Marcelo Merino Rodríguez, Madrid 1996)、および英訳 (*Clement of Alexandria: Stromateis, Books One to Three*, translated by John Ferguson, Washington, D.C., 1991) を参照した。また各章の見出しに関しては、ミーニュ版に掲載されるラテン語訳 (Patrologia Graeca tom.8) から適宜訳出して加えた。

## I. 著者は本書の目的と、諸著作家が読者に どれほどの有益さをもたらすかを示す。

1.1) 「...あなたが手許でそれを読み、それを守ることができるように」。論文というものは、まったく遺されるべきではないのか、それとも誰かのために遺されるべきなのか。もし前者であるなら、書き物の効用とは、いったい何であるのか。もし後者であるなら、遺されるべきなのは、真摯な者のためにか、そうでない者のためにか。真摯なる者の書き物を批判する人が、真摯ならざる者による書き物を受け容れるというのはいぶかしい話である。2) しかるに神話や流神の言葉を記すテオポンポスやティマイオス、また無神論を興したエピクロス、さらにはヒッポナクスやアルキロコスに対して、各々恥ずべき仕方で執筆することを認める一方で、真理を告げ知らせる者に対し、後世の人々に対して益することを遺すのを阻むべきであろうか。わたくしが思うに、後の世の人々には善き子供たちを遺すことこそ麗しき業だと考える。しかるに、子供たちとは肉体的な子孫であるが、靈魂の産む子とは論述 (logos) である。3) われわれは、教えを授けた人々を、他ならぬ「師父」と呼ぶが、智慧とは共有されるものであり、また人間愛に満ちたものである。実に、ソロモンはこう語っている。＜子よ、わたしの掟の言葉を受け入れ、あなたのうちに収めるなら、

あなたの耳は智慧に従うだろう>（箴言 2,1 以下）。つまりここで彼は、蒔かれた御言葉を、あたかも大地に収めるかのように、学ぶ者の靈魂に収めるように、そしてそれこそ靈的に植えることに他ならない、と告げているのである。2.1) それゆえ彼は、こう付言する。＜あなたは自らの心を知解へと向け、さらにあなたの子にとっての戒めへと向かわしめよ>。というのも思うに、魂は魂に、また霊は霊に繋ぎ留められるとき、御言葉が蒔かれるのに従って、蒔かれたものを育て、増やすからである。しかるに教育を受ける者はすべて、教育を授ける者に随うとき子となる。ソロモンは語る。＜子よ、わたしの法を忘れることなかれ>（箴言 3,1）。2) しかし、覚知（gnōsis）が万人に備わっているわけではなく、論叢というものは、格言記者が述べているように、多くの者にとっては「ロバに豎琴」なのである。実際、ブタは淨らかな水よりも、むしろ泥水を喜ぶ。3) <それゆえ>、主は言われる。＜わたしは彼らに、譬えを用いて語る。彼らは見ても見ず、聞いても聞かず、知解しないからだ>（マタイ 13,13）。ここで主は、彼らに無知をもたらしめているわけではなく（そのように考えるのは決して許されることではない）、むしろ人々の無知のさまを預言者的に難詰し、語られる事柄を人々が理解しないであろうということを告げているのである。

3.1) さて、すでに貯蓄について救い主自らが明らかにしている（マタイ 25,14 以下）。主は受け取り手の力量に応じてしもべに財産を分かち与えるが、その力量とは鍛錬によって増大させるべきものであり、主は戻って来ると彼らから説明を受ける。まず、自らの銀を増し高めた者たちに対しては、＜少額に対して忠実であった者たち>であるとして、主は彼らを受けいれ、＜多くの額を任せよう>と約束し、＜主の喜びに入るよう>命じている。2) それとは逆に、貸すべく委ねられた銀を隠しておき、受け取ったのと同じ額を無為に差し出すしもべに対して、主は＜悪しき怠惰なしもべよ>と語り、＜おまえはわたしの銀を銀行に預けておくべきであった。そうすればわたしは戻ってきて自分の財産を利息付きで返してもらえただろうに>と述べている。さらに加えてこの役立たずなしもべは、＜外の闇に>打ち棄てられるであろう。3) パウロもこう述べている（2 テモテ 2,1 以下）。＜あなたはイエス・キリストにおける恵みのうちに力を得なさい。そして多くの証人を通してわたしから聞いたことを、信篤き人々に、つまり他の人々にも教えを授けるに適う人々に提示しなさい>。4) また続けてこう述べる（2 テモテ 2,15）。＜あなたは自らを、神の前に立つに適う者、恥じるところのない働き手、真理の言葉を正しく伝える者となすように努

めよ>.

4.1) ではもし、書き物によるものおよび声によるものの双方が御言葉を告げ知らせるのだとすれば、どうしてその双方を受け容れないでよいということがあろうか。その両方が、愛を通して信を力動的なものとするのだから。しかるに、最善のものを選び択らない者に関して、神はその責任を負わない。ある者に関しては、御言葉を、利息をつけて貸すこと、またある者に関してはそれを選び択るか否かを判断することがその業となり、その裁きが彼らのうちで行われる。2) だが、手を用いるか舌を用いるか、そのどちらで働きかけるのが有益であるかに関して、告知の知識はすでにある意味で使者のそれである。＜霊に蒔く者は、霊から永遠の生命を刈り取る。われわれは善を行って、失意に陥ることのないようにしよう> (ガラテヤ6,8)。3) 実に、神的な先見に出会ったものには、最大の恵みが賦与される。それは、信仰の端緒であり、生きる上での熱心さであり、真理に向かう衝動であり、探求の運動であり、覚知の痕跡であり、要するに、救いの発端が与えられるのである。しかるに正真正銘の真理の言葉によって生まれた者たちは、永遠の生命の路銀を獲得して、天に向かって飛翔する。4) 使徒は実に驚嘆すべきことを述べている。＜神に仕える者として自らを律し、貧しき者となり、多くの人々を富ませ、何も持たない者にしてすべてを有している者として、われわれの口は、あなた方に向かって開かれている> (2コリント6,4.10以下)。また彼は、テモテに向かってこう書き記している。＜わたしは、神、イエス・キリスト、そして選ばれた天使たちの前で命じる。あなたが偏見なくこれらを守り、偏愛の思いから何かを実行することのないように> (1テモテ5,21)。

5.1) さて、これら双方について、彼ら自身が吟味してみる必要がある。まず彼がこれを言い、かつその記念を残すことが相応しいかどうか。次いで、それを聞き読むことが正しいことかどうか。ちょうど聖餐式に関しても、ある人々はこれを分かち与え、それを習慣にしていると言う。それは民の各々が、自身で、その部分に与かることを良しとしているからである。2) 選択か回避かを正確に判断する際、最善なのは良心に照らすことである。良心の礎石となるのは、相応しき学びを伴った確かで廉直な生であり、すでに吟味され正しいとされた人々に従うことが、真理の思惟と掟の遂行にとって最善である。＜相応しくなくいまに主のパンを食し主の杯を飲む者は、主の体と血に対して罪を犯す者となる。人は自らをよく吟味した上でパンに与かり、杯から飲むべきである> (1コリント11,27-28)。6.1) そこで次に、隣人の益を奪い去るということについて目

を向けてみることにしよう。もし傲然とまた誰かに対抗心を燃やして教えに逆らうというのではない場合はどうか、御言葉の分かち合いが名誉心に駆られたものでない場合はどうか、聴き手の救い、それだけを報酬として受け取る場合はどうか、また賄賂を受け取るためでなく説教し、覚書によって語る者が悪霊を避けている場合はどうか、などである。2) というのも、使徒はこういつている。＜あなた方も知っているとおり、われわれはへつらいの言葉を使ったり、口実を設けて掠め取ったりしなかった。神が証人である。また人からの名誉に関しても、あなた方からも、他の人々からも受けることはなかった。キリストの弟子として重きをなすことができたにも関わらず、あなた方の間では幼子のようになった。ちょうど母親が自分の子供たちを慈しむように＞（1テロケ2,5－7）。3) この使徒と同じようにすることを、神的な言葉に与かる者たちは墨守する必要がある。すなわち、街中の建物の訪問者のように、詮索の度が行き過ぎていないか、あるいはキリストのために身を捧げた者たちが、日常の必需品を共有にすると知っていながら、世の事どもに執着してはいないか、などである。だが偽善者がいる場合、好きにさせておくが良い。ただくもしある人が、正しく見えることをではなく、正しくあることを望んでいるなら＞（プラトン『国家』362A）、その人が自らにとって最も良い事柄を知ることが適切である。

7.1) けれども実に、＜収穫は多いが、働き手は少ない＞（マタイ9,37 以下）のだとすれば、本当に働き手を必要として、われわれにとって、できるだけ多くの働き手による実りが生じるようにするのが相応しい。農術には2通りがある。一方は書面によらず、もう一方は書面による。主の働き手はいずれかの方法を用いて、良き筋の小麦を蒔き、穂を育てて刈り取るのであり、農夫は本当に神的であるように思われる。2) 主は語る。＜滅び行く食物のためにではなく、永遠の生命に向けて留まる食物のために働くがよい＞（ヨハネ6,27）。食料は、穀物かあるいは言葉のいずれかを通じて摂取される。そして真に＜平和をもたらす人は幸いである＞（マタイ5,9）が、その人々とは、この世で生命を賭し、無知をめぐる放浪を通じて格闘している者たちを教え、御言葉と神に従った生活の内なる平和へと導き、正義を渴望している者たちを、パンの配給によって育む人々である。3) というのも、霊魂は固有の食糧を有しており、それは認識と知識によって増大するが、ギリシア哲学によって分かち与えられる。ただその際、ちょうど木の実の殻のように、そのすべてが食用であるわけではない。4) ＜植えかつ水をやる者は＞（1コリント3,8 以下）、成長するものの仕え手であるが、その仕えの業という点で、＜彼らは一つ＞であり、＜各々の者が個々の報酬を、

個々の労苦に応じて手にするであろう。われわれは神の協働者なのであるから、あなた方は神の畑、神の建物なのである。これは使徒の弁である。8.1) だが、比較をして判断することを聴衆の人々に委ねるべきではない。また完全な吟味のために、あらゆる種類の言葉の術智と膨れ上がった企ての力によって鍛えられ、すでに靈魂において囚われて、決して無化することのないような人々に御言葉を委ねる、というのもすべきことではない。2) むしろ誰かが信仰のゆえに饗応することを選ぶのであれば、この人は神の言葉を受ける上で堅固であり、理性的な判断基準として信仰を獲得しているのである。そこから、彼には余剰ゆえの説得が伴うことになる。そしてそれは次の預言者の言葉に合致する。＜あなた方は、もし信じなければ理解しないであろう＞（イザヤ7,9）。＜したがって、われわれに時間がある間に、すべての人々、特に信仰の家族となった人々に対して善を為そうではないか＞（ガラテヤ6,10）。3) これらの人々の各々には、至福なるダビデに従って感謝の詩篇を歌わせよう。＜ヒソプの枝でわたしの罪を払いたまえ。わたしが清くなるように。わたしを洗いたまえ、雪よりも白くなるように。わたしに悦び祝う声を聞かせたまえ、そうすればわが骨は悦び踊るだろう。あなたの御顔をわたしの罪から遠ざけ、わたしの不法を拭い去りたまえ。4) おお神よ、わたしのうちに淨い心を作り、わたしのはらわたのうちに直き霊を新たにしたまえ。わたしをあなたの御顔から退けず、あなたの聖なる霊をわたしから取り去りたもうな。わたしにあなたの救いの喜びを返し、導きの霊でもってわたしを支えたまえ＞（詩篇50,9－14）。

9.1) さて、臨席する人々に語る者は、時に照らして吟味し、判断をもって裁定し、聞く耳を持つ者たちを他の者たちから峻別し、御言葉、生き方、習性、生活、運動、状態、眼差し、声、三叉路、岩、開けた道、実りをもたらす土地、茂り、よく実り美しく、種を増やしうる耕地に注目する。2) しかるに覚書を通じて語る者は、次のようなことを、叫びつつ記しながら、神に奉献する。利得のためではなく、虚栄のためでもなく、執着に屈することなく、恐れに隷属せず、快楽に駆り立てられることなく、出会う人々の救いだけを願う。その救いの返礼にこの世では与えることがなくても、それは報酬を働き手に相応しく与えようと約する方から十全に与えられるであろう。それを、希望をもって受け取るのだ、と。3) しかしながら、成人たるキリスト者に報酬を求めることは許されない。というのも善行を豪語する者は、その誉れをもってすでに報酬を得てはいないだろうか。また当然の義務に対する報酬のために何かを行い、うまくやれた場合には獲得に尽力し、下手なできばえの時には料金を逃れ



ようとする者は、世の習いに囚われてはいないだろうか。むしろできる限り主を模倣すべきであろう。4) この人こそ、神の意向に可能な限り仕え、賜物を受け取り賜物を与え、その生き方そのものを相応しき報酬として受け取る人である。＜姦婦の契約料は至聖所に入れてはならない＞（申命 23,18）。10.1) したがって＜犬の代価＞を至聖所に奉納することは禁じられている。悪しき食糧と教えにより、＜靈魂の眼＞（プラトン『国家』533D）が本来の光に対して鈍化した者にとっては、記されていない事柄を記された形で明らかにする真理に向けて、歩むべきである。＜渴ける者たちよ、水のところに来るがよい＞（イザヤ 55,1）とイザヤは言っている。またソロモンは、＜あなたの器から水を飲め＞（箴言 5,15）と勧告している。2) 実にヘブライ人から借用した哲学者プラトンは『法律』篇において、農夫たちに対し、まず自分の土地で「白亜層」と呼ばれるところまで掘ってみてその土地は水が引けないということを確認しない限り、他者から水を灌漑したり取ったりしてはならないと命じている（プラトン『法律』844AB）。3) 困窮にある者を手助けしないのは正義に悖るし、不毛を促進するのは美しくない。それゆえ、荷を掛け合わせるのは合理的であるが、併せ取り除くのは適切ではないとピュタゴラスは述べている。4) 一方、聖書は靈魂の閃光を掛け合わせ、自らの眼を觀想に向けて引き伸ばす。したがっておそらくその何かは引き伸ばされて、たとえば鞭を加える農夫のようになるが、あるものは内にあるものを動かすことになる。5) 神的な使徒によれば、＜われわれのうち多くの者は病弱で力がないが、十分なだけの者たちは眠っている。もし自らを吟味するなら、われわれは裁かれることはない＞（1コリント 11,30）。

11.1) だがすでに、この論考は、実証を意図して記された書き物ではなく、わたしにとっての覚書として、老齢に備えて書き溜められたものである。これは忘却の予防薬、眼に見える生命体の幻影とおよその影絵、わたくしが耳を傾けるに値すると思った、言葉と幸いなる人々、真に語るに値する事どものそれなのである。2) そのあるものはギリシアの地に生を享けた者、イオニア人であり、また他の者どもは大ギリシアの人々であり（その一部はコイレ・シリアの人、他にエジプトの人もある）、また東方の人々もいる。そのある者はアッシリア人、ある者は生まれがユダヤ人で、パレスティナの人である。最後に出会った人にわたしは休らいを得たが（力において彼が筆頭である）、エジプトで隠遁していた彼を追った。彼は真にシケリアのミツバチ、預言者のまた使徒の緑地で花を摘み、混じりけのない覚知の宝を、耳傾ける靈魂に植えつけたのである。

3) だが、幸いなる教えの真なる伝承を保つ者たちは、聖なる使徒たち、すなわちペトロとヤコブ、ヨハネとパウロから直ちに、父から受け取られた子として（父祖たちに似た者たちは数少ない）、神と共に来たり、われわれの許に、かの古代に遡る、使徒的な種子を置くことになるであろう。12.1) わたしは、そのような記述をではなく、ただ注記に従った観察を喜びとするような人々が大いに喜ぶということをよく知っている。というのも、霊魂が喜ぶなら、そのようなスケッチは、その幸いなる伝承を不可避なものとして守るとわたしは考える。＜智慧を愛する人を、父は喜びとする＞（箴言 29,3）。2) 常に汲まれる井戸は、透明な水を提供し、誰も与かることのない井戸の水が腐敗へと向かう。そして剣を用いることは、その剣を研ぎ澄まされた状態に保つが、用いないで置くことは、それに錆が付着するもとなる。要するに、常なる鍛錬は、霊的にも肉体的にも健全な状態を形成する。3) <ともし火を灯す者は、そのともし火を升の下に置いたりはしない＞（マタイ 5,15）。むしろ、そのともし火を灯して催される饗宴に相応しいとされた者たちに、そのともし火がよく見えるように、灯り台の上に置くだろう。であるから、知恵は、それを理解できる者を知恵ある者とするのでなければ、何の益があるだろうか。さらに、救い主は常に救い、常に働いておられるが（ヨハネ 5,17,19）、それはその人が父を見ることができるようにするためである。人は教えることでより多くを学び、語りながらしばしば、彼に耳を傾けている人々とともに聞いているのである。なぜなら＜あなたがたの師は一人である＞（マタイ 23,8）、つまり、語る者にとっても、聞く者にとってもであり、理性にも言葉にも泉を進らせるのである。13.1) それゆえに主も、安息日を守ることによって善きことから遠ざけようとはせず、神的な諸々の神秘に与からせ、あの聖なる光を＜受け容れることができる人々＞（マタイ 19,11 以下）には認めたのである。2) そして多くの人々のものではないものを、少数の人々には開示し、相応しいと判った少数の人々には、それを受け入れ、それに向けて徴づけられようよう計らったのである。しかるに神のような、語られえない事どもについては、これを文字にではなく、言葉に託した。3) だがもし、誰かが＜隠されている事柄で明らかにされないものはなく、覆われているもので覆いを外されないものはない＞（マタイ 10,26）と記されているではないか、と言うとすれば、われわれの許で言われている次の言葉を聞くがよい。すなわち、「隠れた仕方で理解する者に、隠れたものは明らかにされるであろうが、その際主は、その言葉の集積を通して預言している。そしてひそかな仕方で伝承を受け容れられる者には、その秘せられた事柄が、あたかも真



理のように明かされる。それは多くの者には隠されているが、小数の者には明らかなものとなる」と。4) だが、もし正義が万人のものであるならば、何ゆえに正義が愛されないのであろうか。神秘は神秘的な仕方では伝えられるが、それは神秘が口で語る者のものとなり、それを通して語られるものとなるためである。その際むしろ、声のうちにではなく、むしろ思惟活動のうちに語られる。5) <神は>教会に、<与えた。使徒たち、預言者たち、福音記者たち、僕と牧人たちを、聖なる者たちの刷新のために、正義の業のために、キリストの体の建設のためにである>（Ⅰフェソ4,11 以下）。

14.1) さて、わたしによるこれらの覚書の弱き面に関して、わたしはこれが、かの恵みに満ちた聖霊、わたしがそれに聞き従うに適う者とされた聖霊と較べあわされるならば、非常に弱いということをよく知っている。その一方で、テュルソスの杖で打つ者には、原型である方を想起させる像となるであろうと考えている。聖書に言う。<知者に語れ。そうすれば彼はより知者となるだろう>（箴言9,9）。また<持てる者には増し加えられるだろう>（マタイ13,12）とも言われる。2) 告げ知らされるのは、語られざる事柄を十全に解釈するためではなく、むしろそれには程遠く、ただ注意を喚起するためだけである。それには、忘れていたときに書き留める場合も、あるいは忘れないように書き留める場合もありうる。わたしにはよく分かっているのだが、多くの事柄が、長大な時間にわたって書かれざるまま、われわれの許に届いた。それゆえ、わたしの記憶の弱さを軽減するため、主要点の組織的な記述を、記憶に対する救いの覚書として自らに課し、わたしは必然的にこのスケッチの様式に拠ることにした。3) われわれには思い起こせない事柄もあるし（というのも至福なる人々には多くの力が備わっていた）、示されないままに時間を過ぎて現在に至る事柄もある。しかるに思惟のうちに枯れて散った限りの事柄は、是認されていない事柄に仕えていたのでは容易には思い起こせず、それらを覚書によって炊きつけ、ある事柄については自ら選び出して意識的に発信してみよう。その際に、言うことすら憚ってきた事柄を書き記すのは恐ろしい。だが何にも妬みを抱かず（それは神法に反する）、しかしながら読者の人々には、どこか他の場所へと躓かせたり、箴言作者たちが言っているように、短剣を子供じみて怒りながら発見したりするのではないか、という恐れを抱いている。4) <記されたもので不足しないものはあり得ない>（プラトン『第2書簡』314C）。たとえ公刊されておらずともわたしによって言及されたものであれば、ただ巻物は常に、書き記された同じ声を用い、質問を呈する者に対して、記されている事柄以上には何も

返答しない．というのも必然的に、助け手ないし共著者、あるいは同じ道のりに足を踏み入れてくれる人などが必要だからである．15.1) 一方、聖書がわたしに暗示する事柄もある．それらは、ある人々には提示されるであろうが、ある事柄は単に述べられるのみで、知られざる事柄を語ろうと努め、また隠した状態で述べ明かし、沈黙のまま示そうと試みられるであろう．2) また著名な異端の許で教説化された事柄は提示されるであろうし、観照的観想による覚知よりも前に置くのが相応しい事柄については、彼らに対して反駁を行う．この覚知は<伝承の栄えある荘厳な規準>（1 クレムス『コリント人への書簡』7.2）に照らして、宇宙の生成の時点からわれわれに前もって告げられている事柄である．そして自然的観想に先立って必然的に把握されねばならない事柄は前に取り扱い、連関に対して障害となるものは前もって解消し、覚知的な伝承の受容に際して聴覚を準備された状態にするためである．つまり大地から、とげやあらゆる雑草を、農事上ブドウを植えるために、前もって清めておくわけである．3) なぜなら前競技はすでに競技であり、前秘儀はすでに秘儀なのであるから、われらのこの覚書は、愛智やその他の準備的教養からも、その最も美しい部分を用いることを躊躇しないであろう．4) というのも使徒によれば、われらは万人を勝ち取るために、ユダヤ人や律法の下にある人々のためにはユダヤ人となるばかりでなく、ギリシア人のためにはギリシア人となることは理に適ったことだからである（1 コリント9.20 以下）．5) また『コロサイ人への書簡』において使徒は<わたしたちはすべての人に訓告し、あらゆる知恵を用いて教えます．それはすべての人をキリストにおいて完全なものとするためです>（コロサイ1.28）と記している．16.1) しかるになかはずく、覚書というあり方には、洗練された観想が似つかわしい．さながら陸上競技者の食物に混ぜられた甘味のように、撰文集をふんだんに準備しておきたい．これは彼が熱望するためのものではなく、むしろ栄誉にむけての良き刺激を得るためのものである．われわれは豎琴を弾くに際して、荘厳さに満ちた高音を、適度に爪弾くことにしよう．2) ちょうど、民に向かって演説を行おうと望む者たちが、語る内容がより聴き取りやすくなるように、伝令を通じてしばしばこれを行うのと同じように、この場合にあっては（多くの者にとって、われわれの論述は伝承以前に語られることになるため）、慣れ親しんだ思いなしや大声での雑音は、取り除いておくべきである．それらは、各々の場合に関して、聴衆の気を逸らす恐れがあるためである．3) 要約して述べるならば（多くの小さな宝石のなかで、本物は唯一、また多くの魚の群れのうち、美魚は唯一である）、善き協力者を得て、

時間と労力を費やした際に、真実は輝き出でるということである。というのも人間を通じ、神の許から、ほとんどの善行は豊かに与えられるものだからである。17.1) 実に、われわれはすべて、視覚を用いる限り、視覚に入ってくるものを眼で見る。他の感覚に関しても同様である。しかしながら、屠殺者と牧者では群れに対する見方が異なる。前者は肥えているかどうかを詮索するが、後者は多産になるよう配慮する。家畜は、もし乳を飲料として用いるのであれば、乳搾りをすればよいが、もし衣服が必要なのであれば、羊毛を刈ればよい。2) それと同様に、私としては、ギリシアの有益な学問から、その実りを引き出せばよいわけである。というのも私は、誰も反駁しないような書物は、それほど幸甚だと考えられるべきだとは思わないが、むしろ誰も巧みに反駁できないような書物は、優れていると考えられるべきだと思う。したがって行為や選択についても、非難されないということではなく、誰も巧みに反論できないということが示されるべきなのである。3) 前もってよく考えて実行するの でなければ、状況次第でそれを行ってもすぐにできるわけではなく、むしろ経緯にしたがい神の知恵を得て、用意周到であってこそ、意味ある仕事ができるというものであろう。徳を有している者は、なお徳へと導くような道を必要とはしないし、強壮な人間は、健康の回復を必要とはしないのである。4) ちょうど農夫たちが、前もって地面に水を引いておくのと同様に、われわれもまた、ギリシア人の許でのロゴスのうち飲むに適したものでもって、言葉の土質を前もって潤しておこう。それは、蒔かれた霊的な種を受け容れ、それを容易に育てることができるようにするためである。

18.1) さて本著作『ストロマテイス』は、哲学教説を混ぜた、否ちょうど、胡桃のうち食べられる部分が殻に覆われているように、哲学教説に隠され覆われた真理を、包含することになろう。というのも思うに、真理の種子は、信仰ある農夫だけに守られるのが相応しいからである。2) わたしは、小心な者たちによって、お喋りの類が無学な形で用いられているのを知らないわけではない。彼らは、信仰が成立する上での不可欠かつ該当する事柄を話題にする。しかしながら外的な事柄・余計な事柄は、目的のためにはまったく役に立つことがなく、疲弊させ窒息させるばかりで、われわれはこれを乗り越えようとしても虚しい結果に陥ることになるだろう。3) しかるに、哲学は悪に属し人生を沈めてしまうものだと考えている者どもは、ある種の悪の発見者のように、人間に対して暴行を加える者である。4) わたしとしては、悪は悪しき本性を有し、決して何か美しきものの農夫とはなりえないということを、この『ストロマテ

イス』全編にわたって示すことにしよう。その際、哲学もまた、神的な先見の業であるということをあわせ暗示するつもりである。

## Ⅱ. 知識への導入としてのギリシア哲学の価値； 『ストロマテイス』は意図的に曖昧であること。

19.1) ところで企画した覚書に関しては、必要な時機を得て、ギリシア人の栄誉に関して必要な限りにおいて、あら捜し好きの者どもに対して述べるつもりである。まずもって、もし哲学が無用なものであるとしても、その無用性の確証が有用なものであるとすれば、哲学は有用なものである。次にギリシア人に対し、彼らが教説として唱えている事柄をめぐって、単に言辞のみによってそれを論破するということは、微細な点に関する認識にまで踏み込まない限り、不可能である。3) なぜなら経験をともなった論駁は、大いに信用性を持つが、それは、反駁する事柄に対する知識が、最も完全な論証でもあるからである。4) 実に、多様にして必ずしも一貫していない事柄も、最後には技術者を飾る。とりわけ博学は、提示される事柄に対して序説的な役割を果たし、教説のうち最も主要な部分に関して、聴き取る者を説得することに貢献し、また手ほどきを受ける者のうちに驚嘆の念を生み、真理に向けて共闘する。20.1) しかるに好学者の者が、隠されていた真理を受け入れることのできるような説得は信ずるに足るものである。その際、ある人々が中傷しているように「哲学は偽りの事物と悪しき業の創造者であって生活を害するものだ」と彼らが考えるようなことがあってはならない。哲学は真理の活ける像なのである。2) 哲学とはギリシア人に与えられた神からの賜物であり、言わば何か狡猾なテクニックによって呪いをかけられた者どもみたいに、われわれを信から遠ざけるものではない。むしろ言わば、より大きな防具を用いるかの如くに、シャベルのようなもので、信仰を指し示す鍛錬の術を獲得させるものなのである。3) 実に、教説の取掛かりは、異説の対置によって真理を約束し、その真理を通して覚知が随伴する。これは、導入される哲学を予め告げるロゴスによるのではなく、むしろ覚知から発する実りによって、われわれが真なる把握の確固たる手綱を、推測される事柄の知識を通じて掴むためである。4) ここで、この『ストロマテイス』が博識をもって巨大化し、覚知の種をたくみに隠したいと望んでいるという批判に対しては沈黙する。21.1) ちょうど、獲物を貪欲に追う者は、後を追ひ、追跡し、犬を遣って獣を捕まえる。それと同じように、真理も追究し

てみると甘美に映り、労苦して追い求めるに値するように思える。2) いったい、このように配されるのが好ましいものに関して、どうして覚書にしないでいられようか。真に哲学に相応しい、語られえない言葉が、彼らのために欺かれることは大変大きな危険である。だが、恐れを知らずにすべてに対して抗弁しようとする者は、正義のうちになく、むしろすべての名と言葉を、まったく格好を省みずに打ち捨て、自らを欺き、それに囚われている者たちにまじないをかけるのである。〈ユダヤ人たちは徴を求め、ギリシア人たちは知恵を探す〉（1コリント1,22）と使徒が述べているとおりである。

### Ⅲ. 詭弁の些細さの危険.

22.1) このような愚衆は多い。彼らのうちのある者は、快楽に隷従し、不信心を望み、あらゆる讃仰に適う真理を嘲笑し、非ギリシア性を嘲弄する。2) またある者は自らを奢り高ぶらせ、御言葉のうちに誹謗のねたを見出すように仕向け、論争的な探索を試み、言葉じりを捉え技芸を漁り、かのアブデラの人【デモクリトス】が言うように「イライラと指輪を廻す」（デモクリトス断片 150；プルタルコス『モリア』614E）。

3) 「その舌はペラペラと

よく喋る輩。作り話がほとんどだが

すべての言辞のそちこちに多くの綻」。

さらには 「あなたがどのような言葉を口にしようとも、

それを聴く必要がある」（ホメロス『イリアス』20.248－250）。

4) 実に、悪しき霊に取り付かれたソフィストたちは、このような術知に有頂天となり、彼ら自身の銜学趣味によりおしゃべりに耽り、名詞の選別と、ある種の言辞の配置と織り成しをめぐって全生涯を消尽し、小鳩よりも饒舌であるように見える。5) 彼らは、わたしが見るに、引掻かれようと望む者どもの聴覚を、男らしくないやり方で掻き、くすぐるだけで、それは乱雑な言葉の川、知性は滴りに過ぎない。つまり古の履物のようであって、あるものは彼らには弱く、外れてしまって、ただ舌だけが残される、というわけである。23.1) これをいとも美しく、アテナイの人ソロンが攻撃しつつ、こう述べている。

「甘言でだます男の舌と言葉をよく注視せよ。

あなた方の各々一人一人が、狐の足跡を辿っている。

あなた方のすべてに、虚しき理性が備わっている」

(ソロン、断片 11,7.5.6).

2) 次の救いの言葉は、まさしくこのことを暗示しているのであろう。〈狐には穴があるが、人の子には頭を横にする場所もない〉(マタイ 8,20)。というのも思うに、聖書に語られている他の獣とは完全に異なった意味で、信じる者のみに、諸事物の頭である、われらの有益なる御言葉が休らわれるのであるから。

3) この方は〈知恵のある者たちを、その悪賢さにおいて捕らえる〉方である(1 コリント 3,19)。なぜならただ主のみが、知者たちの立論が虚しきものであることを知悉しておられるからである。実に、聖書は字句や技巧に関わる余計な詭弁家たちを「知者」と呼んでいる。24.1) ここからギリシア人たちは、何であれ問題化して問う人々のことを知者またソフィストと言ひ、両者をほとんど同義語として呼び習わしてきた。2) 実際クラティノスは、『アルキロコイ』という著作の中で、詩人たちを批評してこう述べている。

「あなた方は、さながらソフィストの群れのように、手探りで進んだ」(クラティノス、断片 2)。

3) 喜劇詩人のイオフォンも同様に、サテュロス劇『笛吹きたち』の中で、吟遊詩人やその他の人々に関してこう述べている。

「大勢のソフィストの群れのように、身支度を整えて入ってきた」(イオフォン、断片 1)。

神的な書物〔聖書〕は、このような人々や、虚しき言葉にあくせくする同様の人々について、いとも適確にこう述べている。〈わたしは知者たちの知恵を亡きものとし、理解ある者たちの理解を無効なものとしよう〉(1 コリント 1,19)。

#### Ⅳ. 実践的技巧における知恵と哲学は、キリスト教の教えから 霊的な意味を獲得すること。

25.1) 一方ホメロスは知者のことを「物作り」とも呼び (cf. 『イリアス』 15,411), 『マルギテス』について (もしこの作品が彼のものであれば)、次のように述べている。

「彼のために、神々は杓も鋤も備えず、  
ただ知者としたのみで、彼はあらゆる技芸に誤った」

(『マルギテス』断片 2 キンケル)。

2) またヘシオドスは、キタラ弾きのリノスを「あらゆる知恵を学び終えた」(ヘシオドス断片 193 ジャッハ) と語り、船乗りのことを知者と呼ぶのをためらわず、「(彼



は）航海術に関して何も知らない」（『農と暦日』649）と記している。3）一方預言者のダニエルは＜神秘、それは王が熱愛するもの。知者も、マゴイ（占術者）も、魔術師も、ガザレノス人も、王にそれを告げる力を持ち合わせていない。それを告げ知らせるのは、ただ天の神のみ＞（ダニエル2,27以下）という。実に彼は、バビロン人のことを＜知者＞と名づけているのである。4）一方聖書は、この世のものであれば、知識であろうと技芸であろうと、すべて一様に「知恵」と呼んでいる。ただ連想によって人間の理性に想念されるものは多く、技芸に関わる知恵に満ちた着想が神から来たるということは、次のような言辞を呈する神には明らかである。5）＜主はモーセに仰せになった。見よ、わたしはウリの子ベツアルエルを、ユダ族のオルと呼び、彼を、あらゆる業における知恵と理解と知識との神的な霊で満たした。これは彼が、金、銀、銅、ヒュアキントス、紫貝、コッキノス、あるいは石の術、木材による創造に関して創案し、作り為し、すべての業を行うことができるためである＞（出エジプト31,1－5）。26.1）続いて彼は、一般的な表現を付け加えている。＜わたしは、すべての理解ある心に理解を授ける＞（出エジプト31,6）。すなわち、どのような苦勞と鍛錬をすれば受け容れられるかを示した、の意である。さらに彼は、主の名から明瞭にこう記す。＜あなたは、思惟において知恵あるすべての人々に語れ。彼らをわたしは、感覚の霊で満たした＞（出エジプト28,3）。2）「思惟において知恵ある人々」は、固有の本性的特質を備えているが、彼らは「感覚の霊」を抱き、これは最も主たる知恵から二重に授かるもので、それらを自らに適した存在として、傍らに置くとの意である。3）というのも職人の技芸を追い求める者たちは、感覚に関して特殊なものを享受する。まず、ふつつ音楽家と呼ばれる人は聴覚に関して、また彫塑家は接触感覚に関して、歌い手は声に関して、香道家は臭覚に関して、印章の刻印に携わる金工家は視覚に関してである。しかるに教養をめぐって尽力している人々は、共通感覚を豊かに与える。この感覚にしたがって詩人は韻律を、ソフィストは言辞を、弁証家は三段論法を、哲学者たちは自体的な観想を把捉するのである。5）なぜなら、この共通感覚は、発見のためのまた発明のための才を用いることを蓋然性を持って説得するからであり、知識へ向けての鍛錬は、その用法をあわせて増し高めるからである。27.1）したがって使徒が神の智慧を＜大いに多彩な＞（エフェソ3,10）と呼んでいるのは大変似つかわしいことであり、それは＜多様かつ多種に＞（ヘブライ1,1）、すなわち技術、知識、信仰、預言により、そのうちに示される力を、われわれの善行のために役立てる。それは、イエスの子の智慧が語っていると

り、＜主から来て主とともにあるすべての智慧が永遠であるようにするため＞（シラ1,1）である。2）＜というのももし、あなたが賢慮と感覚に大声で呼びかけ、それが銀の宝庫であるかのように願ひ求め、切にその跡を追うならば、あなたは敬神の念を抱き、神的な感覚を見出すことであろう＞（箴言2,3-7）。これは哲学に基づく感覚と対置するために預言者がこう呼んだものであるが、彼はこれを高貴にかつ莊嚴に究め、敬神の域に達することができるよう、教えている。3）こういうわけで、彼はこの感覚に対しては敬神の念における感覚を、覚知を暗示しつつ置く。その際にこう述べている。＜神は自らの口から智慧と、感覚と、あわせて賢慮を与える。そして正しき者たちに助けを豊かに増やす＞。なぜなら哲学によって正しき者とされた人々には、助力と敬神の念への共通感覚が宝のように蓄えられるからである。

## V. 哲学はキリスト教への準備的科学であること。

28.1) 主の到来以前には、ギリシア人にとって哲学は、正義に導くものとして必須であった。しかるに今や敬神の念にとって有益なものとなった。言わば、実証を通して信仰を享受しようとする人々にとっての予備教育となったのである。たとえそれがギリシアのものであれ、キリスト教的なものであれ、麗しきものを神慮に結び付けるなら＜あなたの足はつまずかない＞（箴言3,23）。2）というのも、すべて麗しきものの原因は神であり、それは旧約および新約のような第一義的なものに関してばかりでなく、哲学のような第二義的なものについても当てはまるからである。3）愛智はおそらく、主がギリシア人をも招く以前は、第一義的なものとしてギリシア人に与えられていた。というのも、律法がヘブライ人をキリストに向けて導いたと同様に、愛智はギリシアを教育したからである。つまり、愛智はキリストによって完成されるべき者を、前もって導き、前もって準備したのである。4）またソロモンはこう言っている。「智慧をふところに抱け。智慧はあなたを高めてくれる。喜びの冠でもって、あなたを栄冠でおおってくれる」（箴言4,8-9）、これは、あなたがかさ石でもって、哲学と正しき出費を擁して、ソフィストたちには近づき難い知恵を堅固なものにし、かつ専念すれば、の話である。29.1) さて、真理の道はただ一つであるが、その道は真理の中へと、さながら永劫に流れる川の中に、様々な流れがあちこちから流れ込むように流れ込んでゆく。2）したがって神がかり的に次のように語られる。＜わが子よ、聞け。そしてわが言葉を受け容れよ＞。彼は言う、

＜それはお前にとって、生命の道が多くあるようにするためだ。わたしはお前に知恵の道を教えよう。それはお前にとって幾多の泉が枯れないようにするため＞（箴言 4,10ac.11a.21a.）。この泉とは、同じ大地から噴き出すものである。

3) 彼はある唯一の正しき人の複数の救いの道を数えるだけでなく、多くの正しき人々の別の多くの道をも付加し、次のように告げて言う。＜正しき人々の道は、光によって同じように輝く＞。これは、掟と準備的教養の道、そして生命の端緒であろう。

4) ＜エルサレム、エルサレム、わたしは幾たび、さながら鳥が雛を集めるように、お前の子供たちを集めようと望んだことか＞（マタイ 23,37）。エルサレムとは＜平和の光景＞と解釈される。したがって、これは預言者的に、平和のうちに観照する人々が様々な仕方で召命に向けて教育されるということを明らかにしたものである。

5) というのも実に、主はそう望んだのであるが、それは叶わなかったのである。

5) 幾たびあるいはどこでであろうか？ 二度、つまり預言者たちを通して、また主の来臨を通じてである。「幾たび」という表現は、知恵が多重であるということを表す。そして、どのようにあるいはどれほどにという、その各々の仕方で、時間のうちにある人また永遠のうちにある人をすべて救い取る。それは＜主の霊が世界を満たすため＞（『知恵の書』 1,7）である。

6) もしある人が強いてこう言わされたとしよう。＜悪しき婦人には心を向けるな。姦婦の唇からは蜜が滴り落ちる＞（以下、箴言 5,3.5.8.9.11.20）。この蜜とはギリシア的な教養のことであるが、彼には次のような言葉に耳を傾けてもらいたい。＜彼女は時に適ってあなたの喉を肥やす＞。こう言われるのであるが、哲学は諂うことをしない。

7) では誰のことを比喩的に「姦婦」と呼んでいるのであろうか。明確にこう付言される。＜愚かさの両足は、愚かさと付き合う者どもを死とともに冥土へ運ぶ。愚かさの足跡は支えられない。思慮に欠けた快樂からあなたの道を遠ざけよ。彼女の家の扉の傍らに立ってはならない、彼女があなたの生命を他の者どもに引き渡すことがないように＞。

8) さらにこう証言している。＜あなたの体の肉があなたを疲弊させるとき、あなたは老齡を悔やむだろう＞。すなわちこれこそ思慮に欠けた快樂の結末なのである。

9) したがってこれらはこのような次第なのである。

9) しかる後、次のように語られるだろう。＜他国にしょっちゅう行くことなかれ＞。これはすなわち、世の教養は用いるべきなのであってそれに時間を消費しそこに留まることがあってはならないとの勧告なのである。というのも主の言葉に先立って、相応しき時機に各々の世代に有益な形で与えられた事柄が、前もって教育するからである。

10) 「というのも女奴隷たちの

媚薬の罠にかかった者たちが、女主人である哲学を軽蔑し、老いてしまった」。すなわちこれは、彼らのうち音楽に、あるいは幾何学に、また別の者は文法学に、だがほとんどの者は修辞学に疲弊したとの意である。

30.1) だが、円環の普遍教養がその女主人たる哲学に貢献するように、哲学そのものもまた、知恵の獲得のために協働する。というのも哲学とは知恵の陶冶であり、知恵とは神的・人的な事どもまたそれらの諸原因に関する知識なのであるから。したがって知恵は哲学を統べるが、それはちょうど哲学が前教養を統括するのと同様の関係においてである。2) なぜなら、もし哲学が舌・腹そして下腹部の統御を告げ知らせ、哲学それ自体を通じて哲学が選択されるべきであるならば、哲学はより崇高にしてより主たる位置にあるであろう、もし敬意と覚知とのゆえに、神に配慮が行われるべきであるならば。

3) ここまで述べた事柄の証言は、聖書が次のような表現でもって提供してくれる。サッラは、以前は子供を産まない女であったが、アブラハムの妻であった。サッラは自分が子を産まなかったので、ハガルという、エジプト人で自分の下女を、子供を産ませるためにアブラハムに委ねた。4) したがって、信仰深い男性と共棲している知恵は（アブラハムは、信仰深く正しき人間と考えられる）、まだ子を産まず、その世代には子がなかった。つまりまだ徳に満ちたかたちでアブラハムのために懐胎することがなかった。だが相応しくも、世俗の教養によって進展に相応しい好機が到来したと判断し（エジプトは世のことを比喩的に表現したものである）、まずは共に寝ることになり、しかる後知恵そのものに近づき、神的な先見によってイサクを産んだのである。31.1) ところでフィロンはハガルのことを「傍らに住むこと」（というのも、ここでは＜他国を頻繁に訪れるな＞とされているので）、一方サラのことを「わたしの首長」と解釈している。かくして前教養を積んだ者は、もっとも卓越的な智慧の許に赴くことができる。この智慧とは、それを通じてイスラエルの民族が成長したものである。2) ここから智慧とは教えられうるものであることが示されている。アブラハムはこの智慧を追究し、天体の観察から、神をめぐる信仰と義に至りついたのである。3) 一方イサクとは、自学するものと解釈される。それゆえ彼のうちに、キリストの予型も見出されるのである。彼は、一人の女性レベッカの夫であった。このレベッカは堪忍と言い換えられる。4) 一方ヤコブは複数の女性と交わったと言われている。このヤコブは修道者と解釈される（修練は複数の異なった教説を通して行われるからである）。そこからこの男は、イスラエルと名を変じたが、このイスラエルという名は、あたか

も経験豊富で修道者的であるほどに真に物を見通す、という意味である。5) これら3代の太祖たちを通じて明らかにされることは他にもある。それはまず、覚知の印章は棟梁的であり、本性的に、また学びと修練によって成立するものである。6) 他にも、語られた事柄の像が見出せる。それは三つ辻に佇み、姦婦との噂を流したタマルである。彼女を博学のユダ（力ある者と解釈される）が、考慮されるべきこと、吟味されるべきことを何も遺しはすまいと思って、＜彼女と床を共にした＞（創世 38,14 – 16）。こうして彼は彼女を、神に対する合意として救い取ったのである。32.1) かのアブラハムも、妻サラに先んじて身ごもったハガルをサラが妬んだとき、いわば自然哲学の中から有益なものだけを抽出するかのように、＜見よ、かの女奴隷はあなたの手のうちにある。あなたの気の済むように彼女を扱うがよい＞（創世 16,6）と言った。これは＜自分はこの世の教養を、より若年でありあなたに仕える奴隷女として受け容れるが、あなたの知識を、まったく女主人として敬愛する＞との意味である。2) ＜そこでサラはハガルにつらく当たった＞とは、この世の教養に対して＜これを正し、警告した＞ことに等しい。実に、次の言葉は正鵠を射ている。＜子よ、神の教育を軽んじるな。神によって糾されることを倦むな。主は自らが愛する者を教育し、自らが受け容れる子をすべて鞭打つ＞（箴言 3,11 以下）。3) 実に、上に引いた聖書の一節は、別の諸箇所でも検証に付され、さらに＜神秘＞を告げるものとして提示されている。

4) かくしてわれわれはここで、哲学とは純然たる言論による、真理と事物の本性をめぐる探究を事とするものであり（真理とは、主が＜わたしは真理である＞（ヨハネ 14,6）と述べたところのものである）、キリストにおける休らいに先立つ教養として理性を鍛錬し、真なる愛智による探求的鋭さを産む理解を覚醒させることだ、と言いたい。これを見出した者、否むしろ真理においてこれを獲得した者は、「秘儀熟達者」として哲学を有することになるのである。

## Ⅵ. 哲学は優れた鍛練であること。

33.1) しかるに、事前の鍛練によって、見なければならぬ事物に対して備えができていることは、大いに裨益する。しかるに思惟される事物は、知性（nous）にとって鍛練となるであろう。そのような事物の本性は、三つのあり方を取る。すなわち量、大きさ、言辞において観想される。2) ここで実証（apodeixis）に発する言論は、それを理解しようとする者の靈魂に正確なる信

仰を賦与し、示される事柄を異なったあり方で思惟することのないようにし、かつ迷妄のために迷走しようとするわれわれに降りかかることを許さない。3) かくしてこのような学びにおいて靈魂は感覚から浄められて炎を受け、真理を洞察することができるようになる。4) <というのも有用な教育と教養とが維持されるならば、それらは善き本性を作り出し、さらに有用な本性は、同様の教養と与かって、以前の人々よりも、さまざまな面、特に生まれに関して、さらに優れたものとなるだろう。これは他の動物においてと同様である> (プラトン『国家』4,424A)。5) それゆえ聖書にはこうも述べられている。<怠け者よ、蟻のところに行って見よ。蟻よりも知恵ある者となれ> (箴言 6,6)。蟻は刈り入れの時期に、冬の厳しさに備えて多くかつありとあらゆる種類の食糧を蓄えるからである。<あるいは蜜蜂のところに行き、なんと働き者であるかを学ぶがよい> (cf. ホテイツ『諷刺詩』1,1,33)。なぜなら蜜蜂は、あらゆる野の花をめぐり、ただ蜜を産み出すからである。

34.1) だがもし、主が教えているように「奥まった小部屋」(マタイ 6,6) で祈り、霊において跪くならば (ヨハネ 4,23)、もはや経綸 (oikonomia) は家 (oikos) だけに関するものではなく、靈魂に関して、何をどのように、どの程度靈魂に賦与すべきであるか、何を排除した靈魂に蓄えるべきか、またいつ、あるいは誰のためにそれらをもたらすべきか、に関わるものともなるだろう。なぜなら医師や船乗りたちと同様、「美しく善き人」というものは、本性的ではなく、学びによってそうなるものだからである。2) 実にわれわれはみな、ふつうにブドウや馬を目にしている。だが農夫であれば、そのブドウが実をつけるに良いか悪いかを見るであろう。また騎士であれば、その馬は覇気がないか俊足であるかをたやすく見分けるであろう。3) 対象が異なっても、それが本性的に卓越しているかどうか、ということは、他のものに比して本性的にそう生まれついているものへの熟練が明らかにしてくれよう。4) しかるに卓越性に関して、何であれ優れた本性のものがその完全性を明らかにするとは限らない。すなわち、悪しく生まれついても、卓越性に向けて相応しき教育を得るならば、必ずや美しく善きあり方を完遂するであろう。またその逆に、相応しき生まれを有していても、配慮が足りなければ悪く変質してしまうだろう。また神はわれわれを、本性的に共同体に向けまた正義に向かうよう創造されたのである。35.1) ここから、正しき事柄というものは、単なる状況だけから述べるべきものではないように思われる一方、掟を通じて、創造の善性が燃え立たせられるということをも考えあわせねばならない。靈魂は学びによって、最高の



ものを選択しようと望むように教育されるからである。2) しかしながらちょうど、たとえ書き記されたものがなくても信憑性がありうるとわれわれが言うのと同じように、信仰のうちに語られた事柄を理解することは、学んでいない者には不可能であるということにわれわれは同意する。というのも、良く語られた事柄を理解し、そうでない事柄を理解し得ないということは、単に信仰の問題ばかりではなく、学びに関わった信仰が引き起こすことだからである。3) だがもし無知が無教養と無学に他ならないのであれば、教養とは、神的な事柄また人間的な事柄に関する知識を産み出すものである。4) しかしながら、たとえ生活の貧困のうちにあっても、正しく生きることが可能なのと同じように、富裕のうちにあっても正しく生きることが可能である。また前教養を伴うなら、ある人にとって徳を守り抜くことはより速やかにかつより素早くなるであろうし、徳というものは、それらなくして守り抜くことはできないということにわれわれは同意する。ただしそれは、学びを終えた人々、あるいは<感覚器官を鍛え上げられた人々>（パライ5,14）である場合を除いてである。5) ソロモンは言っている。<憎しみは争いを呼び覚ますが、教養は生命の道を守る>（箴言10,12a）。それは欺瞞に欺かれないためであり、悪意をもって聴講し、悪しき技量を磨いている者どもによって盗まれないようにするためなのである。6) <教養は、吟味を加えられないとき、さまよう>（箴言10,17）と聖書には語られている。ソフィストたちの狡猾な名誉を阻止するために、吟味の方法を用いるべきなのである。

36.1) 幸福論者のアナクサルシスは、『王国について』という著書の中で、巧みにもこう記している。<博学は大いに有益である。持てる者を大いに攻撃しうる。巧みである者には益し、すべての言葉をどんな民の間でも安易に発する者を害する。時宜の規準を知る必要がある。というのもこの境界は、知恵の領域に属すからである。門の傍で歌う人々は、たとえどんなに賢明に歌ったとしても、知恵ある者とは見なされず、愚かな考えを抱いているものである>。2) ヘシオドスもこう語っている。

「ムーサイたちは、雄弁な男を神のような存在、

よい声で語る者にする方」（ヘシオドス、断片197）。

というのもヘシオドスは、「雄弁な男」という表現で、言葉の才ある者を言い表しており、「よい声で語る者」とは「練達の人」、「神のような存在」とは、「経験に富み、哲学的で、真理を知悉せる者」との意味で述べているからである。

## Ⅶ. 各哲学諸派は真理のいくつかの要因を所持していること.

37.1) さてギリシア的前教育は、哲学そのものとともに、神から人間の許へ、予め計画されていたようにではなく、あたかも雨が肥沃な土地に降り注ぎ、堆肥を育み家を潤すのと同様にやってきたように思われる。草や小麦も等しく発芽し、墓地にはイチジクが生える。だがもっと羞恥心のない木々は、計画に沿って植えられ、真理を垣間見るにしても、同じ雨の力を享受しながら、豊かな場所に植えられたものと同じ恵みを受けることはなく、枯れたり引き抜かれたりする。2) 実に、主が解釈して見せている種まきの譬えは、この点でも有益なものである。つまり、人間たちのうちにある大地を耕す農夫とは、世の創造以来、育ちうる種を天上より蒔いている方である。この方は、機会ある度ごとに、主の言葉を降らせる。しかるにその時期と、受け入れられる場所が違いを生む。3) とりわけこの農夫は、小麦のみならず（これには違いが多々あるため）、他の種、たとえば大麦やソラ豆、エンドウ豆、ヒヨコ豆、庭に植える豆、あるいは花を咲かせる種をも蒔く。4) ガーデニングもまた、同種の農術に属し、苗床、庭園、総じてすべての種類の樹木の本性と滋養にとって最も良きものを考えてやらねばならない。5) これと同様なのは、羊を飼う術のみならず、牛や馬、犬、ミツパチを育てる術もすべてそうである。かいつまんで言えば、家畜を飼い、動物を育てる術は、互いに大いにあるいは少しずつ異なるが、すべて生命に益する。6) 一方哲学は、ストア派、プラトン派、エピクロス派、アリストテレス派等に関わらず、これら諸派の各々において美しく語られる事どもである限り、敬虔な知識に基づく正義を教える。すなわちこれが折衷した哲学ということになる。しかるに人間の理性から離反して人々が刻印した限りの事どもは、決して「神的」とは言い得ないものである。

38.1) さて、いまや次のことをも検討することにしよう。すなわち、善行を行うことを知らない人々が、いったい美しく生き抜くことができるのかどうかという問題である。というのも、善行において躓く者がある一方で、何人かの人々は、真理をめぐる言論への理解を通じて成功を収めている。＜アブラハムはその行いからではなく、その信仰によって義とされた＞（ロマ4,2,16）。2) したがって、彼らにとっては、たとえ現在その行いが良くあろうとも、もし信仰を有していないならば、彼らにとって死後、何ら益はないということになるというのである。3) そのためにこそ、ギリシア人たちの言葉に聖書が翻訳されたのであって、それは、彼らが、無知ということを決して口実に持ち出すこ

とができないようにするためであり、彼らがもし望みさえすれば、われわれの許に何があるかについて、聞くことができたはずだというのである。4) ある人は、真理について述べることに、真理そのものが自身を解釈して見せるのとは異なる、という。真理に関する推測と、真理そのものとは別であり、類似と存在そのものとは別であり、学びと鍛錬で成立したものと、力と信仰とで作り上げたのとは別である、というのである。5) 敬神の念の教えは賜物であるが、信仰は恩寵である。神の意向を実行するとき、われわれはその意向を知っている。聖書はこう述べている。＜あなた方は、正義の門を開くだろう、わたしがその中に入り、主に告白するために＞（詩篇 117,19 以下）。6) だが正義に至る道は、神が様々な仕方で救うとき（神は善き方であるから）、数多く多彩で、主の道と門へと導くものとなる。だがもしあなたが、王的なまた正真正銘の入り口を探しているのであれば、次の言葉を聞くが良い。＜これは主の門である。正しき者たちがその中に入ってゆくであろう＞。7) 多くの門が開かれるが、正義のうちにある門はキリストのうちにある門であり、＜そこに入る者はすべて幸福であり、自らの歩みを敬虔のうちに正す＞。これはすなわち、覚知的な敬虔という意味である。8) クレメンスは『コリント人たちに宛てた書簡』の中で、教会の判断により正当であるとされた教えの相違点について詳細に述べている。＜信仰深い人、あるいは正しき人、また言葉の判断において知恵のある人、あるいは業において練達の人が覚知を語り出す＞。

## VIII. 詭弁の諸技巧は偽りであること。

39.1) しかるに詭弁の技巧は、ギリシア人たちが追い求めてきたものであるが、幻想上の力であり、憶見の言辞によって、虚偽を真実のように作りなすものである。なぜならこの技巧は、弁論術を説得に向け、論争術を競技に向けて提供するからである。かくして、もしこの技巧が哲学を伴うのでなければ、すべてに対して一層害多きものとなるであろう。2) 実際プラトンは、詭弁術 (sophistikē) をためらうことなく「悪しき技」と呼んでいるし (cf. セクストゥス・エンピリクス『学者たちへの反駁』2.12)、アリストテレスもこれに追随して、この技を「盗みの術」と表明している (cf. アリストテレス『ヒカ』126a30)。それはこの術が、知恵の業すべてをもっともらしく盗み取り、本来取り組んでいない知恵を標榜しているためである。3) 端的に言うならば、ちょうど弁論術に関して、その端緒は「もっともらしき事柄」、その業は弁証法的証明、その目的は説得

であるのと同様に、論争術の端緒は思いなし、その業は論争、そしてその目的は勝利である。4) 同様に、詭弁術の端緒は外観、その業は二重であり、弁論術から来るのは推論、弁証法から来るのは問いかけの術、そしてその目的は驚愕である。5) さらにまた、対話を用いてのおしゃべりの弁証法は、反駁する力を養うための、蓋然的な事柄をめぐる哲学者の鍛錬である。だがこれらのうちには、どこにも真理はない。40.1) したがって正真正銘の使徒は、相応しくも次のように述べ、その際に、それら言辞をめぐる術智を貶めている。くもし誰か、健全な言葉に身を委ねることをせず、何も知らないのに何らかの教えに惑わされ、探索と言葉遊びに病んでしまう者がいれば、そこから生じるものは、理性において腐敗し、真理からそれてしまった者どもの争い、妬み、誹謗、邪推、口論だけである> (1テモ6,3-5)。2) 使徒が彼らに対していかに憤っているか、お分かりであろう。使徒は彼らの言葉の術智を「病」と呼ぶ。その術智のゆえに、彼らは高慢になっているのである。彼らには戯言が親しいが、それは悪しき術智である。たとえそのソフィストたちが、ギリシア人であれ、あるいは異邦人であれ、変わりはない。3) 悲劇詩人のエウリピデスも『フェニキアの女たち』の中で、いとも美しくこう述べている。

「不正なる言葉は病んでおり、  
自らのうちに知恵ある薬を必要とする」

(エウリピデス『フェニキアの女たち』471以下)。

4) というのも「健全な」と言われているのは救いの言葉であり、それ自体が真理であって、健全なるものは永遠に不死性のうちに留まる。しかるに健全さと神性からの離反は、非神性および死をもたらす情動である。5) これらの狼は、羊毛に身を隠して羊の略奪者となり、誘拐犯そして言葉巧みな口寄せとして、人知れず盗みを働き、類まれな強奪者として、初心なわれわれを策略と暴力で奪取すべく格闘する。いわばわれわれを劣等で無能力者と言わんばかりに。

41.1) 「人はしばしば雄弁の欠如に捕らえられ、  
正しきことを言いながら、言葉巧みな者よりも力を出せない。  
今や彼らは、流暢な口で最も真実なるものを盗み出し、  
そう見えるべきものがそう見えないようにしてしまう」

(エウリピデス『アレクサンドロス』断片 56)

と悲劇は語っている。2) このような論争的な連中は、諸異端の後を追うにせよ弁証法の技術を鍛錬するにせよ、帆を引き降ろして何も織り成すことをせず、虚しい労苦を追ひ求める、と使徒は言っている。その労苦のことを使徒は「人

間どものサイコロ遊び」また「詐欺」と呼び、これらは欺瞞のずるがしこさには必須である。3) <というのも>、使徒は言う。<実は、不従順な者、無益な話をする者、人を惑わす者が多い>（テス1,10）。決してこれは、すべての人々に向けて述べられているわけではない。<あなた方は地の塩である>（マタイ5,13）。4) なぜなら御言葉に耳を傾ける者であっても、海の魚になぞらえられる者があり、彼らは誕生のときから塩水の中で養われ、塩を準備してやる必要がある。5) わたしには、次のように語る悲劇がよく理解できる。

「お小子よ、良く語られた言葉が偽りであれば良いが、  
言葉の美しさ故に、それらは真理に対し勝利を収めるだろう。  
だがそれがもっとも正確なものではなく、  
本性であり正しきものなのだ。言葉の巧みさで  
勝利を収める者は、知者ではあるが、  
事柄のほうに常に、言葉よりも上位にあるのだ」。

（エウリピデス『アンティオヘ』断片 206）

したがって、多くの人々の気に入られるようにということは、決して追求すべきことではないのだ。なぜなら彼らを喜ばせる事柄は、われわれが追求することではないのだから。またわれわれが知っている事柄は、彼らの状況とは大きくかけ離れているのだ。使徒は言う。<われわれは、虚しい営みに盲目となって互いに挑みあったり、互いにねたみあったりすることはやめよう>（ガラテヤ5,26）。42.1) 同じことは、いわば神に取り付かれたように真理を愛するプラトンが述べている。<わたしは、よく観察して最善だと思われる言葉以外のものには決して従わないような、そんな類の人間なのだ>（プラトン『クリト』46B）。2) つまりプラトンは、理性と知識なく憶見を信用する人々を責めているのであり、正しく健全な言葉を離れて虚偽に与かる者を信用することは適切でないと主張するのである。真理を偽るのは悪であるが、真理を述べ諸存在を栄光化するのは善である。3) しかるに人間たちは、諸々の善から心にもなく引き離され、引き離されつつ盗まれ、魔術をかけられ、強いられ、真実ならざる言葉を信用しているのである。4) 虚偽を信用する者は、すでに進んで虚偽に囚われている。変節を説きつけられた者、ないし忘却の極まった者は盗みを働かれたのであり、あるものを時間が、あるものを言葉が取り去られて忘却させているのである。しばしば、悲嘆、悲しみ、対抗心、そして憤りが意見を変えるように強いる。そして快楽に魅了され、あるいは恐怖のゆえに恐れに陥る者どもは、総じて魔術を懸けられているのである。すべては非随意的なあり方であって、こ

れらのうちの何物も、決して知識を駆逐することはない。

## Ⅸ. 理性に根ざした信仰は単なる信仰よりも望ましいこと.

43.1) しかるに何人かの人々は、素質はあると思われるのに、哲学にも弁証術にも取り組もうとしない。また自然に関する観想を学ぼうともしない。ただ信仰だけを追い求めて、そのさまはあたかも、ブドウの木に対していかなる世話も良しとせず、最初から直ちに房を取ろうとする者のようである。2) しかるに主は比喩的に＜ブドウの樹＞(ヨハネ 15,1)と言われる。これは主にあっては、配慮と、ロゴスに適った農学的な技術をもって、その実りを刈り入れるべきだからである。そのためには剪定・掘削・縛りその他の手入れが必要である。思うに、大鎌、つるはし、その他の農具は、われわれのため、ブドウが食用に足る実りを付けるように世話をする上で欠かせまい。3) 農術と同様、医術においてもそうだが、極めて多彩な学びの内容を扱った「教則本」は、より良く耕すこと、より健康であることができるように作られている。ちょうど同じように、この哲学にあっても、わたしはすべて真理へと向かわしめる事柄は「教則」的であると言いたい。かくして、幾何学、音楽、文法学、そしてまさしく哲学そのものから有益なものを摘み取り、信仰を攻撃されぬよう守り抜くことが肝要なのである。陸上競技者の例は看過して、既に述べたように(『パイドーゴス』2.1.2.1)、競技に向けて準備すべきなのである。44.1) またわれわれは、＜多くの人々の町々を＞(cf. ホメロス『オデュッセイア』1.3)知っている経験を積んだ舵取り役や、多くの人々の症例に出会った医師を賞賛するが、その人のことを経験豊富な者とする人々もある。2) 一方、ギリシア人や異邦人たちから真っ直ぐな生き方を引証し、各々の範例を持ち出す人は、経験豊富な真理の探究者にして真に「策多き」(ホメロス『イリアス』1.311 ほか)人であり、まるで試金石のごとくに(リュディア産の石は、正真正銘の金からまがい物を判別することができる)と信じられている)、われわれのうちで「知恵に満ち」(ホメロス『オデュッセイア』15.459)、覚知者として、哲学とソフィストの術を、肉体鍛錬術と粉飾の術を、医術と料理の術を、弁証法と修辭の術を、魔術やその他の異邦人の愛智に反する異端と真理そのものを見分けるに十分な力を有する。3) 思惟されるものに関して哲学する者が、神の力を望み、それに習熟した者となるに至ることが、どうして必須でないことがあろうか。はたまた、律法に関して二義的な言葉と、同様の意味を帯びた言葉を峻別することが、どうして有益でないことがあろう



か。4) 二義性に関して主は、試練の時に、悪魔に対して策で打ち勝った（マタイ 4,4）。したがってこの件に関してわたしはもはや、哲学と弁証法の発見者であれば、ある人々が憶測しているように、二義性のやり方に欺かれて迷う、ということは決してないと考えている。

45.1) だがもし、預言者たちや使徒たちが哲学にとっての鍛錬と思われるような技術を知らず、端的に預言者的な、また弟子としての霊を備えた理性が、万人にその声を理解できるのではないような仕方で神秘的に語ったのだとすれば、その理性は、教えを明瞭にするため、術知を要求していることになる。2) 預言者と霊の弟子たちは、この理性を置くことなく知悉していた。というのも信仰からでなければ、霊が語ることは容易ではないからである。3) それにしても、学んだ者でなければ、これを受け容れることは不可能である。聖書は言う。＜意向と知識の二面から、掟を書き記すことにしよう。あなたに反駁する者どもに対して、真理の言葉を回答することができるように＞（箴言 22,20 – 21）。4) では「回答のための覚知」とは何であろうか。それは尋ねるための覚知でもあろう。そうすると、これは弁証術的なものだということになるだろう。5) ではどうなのか。語るということは、ロゴスから為すという業ともなるのではないか。というのもし、われわれがロゴスから何かを行うというのであれば、そのやり方はロゴスに則っていないものとなるだろう。しかるに理性的な業とは、神によって完成を見るものである。＜ロゴスなくしては、何事も成らなかつた＞（ヨハネ 1,3）。つまり、神の言葉なくしては、という意味である。あるいは主もまた、すべてをロゴスに基づいて行ったのではなかつたか。主は恐れに強いられて駆られる家畜の奇跡を起こしたのであつた（ルカ 8,33）。また「正統派」と呼ばれる人々にしても、自分たちが何をしているのか知らずに、美しき業に身を委ねることはできないのではないか。

## X. 弁舌における饒舌は避けるべきこと。

46.1) それゆえ救い主はまずパンを取り、言葉でもって感謝した。しかる後パンを割いて献げた。これはわれわれがロゴスに沿って（logikōs）食し、聖書を認識して（epignōn）、従順（hypakoē）のうちに生活することができるためである。2) ちょうど悪しき論理を用いる者が、悪しき業を用いる者どもとなんら違いがないのと同じように（悪魔とは剣のしもべであり、誹謗は苦痛を生み出し、そこから人生の破滅が生じる。悪しき論理の業とはこのようなもの

であろう), 善き論理を用いる者たちは, 業の美しさを完成させる人々に近づく.

3) かくして論理もまた, 靈魂を獲得し, 善美に向かう. この双方に長けた者は幸いである. 善く語ることができる者に対して, 善く為すことのできる者を誹謗してはならない. また, 善く為すことに長けた者に対して, 善く語ることのできる者をあしざまに言ってはならない. 4) それぞれの本性が向くままに, 働きをさせればよいのである. しかるに業が示す事柄に関して, 人が異なれば語りようも異なる. たとえば善行に向けて道を備える者が, 耳を傾ける者たちを善き業にも導くような場合である. なぜなら救いの言葉は, その業も救いをもたらす. 実に, 言葉を伴わない正義など, 成立しないのである. 47.1) もしわれわれが, よく為すことを取り去るのであれば, よく被ることも奪い取られる. 同じく, もし掟と, 掟を明確に説明してくれる者が併せて受け容れられるのでなければ, 従順も信仰も取り去られる. だがいま, われわれはその双方のために, 言葉にも行いにも事欠かない. 2) しかるに論争術も詭弁術も完全に避けるべきである. なぜなら詭弁家たちのかの言辞は, 多くの人々を魔術に懸け盗み出すだけではなく, 強いらればカドモスの勝利をも取り去ってしまうものである. 3) というのも, すべてにまさってかの詩篇が真実を伝えている. <正しき者は最後まで生き, 知者たちが死ぬのを見ることがあっても, 破滅を見ることはない> (詩篇 48,10 以下). では誰のことが「知者」と言われているのだろうか. 『イエスの知恵』に聞いてみよう. <悪事の知識は知恵ではない> (シラ 19,22). これはすなわち, 言辞の術知, 弁償術の術知が考案したようなものを言っているのである. 4) <悪人どもの許に知恵を探してみよ. 見出すことはできないだろう> (箴言 14,6). もしかすると再び気づけるかも知れない. それはどのようなものであろうか. <正しき者の口は知恵を滴らせる>. ちなみに知恵は真理と同意語であるということは, 詭弁術でも言われていることである. 48.1) しかるにわたしとしては, 思うに, 重要なのはロゴスに従って生きること, 意味された事柄を思惟することであって, 言辞の良さを決して求めない者は, 思惟された事柄を仄めかすことだけに十分であろう. わたしが提示しようと望んでいる事柄が, どのような名前でもって明らかにされるのか, そのことにわたしはまったく関心がない. というのもわたしは, 救われること, そして挙げられることというのは, 救われることを希求する人々にとって最善であり, こまごました表現を, あたかも秩序立てる大切なものでもあるかのように並べ立てるのは意味がないということをよく知っている. 2) プラトンの『政治家』篇におけるピュタゴラス派の人物は, 「もしあなたが名辞に

熱を挙げるということに固執しないならば、賢慮の賜物に関してより富める者であることが明らかにされるだろう」と言っている（プラトン『政治家』261E）。3) あるいは『テアイテトス』篇においても、次のような発言が見出される。「語と句について気かけないこと、精確さに関わって調べ上げはしないということは、多くの点では卑しからぬことであるが、むしろその逆のことが卑しからざる場合があり、否ときにはそれが必須である場合もあるのだ」（プラトン『テアイテトス』184BC）。4) これらの事どもを、聖書は可能な限り簡潔に＜語句に関して冗長になるな＞（コリ11,3）と表明している。なぜなら、言辞はいわば身体の上にはおる衣服のようなものであり、事柄が肉であり神経である。したがって肉体の健康の前に衣服のことを気遣うべきではない。5) 真実の生に入ろうとする者にとっては、もしわれわれが放縦を、偽りに満ち希望のないものとして拒否するのであれば、簡素な生活ばかりでなく、単純でこだわりのない言葉に向けても鍛錬せねばならない。さながらいにしえのスパルタ人が、香油と紫衣を控えたようにである。つまり外套は偽りに満ち、塗油も偽りに満ちたものというふうに正しく考え、そう名づけたのであった。というのも育てるのに必要な分よりも多くの調味料を有していることは、決して良き食糧の蓄えとはならず、言葉の用い方も洗練されず、それは聞く者たちにとって、役立つよりもむしろ喜ばせるようなものとなりうるからである。6) セイレーンよりもムーサイのほうをより甘美であると考えるように、とピュタゴラスは勧めている。知恵を陶冶することを、快楽とともに学ぶのではなく、他の靈魂の導きをよく吟味してセイレーンを虚偽に満ちたものとすべきだからである。セイレーンの傍らを通過するのは一人で十分であり、スフィンクスに応答するにも別の一人で十分であり、それはもしあなたが一人でないことを望んだとしてもそうである。49.1) 虚しい名誉を求める者たちが＜聖句の入った箱を大きく見せる＞（マタイ23,5）必要はまったくない。覚知者には、もし一人だけ聴衆が見出されれば、それで十分なのである。2) 実に、ボイオティアの人ピンダロスがこう記しているのを聞くことができる。

「古の言葉を、すべての人々に向かって撒き散らすのはやめよ。  
黙っているときにこそ、道はもっとも信用され、もっとも抜き  
ん出た言葉が  
戦いのための突き棒となることがあるのだから」

（ピンダロス、断片180）.

3) 至福なる使徒が、われわれに対して次のように勧告し、これを実に上手く

敷衍してくれている。＜まったく役に立たないことをして、聴き手たちの気を削ぐようなことに言葉をあげつらったり、神聖でなく虚しいお喋りに立ち混じったりしないようにせよ。それらは大概の場合、不敬を増大させ、彼らの言葉は悪性の腫れ物のように拡大する＞（2テモ2,14.16 以下）。

## XI. 神的な書物のよりよき理解という唯一の意図とともに 勉学はなされるべきこと。

50.1) 実にこのような＜世の知恵は、神の前の愚かさである＞（1コリント 3,19-21）。そしてこれらの＜知恵者たちの主は、議論が虚しいということを知っている＞。だから何びとも、人間的な思惟において秀でているなどと言って誇ることがあってはならない。2) このことは、『エレミヤ書』の中でたくみに記されている。＜知者は、おのれの知恵において誇ることがあってはならない。力強き者は、おのれの力において誇ることがあってはならない。富める者は、おのれの富において誇ることがあってはならない。むしろ誇る者は、次のことにおいて誇るがよい。すなわちわたしこそ、地の表に憐れみと裁き、それに正義をおこなう主である、ということを理解し、知っているということにおいて、と主は言われる＞（エレミヤ 9,23 以下）。3) また使徒は言っている。＜われわれがおのれに信頼することがないように、むしろ死者を復活させた神により頼むように。神は、これほど大きな死の危険からわれわれを救ってくださった。それはわれわれの信仰が人間の知恵のうちにではなく、神の力のうちにあるためである。というのも霊的な人間はすべてを裁くが、自らは何者にも裁かれないからである＞（2コリント 1,9；1コリント 2,5）。

4) しかるに、わたしは彼の次のような言葉をも耳にする。＜わたしがこのように言うのは、あなた方が巧みな議論にだまされないようにするためである＞（コロサイ 2,4）。また＜捕虜を連れる者＞（コロサイ 2,8）が忍び寄ることのないようにするためである。5) さらにまた、＜人間の言い伝えによる哲学や虚しい迷妄を通じてあなたがたを捕虜にする者が現れることのないように。それは世を支配する霊によるものであり、キリストによるものではない＞（コロサイ 2,8）。6) ここで哲学というのは、すべての哲学を指すものではなく、エピクロス派の哲学を指す。この派の哲学について、パウロは『使徒行録』の中でも言及し、摂理を廃し、快楽を神聖化するものだとしてこれを排斥し、また他の要素に対し、それらに対する創造的な原因を立てることがなく、また創造者を想起す

ることがないものだとしている（使徒 17,18）。51.1）そればかりではなくストア派も（彼はこの派についても言及している）、神とは物体であり、それは最も卑しい質料にも浸透していると語っているが、これは良くない。2）ストア派は、形式的銜学主義のことを「人間的伝承」と呼んでいる（クリシッポス、断片 1040）。それゆえ次のようなことを命ずるのである。＜新規な探求を避けよ＞。そのような競争心は若気の至りだからである。哲学者のプラトンはこう言っている。＜徳とは少年の好むところではない＞（典拠不詳）。3）またレオンティノイの人ゴルギアスによれば、＜われわれの闘いは二重の徳を必要とし、それは勇氣と知恵である。危険に耐え抜くことは勇氣に属し、謎を知るのは知恵の業である＞。というのも＜言葉は＞、オリュンピア競技会での＜布告のごとく、望む者を招くが、能力のある者に栄冠を与えるからである＞。

4）かくして御言葉は、信じる者が、真理に対して不動であったり、まったく怠惰であったりすることを望まない。御言葉はこう語る。＜探せ、そうすれば見出すであろう＞（マタイ 7,7）。だが主は、探求を発見にまで至らしめ、虚しきナンセンスを駆逐し、われわれのために信仰を装備する観想を是認するのである。使徒は言う。＜このことをわたしが言うのは、誰もあなた方をもっともらしい議論で欺くことがないようにするためである＞（コリサイ 2,4.6.8）。すなわち彼はここで、そういった人々によって語られた事柄を学んだ者どもを峻別して、教わる人々を提起された諸命題から惑わせることに警鐘を鳴らしているのである。52.1）＜だから、あなた方はイエス・キリストを主として受け容れたのであるから、そのうちに歩むがよい。キリストのうちに根を下ろし、そのうちに作り上げられ、信仰のうちに確かなものとされよ＞。しかるに信仰の確証とは説得である。＜あなたがたを奪い取るような者が現れないように注意せよ＞。これはキリストに対する信仰から奪い取る、の意であり、それは＜哲学と虚しき虚妄による＞。それは先見を奪い去ることであり、＜人の伝承に基づく＞。2）というのも神的な伝承に基づく哲学は先見を立て確立するものであるが、それが奪い取られると救い主に関わる経綸はおとぎ話に映り、＜世の諸物によるのであってキリストに拠ることなく＞われわれが影響される。3）というのもキリストに聴従する教えは、創造者をも神とし、微細な部分に及ぶまで摂理を透徹させ、諸要素の本性が変化し生成することを見抜き、力の限り神に似た者として生活することを教え、経綸をこそすべての教養を統括するものと認めるべきことを教えるのである。4）要素としては、ディオゲネスは大気を崇敬し、タレスは水を崇め、ヒッパソスは火を尊び、原子を始まりとして立てる者たち

もある。彼らは哲学の名を被ってはいるが、いわば無神論的な人間論者で快樂主義者である。53.1) 使徒は言う。〈それゆえにわたしは祈る、あなた方の愛が、覚知とまったき感覚のうちに、さらにもっと豊かになるように、そしてあなた方が、諸相違点に関して吟味することができるように〉(フィリ 1,9 以下)。というのも、この同じ使徒は語る。〈われわれがまだ子供であったころ、われわれは世のさまざまな要因に隷属していた。しかるに子供というのは、たとえ世継ぎであっても、父親によって定められる時期までは、奴隷と何ら異なることがない〉(ガラテヤ 4,3.1.2)。2) したがって哲学者さえも、キリストによって成熟した男性とされるまでは、子供なのである。というのもしくは妾腹の子は、自由人女性の子とともに相続に与かることはない〉としても、実際にアブラハムの裔なのであれば、約束に拠ることなく自身の賜物を受け取っているのである。〈硬い食物は、完全な人々のためのものである。その人々とは、習性によって鍛えられた諸感覚を有し、美と悪との識別ができるようになっている人のことである。というのもすべて、乳に与かっている人は、正義の言葉に対しては無経験だからであり〉(ヘブライ 5,14.13)、すなわち子供であって、まだ、そこにおいて彼が信じるに至りまた内的に活動している御言葉を知らず、そのうちに原因を帰すことができない人である。4) 使徒は言っている。〈あなた方はすべてを吟味し、美を保持しなさい〉(1 テサロニケ 5,21)。これは使徒が、真理に従って語られたすべてを判断し、真に真理に属することであるかあるいはそう思われるだけか、といった問題について、弁別しうる霊的な人々に対して述べていることである。54.1) 〈教養は吟味されぬとき彷徨い、打撃と反駁は知恵の教養を与える〉(箴言 10,17)、すなわち明らかに、愛を伴った反駁である。〈真っ直ぐな心は覚知を追究する〉、それは〈神を求める者は正義を伴った覚知を発見し、それを真っ直ぐに求める者は、平和を見出す〉。2) 聖書は言う。〈わたしは傲慢な者たちの言葉ではなく、その力を知る〉。ここに記されているのは、知者だと思い込んでいる人々であり、真の知者ではないのだということを、著者は非難しながら述べている。3) 〈というのも神の国は言葉のうちにあるのではなく〉(1 コリント 4,19 以下)、すなわち、真実ならざる言葉のうちにあるのではなく、むしろ、蓋然性のある仮説のうちにある。使徒は言う、〈力のうちに〉。というのも、ただ真理だけに力があるからである。4) さらに使徒は述べる。〈もし誰かが、あることを知っていると思っても、決して、知るべきあり方で知っているのではない〉。というのも、真理は思いなしでは決してなく、覚知の仮説が〈充溢し〉、虚無を満たすのである。〈愛は建てる〉



が、それは思いなしのためではなく、真理に向かって巡るためである。そこからくもし誰かが愛するなら、その人は知られる（1コリント8,3）と彼は述べる。

## XII. 『ストロマテイス』は卓越した思慮をもって 至高の真理に入ることを許すこと。

55.1) さて伝承は、ロゴスの偉大さに気づく者にとって必ずしも共通のものでも、一般的なものでもない。したがって＜神秘のうちに語られた智慧＞（1コリント2,7）は隠されねばならない。この智慧は神の子が教えたものである。2) 実に、すでに預言者イザヤが、その舌を火で浄められている（イザヤ6,6）。それは言わば、幻影を見ることができるようになるためであった。そして舌のみならず、われわれにとっては聴覚も浄められることが相応しい。もし真理の分有者であることを試みるのであればである。3) わたしにとって、このことを書き記すことには障害が伴う。またいま、それを畏れ多くも感じている。なぜなら聖書には＜豚の前に真珠を投げてやるべきではない。それを足で踏みじり、向き直ってあなた方に嘔みついてくるといけないから＞（マタイ7,6）と記されているからである。4) というのも、真理の光に関するまさしく浄らかで眩いばかりの言葉を受け容れることは、下劣で教養のない聴衆には困難なことだからである。実際、多くの者たちにとって、これらの事どもよりも笑止千万な話はほとんど存在しないし、一方、本性的に優れた人々にとっては、これらよりも驚嘆すべき、また熱狂すべき事柄は存在しないからである。56.1) ＜自然の人は神の霊に関する事柄を受け容れない。彼にとってそれは愚かしいことであるから＞（1コリント2,14）。＜知恵者は、評議会で協議されたことを口から流したりしない＞（箴言24,7）。2) むしろ、主はこう述べる。＜あなた方が耳で聞いたことを屋根の上で言い広めよ＞（マタイ10,27）。これは、真なる覚知の隠された伝承を、崇高かつ卓越したかたちで解釈し、それを受け容れるように命じるものであり、われわれが耳で聞いたとおりに、必要とする人々に伝えるべきであり、譬えて語られた事柄をすべての人々に見境なく告げて広めるべきではないことを言うものである。3) むしろ、覚書の輪郭は真に、散らかったかたちで脈絡なく蒔かれた真理を有するものであり、嗜好きの連中に知られることなく、コクルマガラスのように叫ぶのが目的である。したがって善き農夫にまみえたなら、その各々が発芽し、小麦を実らせるであろう。

### XIII. ギリシアおよび非ギリシアの哲学は真理の胚芽を 内包していること.

57.1) かくして、真理とはただ一つである（虚偽は多数の異種を有する）。ちょうどペンテウスの手足をバックスの信女たちが八つ裂きにしたように、異邦にしてもギリシアにしても、哲学の異端諸派は、その各々が、自らの得たものを真理のすべてであると喧伝している。しかるに、思うに、万物は光が東から昇ることによって照らされる。2) したがってギリシア人も異邦人も総じて、真理を希求する者であれば、真理のロゴスに関して、ある者は少なからぬ部分を、またある者はその一部を、もし可能であれば、それを示され、所持したのである。3) 実に、時間の一世代というものは、未来・現在・さらにはもちろん過去がつかの間ずつ成立させているのであるが、真理は、この一世代よりもはるかに強力に、自らに固有の種子を集める。たとえそれが別種の土地に落ちたものであったとしてもである。4) というのも異端諸派において教説化されたものが、実に多種多様であることをわれわれは知る（ちょうどハーレムに住む後宮たちが、ロゴスを男性として、それとの交わりを完全に断ってしまうのと同様に、完全に耳が聞こえなくなってしまった者、あるいは本性的な経緯から切り離された者でなければ）。もし相互に似ているようには思えなくても、その類また真理全体には協和するものである。というのも、四肢としてまた部分として、あるいはエイドスとしてまた類として、一者には触れ合うものであるから。5) しかるにすでに、最下弦に対して最上弦は正反対であるが、その双方があいまって一なる調和を奏でるのと同じように、また数字に関しては、偶数は奇数と異なるけれども、両者は代数学において協和するのと同様に、はたまた、円と三角形、四角形、また形状というものすべてが、形に関しては相互に異なるのと同様である。ちょうどそれと同じように、全宇宙においても、あらゆる部分は、たとえ相互に異なっているにせよ、全体に対する親縁性を維持しているのである。6) であるから、異邦人の愛智もギリシア人の哲学も、もちろんディオニュソスの神話ではなく、永遠に実在するロゴスの神学をめぐって、永遠の真理に対するいわば引き裂きを行ってきたのである。しかるに分かたれたものを再び集め、完全な形での一つのロゴスを難なく編み出すことができ、真理を実観することができることがよく解る。58.1) 実に『コヘレトの言葉』にはこう記されている。＜わたしは、自分の前にエレサレムにいたすべての人々にまさって知恵を増した。わたしの心は多くの事柄を知り、わ

たしは知恵と覚知、比喩と知識を身につけた。これこそ霊の選択であり、知恵の充溢における覚知の充溢である>（『コハトの言葉』 1,16 – 18）。2) その者こそ、あらゆる種類の知恵を経験した者、まったく覚知者と言える存在であろう。こう記されている。<知恵の覚知の余剰は、その傍らにいる者を活性化する>（『コハトの言葉』 7,13）。3) また、次の言葉は、語られた事柄をより明確に確立する。<すべては、思惟する者の前にある>（箴言 8,9 – 11）（ここで「すべて」とはギリシア的なものと異邦人のものであって、それ以外はまだ「すべて」には含まれない）。<感覚を取り払おうと望む者たちには、（すべてが）真っ直ぐになる。代わりに選ぶべきは教養であり、金銭ではない。吟味された金にまさるのは覚知であり、これを選び、淨らかな金に代えて感覚を損ね、高額な石にも智慧は勝り、すべての宝石もこの智慧には値しない>。

#### XV. ギリシア哲学の学統。

59.1) さてギリシア人たちは、オルフェウスやリノス、それに彼らにとっての最古の詩人たちに続き、知恵において秀でた人々が「7人の賢者たち」と呼ばれて崇敬されていると伝えている。そのうちアジア出身の者は4人、つまりミレトスの人タレス、プリエネの人ピアス、ミテュレネの人ピッタコス、そしてリンドスの人クレオブロスである。またヨーロッパ出身の者は2人であり、それはアテナイの人ソロン、ラケダイモンの人キロンである。しかるに7人目に関して、ある人はコリントの人ペリアンドロス、またある人はスキュタイの人アナカルシス、またある人はクレタ人のエピメニデスであるとしている。2) このエピメニデスに関しては、使徒パウロが『テトスへの手紙』の中で言及し、こう述べている。<彼らのうちで、傑出したある預言者は次のように語っている。

「クレタ人はいつも嘘つき、悪しき獣、怠惰な大食漢。

しかもこの証言は真実である>（テトス 1,12 以下）。3) こうして使徒が、いかにしてギリシア人の預言者のうちにもなにがしか真理を付与し、（信の）確立と批判のために議論をなし、ギリシア人の詩行を活用することをも恥じないかが理解できるだろう。4) 実際彼はこれに限らず、コリント人に対し、死者の復活をめぐる議論を挑み、悲劇の短長格韻律を用いてこう述べている。<もし死者が復活しないとすれば、わたしに何の益があろうか。「大いに食べ、飲もう。どうせ明日は死ぬ身なのだ」ということになる。思い違いをしてはならない。

「悪しき交わりは善き習慣を毀つ」(メンドロス『タイス』断片 218)

のだから> (1 コリント 15,32). 5) 一方、ある人はアルゴス人のアクシラオスを、また別の人はシュリアの人フェレキュデスを7賢人のうちに数え上げている。しかるにプラトンは、ペリアンドロスを、僭主になったことを理由に智慧にふさわしくないとし、彼の代わりにケナイの人ミュソンを挙げている(プラトン『プロタゴラス』343A). 60.1) ギリシア人たちのうちの賢者たちは、モーセの年齢よりも若いということは、少しく後で示されるであろう(『ストロメイス』1.20.107). しかるに彼らの哲学の方法というものは、ヘブライ人のそれが謎に満ちたものであると同様に、すでに懐疑的である。勧告的な簡約語法を、最も有益であるとして歓迎する。ほかならぬプラトンが、以前は熱心に、この方法が全ギリシアに一般的であったが、特によく統制されたスパルタ人やクレタ人にはやったと述べている(プラトン『プロタゴラス』343B).

3) さて、かの有名な<汝自身を知れ>について、ある人々はキロンの言だと推測しているが、カマイレオンは神々について述べたタレスの作品中にあるとし、一方アリストテレスは、ピュティアの巫女の言葉だとしている(アリストテレス、断片 3). この格言は、覚知を追求するように勧告する内容だと解することができる。4) というのも万物の実体なくしては、部分を知ることが不可能だからである。そこで宇宙の誕生について論じなければならない。その誕生の次第を通して、人間の本性をも学ぶことができるからである。61.1) さらにまた、<度を過ぎずな>という箴言は、スパルタ人のキロンに帰されている。一方ストラトンは、『発見について』という著書の中で、この金言をテゲアの人ソダモスのものとしており、またディデュモスはこれをソロンの言葉としている。それはちょうど、「最高の尺度」という言葉がクレオプロスものとされるのと同様である。2) しかるに「誓願に際しては、迷妄からは離れよ」という言葉を、クレオメネスは『ヘシオドスについて』という著書のなかで、ホメロスによって語られたものだとしている。その典拠は、

「不甲斐ない奴らの誓言は、誓言にとっても不甲斐ない」

(ホメロス『オデュッセイア』8.351)

である。しかるにアリストテレス派の人々は、これをキロンのものと考えており、ディデュモスはこの勧告をタレスのものであるとしている。3) しかる後、これに続いて<すべての人間は悪人である>ないし<人間の大半は悪人である>(同じ金言が二通りに語られる)については、ビュザンティオンのソタデス派の人々は、ピアスのものであると言っているが、「配慮はすべてを清める」を

ペリアンドロスの作であると考え、同様に「汝自身を知れ」をピッタコスの勧告であると理解している。4) ソロンはアテナイ人のために、またピッタコスはミテュレネの人のために法を制定したのである。遅れてフェレキュデスの子のピュタゴラスが間違いなく、自ら初めて「哲学者」と名乗ったのであった。

62.1) さて哲学は、前述の人々の後、3つの流派が、それぞれディアトリベ（談論）を行った場所を冠して成立した。すなわち、ピュタゴラスに発するイタリア派、タレスに発するイオニア派、そしてクセノファネスに発するエレア派である。2) まずピュタゴラスは、ヒッポバトスの言によれば、サモスの人でムネサルコスの子である。一方アリストクセノスが『ピュタゴラスの生涯』で述べ、かつアリストタルコスとテオポンボスが同調していることによれば、テュレニアの人である。一方ネアンテスによればシリアの人だとされる。したがってピュタゴラスは、大方の人々によればその生まれは異邦人であるということになる。3) しかしながら、タレスもまた、レアンドロスとヘロドトスが語っているところによれば（ヘロドトス『歴史』1,170）、フェニキアの人であるが、また他の人々が推定するところではミレトスの人である。4) エジプト人の預言者たちが推定するように、彼は一人であったと思われる。しかるに彼の師たる人物としては誰の名も挙げられていない。たとえばシリア人のフェレキュデスの弟子でもない。ピュタゴラスはその許で学んだのであるが、63.1) イタリア派と呼ばれるピュタゴラス派の哲学は、イタリアのメタポンティオスで発展したのである。

2) 一方プラクシアデスの子アナクシマンドロスはミレトスの人であるが、タレスを継承した。このアナクシマンドロスを、ミレトスの人でエウリュストラテスの子アナクシメネスが継承し、その後、クラヅメナイの人でヘゲシプロスの子アナクサゴラスが継承した。このアナクサゴラスは、イオニアからアテナイに談論を移した。3) このアナクサゴラスをアルケラオスが継承し、ソクラテスはこのアルケラオスの講苑に連なったのである。

「彼らのうちから、彫刻家、立法家、

ギリシア人の歌人らが現れ出た」（ティモン、断片 25）

と、ティモンが『シッロの人々』という作品の中で述べているが、これは自然学者から倫理学者に転ずる動きについてである。4) しかるにソクラテスの弟子であったアンティステネスは犬儒学派を形成し、プラトンはアカデメイアに移った。プラトンの許でアリストテレスが哲学し、リュケイオンに赴いてペリパトス学派を創設したのである。このアリストテレスをテオフラストスが継承

し、テオフラストスをストラトンが、ストラトンをリュコンが、次いでクリトラオスが、そしてディオドロスが継承した。6) 一方スペウシッポスがプラトンを継承し、スペウシッポスをクセノクラテスが、クセノクラテスをポレモンが継承した。クラテスとクラントルはポレモンの弟子であり、彼らの代でプラトんに発する古アカデメイア学派は終焉を迎える。アルケシラオスがクラントルを継ぎ、そこからヘゲシノスまで、中期アカデメイア派が隆盛を迎える。64.1) 続いてカルネアデスがヘゲシネスを継承し、その後の人々がこれに続く。キティオンの人ゼノンはストア派の創始者であるが、クラテスの弟子となった。この人物をクレアンテスが継承し、その彼をクリュシッポスが継ぎ、その後に至る。

2) さてエレア学派を興したのはコロフォンの人クセノファネス (580 - 475) であり、彼に関してティマイオスは、シケリアを治めたヒエロン、および詩人のエピカルモスの頃の人であったとしている。一方アポロドロスは、彼が、オリュンピア紀第 40 期の人で、ダレイオスとキュロスの頃まで生きたと言っている。3) 次いでパルメニデス (515 - 450) はクセノファネスの弟子となり、ゼノン (499 - 430) はパルメニデスに師事して、その後レウキッポス (5 世紀後半)、デモクリトス (460/50 - 370/50) と続いた。4) デモクリトスの弟子となったのは、アブデラの人プロタゴラス (490 - 414) とキオスの人メトロドロスであり、スミルナの人ディオゲネス (400 - 323) はこのメトロドロスに師事し、以下アナクサルコス、ピュッロン (360 - 270)、ナウシファネスと続いた。エピクロス (342 - 270) はこのナウシファネスの弟子であったと言われている。

5) さてギリシア哲学の学統は、およそかい摘んで述べると以上のようなのであるが、彼らの中で哲学を創始した人々の時代を次に述べねばならない。それは、これら双方の比較において、ヘブライ人の許での哲学の方が、何世代分も古代に遡るのだということを実証するためである。65.1) まず、クセノファネスについては、エレア派哲学の祖であると言われている。一方タレスに関しては、エウデモスが『天文学史』の中で、日食が起こったときに、これを予言したと言われている。それはメディア人とリュディア人が互いに戦争を始めた頃のこと、当時メディア人は、父にアステュアゲスを持つキュアクサレスが王のとき、一方リュディア人はクロイソスの子アリュアッテスが王のときだという。エウデモスに対してはヘロドトスも (『歴史』) 第 1 巻で同意している。これはオリュンピア紀第 50 年期の頃のことである<sup>3</sup>。2) 一方ピュタゴラスは、



ポリュクラテスが僭主であった頃、オリュンピア紀第62期に見出される。3) またソロンについては、ムネシフィロスがそのライバルであったと記されており、このムネシフィロスとは、テミストクレスが交わっている。したがって、ソロンの最盛期はオリュンピア紀第46期に置かれる。4) なぜならブリュソンの子ヘラクレイトスは、僭主メランコマスに対して権力の座を手放すように説得したからである。この男は、ダレイオス王がペルシアに来てくれるよう招いたのを断っている。

#### XV. 非ギリシア人の思想はギリシア人の思想よりも古いこと。

66.1) これらの年代記は、ギリシア人のなかで最も古代の知者そして哲学者たちによるものである。しかるに彼らの大半が、その生まれに関しては異邦人であり、異邦人の許で教育を受けたということに関して、何を語る必要があるのか。たとえばピュタゴラスはテュッレーニアもしくはテュロスの人だということが明らかであるし、アンティステネスはフリュギアの人、オルフェウスはオドリュソスの人もしくはトラキアの人である。また大方の人々は、ホメロスはエジプト人であったとしている。2) タレスは、生まれはフェニキア人であり、エジプトの預言者たちに立ち混じったと言われていて、それはピュタゴラスも同様である。彼らによってピュタゴラスは割礼をも受けたが、それは彼が、神殿の至聖所にまで歩み入って、エジプト人たちから神秘の哲学を学び取るためであった。彼はさらにカルデア人やマギの最も優れた人々と交流し、今日「教会」と呼ばれているものに、ピュタゴラス派の「学校」(σχολή)をなぞらえた。3) 一方プラトンは、最も優れた教えが異邦人の許から哲学の中に流入したということを否定せず、自らエジプトに赴いたことを告白し、『ファイドン』の中では、哲学者はあらゆるところから益を得ることができると記している(プラトン『ファイドン』78A)。<ギリシアは広いのだ、ケベス。その中にはおそらく優れた人々がいるし、異邦人の人々もまた数多くいる>。67.1) かくしてプラトンは、異邦人たちの中にも哲学者たちがいると考えているのであるが、これに対してエピクロスは逆に、ギリシア人たちだけに哲学することができると想定している。2) 『饗宴』編の中でも、プラトンは異邦人たちについて、どれほどまれに見るほどに彼らが卓越した修練をおこなっていることかと賞賛している(プラトン『饗宴』209DE)。プラトンによれば、<いろいろな人々が、いろいろなところで様々に、ギリシアでも異邦人の間でも修練している。異邦人に

は多くの神殿さえも立ち、その子供たちに受け継がれている」という。3) 異邦人たちが、とりわけ自分たちの立法者や師たちを神々と呼んで尊敬しているのは明白である。4) プラトンによれば彼らは、善き靈魂が天上の場所を去り、甘んじてタルタロスに赴き、身体を帯びて、生成のうちにあるすべての悪に参与する、と想定しているという。その靈魂とは人類の守り手であり、法を敷き哲学を布告するという。〈これよりも優れた善は人類の間にはかつて、神々の許からすらも来たことがなかった〉という。68.1) わたしには、彼ら異邦人が、知者たちを通じてその人々を尊敬すること、そして広く哲学するということの大いなる善さに気づいていたように思われる。ブラフマンたちもみな、オドリュサイ人もゲタイ人も、エジプト民族も、これらの事柄を正確に神学していた。またカルデア人やアラブ人は幸福なる人々と呼ばれ、パレスティナに住んでいる人々、ペルシア民族に属す人々も、決してその類の最小の部分を成すわけではない。彼らに加え、他にも幾多の民族がある。2) しかるにプラトンは、明らかに異邦の人々を常に崇敬していたことが見て取れる。彼は、ピュタゴラスその人が、異邦人たちの教説のほとんど、またその最も真正なる部分について学び知っていたことを思い起こしている。3) それゆえプラトンは「異邦の民族」と言いつつ、異邦人の哲学的な人々の一群を知っていて、『ファイドロス』編の中でわれわれに、エジプトの王はトートよりも知恵があることを明らかにしている。このトートとはヘルメスであることを彼は知っていた。そればかりでなく『カルミデス』編の中でも彼は、靈魂を神的な存在と言われるあるトラキア人たちのことを知っていたように思われる（プラトン『カルミデス』156D）。

69.1) さてピュタゴラスは、エジプト人の大預言者ソンキスの許で、プラトンはヘリオポリスの人セクヌフィスの許で、エウドクソスは同じくエジプト人のコヌフィスの許で学んだと言われている。2) 「靈魂論」の中では、プラトンはやはり預言について知っているように思われる。なぜなら彼は、ラケシスの言葉を伝える預言者を登場させ、籤で選ばれた靈魂に向かって預言する役割を帯びさせているからである（プラトン『国家』617D）。3) また『ティマイオス』編にも、異邦人の許で学ばいとも知恵あるソロンを登場させている。この対話編には次のような言葉が見える。〈おおソロン、ソロン、あなた方ギリシア人は常に子供である。ギリシア人に老人は一人もない。あなた方は時代とともに古びるような教えを持っていないからだ〉（プラトン『ティマイオス』22B）。4) というのもデモクリトスは、バビロニア人の言葉を倫理的であるとしている。な

ぜなら彼は、アヒカルの碑文を解釈し、自身の論文にまとめたと言われ、しかも彼においてこれが解釈されたことがうかがわれて、「これはデモクリトスの言葉だ」とされているからである。5) 実際、彼は自らの博学ぶりを誇ってこう述べている。＜わたしはわが時代の大地のほとんどの部分を歩き廻り、その長さを測り、その空気と地質の大半を見て、非常に多くの学問ある人々の話を聞いた。しかし誰一人としてわたしに対し、実証をもって記した論文の訂正を迫る者はなかった。それはハルペドナプテス人たちと呼ばれるエジプト人にしても同様で、わたしは彼らの許に、ほぼ80年間客人として過ごした＞。6) 実際彼は、バビュロニア、ペルシア、そしてエジプトに赴き、マゴイや神官たちの許で学んだのである。一方ピュタゴラスは、ペルシア人のマゴスであるゾロアストレスの許に赴き、この人物の経外書で、プロディコス一派の者たちが異端だと叫んだものを獲得したとされる。70.1) 一方アレクサンドロスは『ピュタゴラスの象徴について』という著書の中で、アッシリア人のザラトスという人物の許でピュタゴラスが学んだと記しており（ある人々はこの人物をエゼキエルだと解している。しかし後に明らかにされるように、そうではない）、彼らに加えてピュタゴラスがガラタ人やブラフマンたちからも教えを受けたものと理解している。2) 一方ペリパトス派のクレアルコスには、あるユダヤ人を知っていたと言われており、この人物はアリストテレスとも親交があったとされる。3) というのもヘラクレイトスは、シビュッラには、未来が、人間の仕方ではなく、神とともに現れると言っている（ヘラクレイトス、断片92ディールス）。実際デルフォイでは、神託所の傍らにある岩が示されていると言う。この岩の上には、ヘリコン山でムーサイに育てられ、そこからやって来た初代のシビュッラが座していたと言われている。何人かの人々は、彼女はマレアからやって来たラミアの娘でポセイドンの娘だとしている。4) 一方サラピオンは、自作の叙事詩の中で、シビュッラは死んでも託宣を止めることはなかったとし、死後彼女の託宣は空中に赴いたと言う。これはすなわち、うわさや知らせの中で託宣が行われるという意味であろう。一方大地に転じた彼女の体からは、ありうることだが植物が生育し、ちょうどそこに当たる場所でその植物を食んだ動物は、そのはらわたを通じ、人間のために、未来の像を正確に予知すると記している<sup>4</sup>。一方シビュッラの靈魂は、月の表面に映し出されると彼は考えている。

71.1) 以上はシビュッラについてである。一方、ローマ人のヌマ王はピュタゴラスの徒であったが、モーセから教えを受けて、ローマ人たちが神の像を、人間あるいは動物の姿で創ることを制止した。実際、王としての最初の数年に

170の神殿が建てられたが、そこには神像が創られることも、描かれることもなかった。2) というのもヌマ王は彼らに対して隠された仕方、最高の存在に対し、思惟以外の仕方、触れることができないように指示したのであった。

3) さて哲学は、大いに恩恵を施すものとして、昔から異邦人の許で盛んとなり、それは諸民族において輝きを放ったが、後にはギリシア人たちの許にも到来した。4) 哲学を主導したのは、エジプト人の預言者たち、アッシリアのカルデア人たち、ガラタのドルイド族、そしてバクトリアやケルト人のサマナである。哲学した人々としては、ペルシアのマゴイ（彼らは魔術によって、救い主の誕生をも予知し、彼らに星が導くままに、自らユダヤの地にたどり着いたのであった（マタイ2,1－6））、インドの裸形行者たちも含まれ、ほかにも異邦の哲学者たちは存在する。5) 彼らには二種類が挙げられよう。一つはサルマナ人、もう一方はバラモンと呼ばれる人々である。サルマナ人の中でも、「森林居住者」と呼ばれる人々は、町に住むことも家を持つこともせず、木々の皮をまとい、果実を食し、水を手で飲んで、結婚も子作りもしない。ちょうど現在「克己派」と呼ばれている人々の如くである。6) インド人のなかには、ブッタの教えを信奉する人々がいる。彼らはこの人物を、その卓越した威厳のゆえに神として崇めてきた<sup>5)</sup>。72.1) 一方スキュティアの人としてはアナカルシスがあり、ギリシアの多くの哲学者たちとは異なると言われている。2) 一方ヘッラニコスはヒュペルボレオイ人がリパイア山の上に住んでいると伝えており、彼らは肉を食さず、果実を享受することで正義を学んでいるという。彼らは60歳を過ぎた者たちを門から外に追い出して消すとされる。3) 一方ゲルマン人たちの間には、聖なる女性たちと呼ばれる者どもがいて、彼女たちは川の渦、流れの動きや音から判断して未来を予知するという。実に彼女たちは、ゲルマン人たちに対して、新月が照るまでは、皇帝と戦いを交えることを許さないという。4) これらの民族すべての中で、はるかに飛びぬけて年長なのはユダヤ民族であり、彼らの哲学が記されるようになって、ギリシア人の哲学を先導したのだということを、かのピュタゴラス派の人フィロンが多くの典拠を通じて実証している。だが彼に留まらず、ペリパトス派のアリストブロスやその他多くの人々もこれを行っている。ここで一々についてその名を挙げることは差し控えよう。5) 一方著作家のメガステネスは、セレウコス朝のニカトルの許で生活した人物であり<sup>6)</sup>、『インド誌』の第3巻において極めて明瞭にこう記している。＜自然についての事柄はすべて、古代の人々、しかもギリシア以外の哲学者たちによって語られたと言われている。そのあるものはインド人の

許、バラモンの人々によって、またあるものはシリアにおいて、いわゆるユダヤ人たちによって述べられたものである。73.1) だがある人々は、より神話的な言い方で、「奇術師たち」と呼ばれる人々の中の何人かの賢者たちが最初であると述べており、彼らの作のうちに、エフェソスの書き物と呼ばれるものや音楽を伴ったリズムの発見が帰せられるとしている。これを典拠として、音楽家たちの間で用いられる「ダクテュロス」<sup>7</sup>という言い方は、ここからその名を得ている。しかし彼らはフリュギア人であり、「イダイオイ・ダクテュロイ」というのも外国語である。2) しかるにヘロドロスは、ヘラクレスが預言者また自然学者として、異邦人でフリュギア人のアトラスから宇宙の運動を継承したと伝えている。この神話は、天空に関する知識を学びによって受け継いだということ象徴的に表現するものである。3) 一方ペリュトスのヘルミッポスはケンタウロスのケイロンを賢者と呼び、『ティタン族の戦い』を記した人物も彼について、この人物が最初に

「死すべき種族を正義へと導き、

誓いと悦ばしい供物とオリュンポスの形を示した」

としている。4) そしてこのケイロンの許で、トロイアに出兵したアキレウスも教育を受け（ホメロス『イリアス』11.832）、ケンタウロスの娘のヒッポはアイオロスと共棲して彼に自然学的観想、すなわち父より伝えられた知識を教えたという。5) ヒッポについてはエウリピデスも証言して次のように述べている。

「彼女が初めて神々の事柄について預言した。知恵ある託宣を

もって、東の星々について」。

（『メネッパ』断片 482）

6) このアイオロスの許で、トロイア陥落の後、オデュッセウスが歓待を受けている（ホメロス『オデュッセイア』10.1 以下）。彼がわたしのために、モーセの年代と、彼に続く哲学の古代性に関しての比較のために、時代を明示してくれんことを。

## XV. 文明の諸技芸の大半は非ギリシア人が発明したこと。

74.1) さて哲学ばかりでなく、ほとんどすべての技芸に関して、その発明者は非ギリシア人（異邦人）である。

2) まず、天文学を最初に人類にもたらしたのはエジプト人であり、同様にカルデア人もそうである。エジプト人はまた、灯りをともしることを最初に発明し、1年を12ヵ月に分割し、神殿において女性と交わることを禁じ、女性か

ら身を淨めていない者が聖域に入ってはならないという掟を定め、さらには幾何学の発明者ともなった。3) もっとも、カリヤ人が星の運行を通して占いを行う術を考え出したのだと言う人々もある。4) 一方、鳥の飛び方の観察を最初に始めたのはフリュギア人であり、犠牲の術を正確に規定したのは、イタリアの隣人トッスコス人である。5) またイサウリア人とアラビア人は鳥占の術を究めた。もちろんテルミシス人も鳥を用いる占いを行った。6) 一方テュレニア人は角笛を、フリュギア人は横笛を発明した。オリュンポスとマルシュアスはフリュギア人だったからである。75.1) 一方ギリシア人にとっての文字の発明者であるカドモスはフェニキア人であった。これはエフォロスが言っていることであり、そこから文字が「フェニキア文字」と呼ばれるということは、ヘロドトスも記している（ヘロドトス『歴史』5.58）。しかるに、フェニキア人とシリア人が最初に文字を発案したと言われている。2) 一方医術の発明者は、エジプト土着のアピスであり、それはイオがエジプトに至るより以前のことだと言われ、その後にアスクレピオスはその術を発展させたのだとされる。3) 一方リビュア人のアトラスは、初めて船を造り、海を航海した。4) 一方「イダイオイ・ダクテュロイ」（前述）のケルミスとダムナメネウスは、キュプロスで初めて鉄を発見し、また別のイダ民であるデラスは銅の調合を初めて開発したが、ヘシオドスによれば、彼はスキュタイ人だとされる（ヘシオドス、断片176）。5) 実に、トラキア人が初めていわゆる「鎌」を発明し（これは曲がった剣である）、初めて馬上で小楯を用いた。6) 同様にいわゆる「パルマ楯」を発明したのはイッリュリア人である。7) さらにトッスカン人が彫塑術を考案し、イタノス（彼はサウニタイ人であった）が最初に「扉楯」を作ったといわれる。8) フェニキア人のカドモスは石を彫る術を見出し、パンガイオン山の金鉱を発案したという。9) すでに、また別の民族であるカッパドキア人が、初めていわゆる「十二弦琴」を発明したとされ、同じ様式のものアッシリア人が「十弦琴」としているものである。10) 一方カルケドン人は、初めて四段櫓船を準備し、それを操ってボスポロス海峡で実戦に用いたという。76.1) アイエテスの娘でコルキスの女性メディアも、初めて染髪の術を考案した。2) そればかりでなくノロペス族（パイオニア人の一族で、現在ではノリアと呼ばれている）は初めて青銅を精製し、鉄を精錬したという。3) ベブリュコイ人の王であるアミュコス、初めて拳闘衣を発明したという。4) 音楽の術に関しては、ミュシアの人オリュンポスがリュディア風の調和音を考案した。またトログロデュテスと呼ばれる人々は、楽器である四弦トライアングルを発明した。5) また



フリュギア人のサテュロスは、横笛を発明したといわれている（同様に三弦のものと全音階の調和音はアグニスが発明したとされ、彼も同じくフリュギアの人である）。6) 打楽器も、同様にフリュギアの人オリュンポスが見出したとされ、マルシュアスはフリュギア流および混フリュギア風・混リュディア風の調和音を発明した。彼は前述の人々と同じ地域の出身である。またドリア人女性のタミュリスは、トラキア風を発明した。7) またわれわれが聞くところによれば、戦車と寝台と足台とは、ペルシア人が最初に製作し、またシドンの人が三段櫓船を初めて製造したという。8) イタリアに近いシケリアの人が初めて豎琴を発明し、キタラからそれほど遅れることなく拍子木を発明したという。9) さらにはセミラミスがエジプト人の王であったとき、亜麻布の衣を発明したといわれている。10) またヘッラニコスは、ペルシア人の女王であるアトッサが初めて手紙をしたためたと言っている。77.1) ミュティレネの人スカモンとエレススの人テオフラストス、それにマンティネイアの人キュディッポス、さらにはアンティファネスとアリストデモスとアリストテレス、彼らに加えてフィロステファノス、そればかりかペリパトス派のストラトンも『発見について』という著作の中で、以上のようなことを述べている。2) わたしが提示したのは、それらのうちのほんのわずかであり、それは、異邦人における発見と生活活用の特性を立証するためである。彼らからギリシア人たちは、調度類の恩恵を蒙っているのである。

3) だがもしある人が、異邦風に染まった言葉を攻撃し、アナカルシスが言うように〈ああ、すべてのギリシア人たちがスキュティア人化した〉と言うとしよう。4) この人物は、ギリシア人の許で次のように言って驚嘆された男である。〈わたしの服は外套、食事は牛乳とチーズ〉。異邦の哲学が、言葉ではなく、業を称揚するものであることが見て取れるだろう。78.1) 一方使徒は、〈あなたがたも、もし異言により、明瞭な言葉を語らなければ、どうして語られたことが知られうるだろうか。まるで宙に向かって喋っているようなものであろう。世には実に多くの種類の言葉があり、どれも意味を持たないものはない。だから、もしその言葉の意味がわからなくなれば、わたしは話し手にとって異邦人であり、話し手はわたしにとって異邦人だということになるだろう〉（1コリント14.9－11）。また〈異言を語る者は、それを解釈できるように祈るがよい〉（1コリント14.13）とも述べる。

2) 実に、遅れてではあるが、ギリシア人たちの許に、言葉の教えと書き物が到来したのである。

3) まず、ペリトスの子でクロトンの人アルクマイオンが、初めて自然論をしたためた。4) 一方、ヘゲシブロスの子でクラヅメナイの人アナクサゴラスが、最初に書物の形で著作を公にしたと述べている人もある。5) 一方、最初に曲を詩にまとわせ、スパルタ人たちの法を作曲したのは、アンティッサの人テルパンドロスである。一方、ディテュランボスで作詞したのは、ヘルミオネの人ラソスである。同じく讃歌は、ヒメラの人ステシコロスが作り、コロスによる歌はスパルタの人アルクマンであり、恋愛詩はティオンの人アナクレオン、合唱隊歌はテバイの人ピンダロス、法をコロスに載せキタラを用いて初めて歌ったのは、ミレトスの人ティモテオスであった。79.1) 実に、イアンボスを考案したのはパロスの人アルキロコス、コリアンボスはエフェソスの人ヒッポナクス、悲劇はアテナイの人テスピス、喜劇はイカリアの人スサリオンの発明である。2) これらの人々による韻律を、文法家の末裔たちが伝承しているが、それらについて正確を期して提示するのは冗長になろう。ただディオニュソスがそれを明らかにしており、彼を通じてディオニュソス風の女神たちが出来しているが、彼はモーセよりも甚だ後代の人である。3) さて、談論を通じての弁論や、修辞学的な定型句を発見し、謝礼を受け取ったのは、初めて裁判演説を披露すべく記したアンティフォンで、彼はソフィロスの子でラムヌシアの人であり、これはディドロスが述べていることである。一方キュメの人アポロドロスは初めて「批評家」という代わりに「文法家」という名前を持ち出し、文法家と名乗った人物であった。だがこれも何人かの人々によれば、最初はキュレネの人エラステネスであるという。なぜならこの人は、二巻より成る『文法論』という書物を記して公刊したからであるという。現在われわれが呼び習わしているような意味での「文法家」を初めて名乗ったのは、ミテュレネの人でディオニュソファネスの子プラクシファネスであった。4) 一方ロクリスの人ザレウコスは、初めて法を制定したと伝えられている。だがある人々によれば、最初はゼウスの子ミノスで、それはリュンケウスの時代だという。5) この人物はダナオスの後、イナコスとモーセの世代から11代目に当たる。この点については少しく後に示そう(『ストロマイス』1.20.106 参照)。6) 一方トロイアの陥落から多くの年を経て、オリュンピア紀第100期を前にリュクルゴスが現れ、スパルタ人のために法を制定した。ソロンの年代については先述した(1.14.65.3)。80.1) 一方ドラコンも、自身立法家であった人物で、オリュンピア紀第39期のころに生きたことが知られる。2) ピュタゴラスの時代からエピクロスの死までの歴史家たちのことを探究しているアンティロコスは、エピク

ロス之死がガメリオンの月の第10日であり（欠文あり）、年数は全部で312年であると算定した。3）また人々は、イカリオスの妻のファノテアはヘクサメトロスの英雄詩人であったと言うが、またある人々は、ティターン族のなかでテティスだけが女神として見出されると言う。4）一方ディデュモスは『ピュタゴラス派の哲学について』という著作のなかで、クロトンの女性であるテアノが最初に女性として哲学し、詩も書き記したと述べている。

5）したがってギリシア人の哲学は、ある人々によれば、たまたま真理の何がしかを、しかしながらあいまいにかつその全体をではなく、捉えたものである。けれども他の人々が望むように、その動きは悪魔から捉えたものである。また何人かの人々は、ある種の突出した力が全哲学に息を吹き込んだと仮定している。6）しかしながらもしギリシア哲学が真理の大きさを捉えていなかったならば、主の掟を実行するには力がなさ過ぎたであろう。だが少なくとも彼らは、最も王的な教えのために道をあらかじめ備え、何がしか賢慮を示し、また倫理性を予型的に象り、そして真理の受容のために備え、摂理の存在を推察したということになる。

## XVII. 哲学とは窃盗の一つの形であるが、それにも関わらず 恩恵をもたらすこと。

81.1) 実に、聖書にはこう記されていると彼らは主張する。＜主の来臨以前の者どもはすべて、盗人であり盗賊である＞（cf. ヨハネ10.8）。だがここで意味されている人を、御言葉の肉化以前の人々すべてと受け取るのは、あまりに広すぎる解釈であろう。2）預言者たち、主によって派遣され息吹を受けた人々は、盗人ではなく僕である。3）聖書はこう記している。＜智慧は自らの僕を、ブドウ酒の杯に向け、いと高き告げ知らせでもって召集しつつ遣わした＞（箴言9.3）。4）ところが愛智は主によって遣わされたのではなく、＜盗まれた＞あるいは＜盗人によって与えられて＞やって来た、とされている。これは、ある力もしくは天使が真理の一部を学びつつもそのうちに留まることなく、それに息吹を加え盗み教えたためである。これを主が知らなかったはずはない。なぜなら主は、世とその各々のものの成立以前から、将来起こるであろう事柄の結末を知悉しているからである（ヨハネ17.5）。ただそれを、主は阻まなかったのである。5）というのも人間世界に到来した窃盗には、およそ何らかの益というものがあり、それは窃盗を行う者が益を獲得するからではなく、その蛮行の

行き過ぎを、先見の益へと正すことによるものである。

82.1) わたしは、多くの人々が間断なくわれわれを攻撃し、妨げないことこそ原因であると言っているのを知っている。つまり彼らの言い分としては、窃盗の原因は、守らない者、阻止しない者であって、たとえば火事に際して猛威が始まったのに消し止めない者、あるいは難破のときに帆をたたまない船主がそうである。2) 法に照らした場合には、違法の原因である者どもはただちに懲罰される。というのも阻止する力が備わっている者には、その結果の原因も賦与されているものだからである。3) そこでわれわれとしては、彼らに向かって、原因は為すこと、働きをなすこと、そして行うことの内にあって考えられること、しかしながら阻止しないということは、それに関して働きをなさないということだと言いたい。4) さらに働きに関して原因であるものというのは、ちょうど船体ができあがるに際しての造船所や、家が建つに際しての家大工がまさしくそれに当たる。しかし阻止しないものというのは、できあがるものからは切り離される。5) したがって、阻止する能力のあるものが働きを為さなかったり阻止しなかったりするものは完成を見る。6) というのも、彼が阻止しないならば、何の働きが及ぶだろうか。だが、もし負傷に対して、その原因を矢ではなく、矢が貫通するのを阻止しなかった楯に求めるとするならば、すでに彼らの論理は破綻している。というのも彼らは、盗人をではなく、窃盗を阻止しなかった者を難詰することになるだろうからである。83.1) ギリシア人たちは、自軍の船団が焼き払われたのはヘクトルのせいだと言わず、アキレウスのせいだと言う。なぜならアキレウスはヘクトルを阻止することができたのにそうしなかったからである（『イリアス』15.176 以下；16.122 以下）。アキレウスは怒りの故に（怒ること、および怒りを抑えることは彼の能力のうちにあった）、火を制止しなかった。それゆえこの場合、火と怒りとはあいまって〔船火事の〕原因をなすものであろう。2) しかるに悪魔とは自由意志を持つものであり、悔い改めることも盗むこともできるのであって、彼こそがこの盗みの原因であり、主が阻まなかったのではない。ただ贈与も、神からの阻止が到来するのだから、害のみとは言えない。3) だがもし彼らに対して正確を期す必要があるのであれば、阻止的でないということ、それはこの窃盗の際に起こったとわれわれは主張するものであるが、それが完全に原因であったというのではなく、原因であったのは、原因の告訴の際に阻止的であることが内在していなかったということなのである。4) というのも楯を向ける人は、楯を向ける者自身にとって、彼自身が傷つくのを阻止するという点で、傷つかないこ

との原因である。またソクラテスにとってダイモンの声は、阻止するのではなく、促すのではないけれども回避させるような原因であった（プラトン『ソクラテスの弁明』31D）。5）また賞賛も非難も、名誉も懲罰も、靈魂が衝動と斥力の能力を有しておらず、悪が強いられたものである場合には、正しいものとは言えない。84.1）ここから、悪の原因ではない神ができる限りわれわれのうちに留まり得るためには、阻む者が原因であって、靈魂の選択を阻止しない者は正しく判断することになる。2）しかるに選択と衝動は過ちをも開始させるので、時に誤った判断が支配する際には、その判断は無知と無学なのであるから、その判断が懲罰を受けて当然であり、われわれはそれが離反してゆくのを気に留めまい。（3）例を引こう。熱を出すのは不本意なことである。だが、もしある人が自ら不節制のために熱を出したならば、われわれはその人間を責めるであろう）。その災いは不本意なのであるから。4）というのも、悪を悪であるという理由の許に選択する者はいない。それに伴う快樂に引きずられ、それを善と錯覚し、受け取るべきだと考えてしまうのである。5）状況がそのようである際に、無知と、悪しく快樂に満ちた選択から解放されること、そしてそれらを前にして欺きに満ちた幻影に同意しないことは、われわれにできる範囲内のことである。6）しかるに悪魔は強盗また盗人と呼ばれ、偽りの予言者たちを預言者たちとない交ぜにする。そのさまはさながら、小麦を毒麦と混ぜるようなものである。7）したがって、＜主の前に来た者はすべて盗人また強盗である＞（ヨハネ10,8）というのは、単純にすべての人々というのではなく、すべての偽預言者たちと、真に主から遣わされたのではないすべての者のことである。

85.1）さて偽預言者たちも窃盗品を所持している。それは「預言」という名であり、彼らは確かに預言者ではあるが、偽りの預言を語る者なのである。2）主はこう語っている。＜お前たちは、お前たちの父親である悪魔から発したものであり、父の欲情を果たしたいと望んでいるのだ。悪魔は最初から人殺しであって、真理に立脚してはいない。彼らのうちには真理がないからだ。悪魔が偽りを語るときには、その本性から語っている。悪魔の父親も偽り者であるからだ＞（ヨハネ8,44）。3）だが偽預言者でさえ、偽りのうちに何がしかの真理も語る。実際彼らは、恍惚状態にあっては、あたかも離反者の従僕であるかのごとくに預言するものである。4）かの＜牧者、回心の使者＞も、偽預言者に関してヘルマスにこう語っている（『ヘルマス』5,7）。＜彼は何か真理の言葉を語る。なぜなら悪魔が、正しき事柄のうち幾分かでも述べられるのではないか、と彼をおのが霊で満たすからだ＞。5）実に、すべては天上より美のために取り計

らわれている。これは＜実に多彩な神の智慧が、教会を通して知られるためであるが、それはキリストのうちに神が実現した永遠の先見によるものである＞（エフェソ3,10 以下）。6) 神に対しては、何事も対峙することはないし、神に対抗しうるものは何も存在しない。神は主であり、万能者だからである。86.1) だがそれに留まらず、神から離反した者たちの意図や働きは、部分的なものに過ぎず、ちょうど身体的な疾病がそうであるのと同様に、悪しき状況に由来するものである。しかるに普遍的な神慮（pronoia）によって導かれるとき、それらは健全な目的へと向けられる。それは、たとえその原因が疾病をもたらしものであったとしても然りである。2) 実に、神慮のうちの最大のものは、自発的な離反から生まれた悪を癒さず、無益で非生産的なもののまに留め、すべてにおいて害毒をもたらしものとするという点であろう。3) というのも神的な智慧・徳・力に属す業としては、善を為すばかりでなく（暖めることが火の本性であり、照らすことが光の本性であるのと同様、善行はいわば、神の本性そのものである）、何らかの点で認識されている悪を通して、何か善にして有益な結末を完遂し、外見上の邪悪さを、いわば試みによる証しのように有益に用いるということが挙げられる。87.1) したがって愛智にあっても、言わばプロメテウスによって窃盗が行われて、光を起こすに必要なだけのわずかな火がうまく焚きつけられ、智慧の痕跡と神をめぐっての胎動を残した。2) おそらくこのような意味で、ギリシアの愛智者たちが＜盗人であり強盗＞なのであろう。そして、主の来臨以前に、ヘブライ人の預言者たちから真理の部分を、認識（epignōsis）によって捉えたのではなく、ただあたかも自らが見出した教説であるかのように己がものとし、ある事柄についてはその真意を貶め、またある事柄に関しては余計にも無学なままに改竄したが、ある事柄に関しては彼ら自身発見しもした。おそらくは＜感覚の霊＞（pneuma aisthēsōs, 出エジプト28,3）を有していたのであろう。3) アリストテレスも聖書と同じような表現で、ソフィストの技巧のことを＜智慧の盗術＞と呼んでおり、これに関しては既に説明を終えた（『ストマテイス』1.8.39.2）。4) しかるに使徒は＜わたしたちがこれについて語るのも、人の知恵に教えられた言葉によるのではなく、「霊」に教えられた言葉による＞（1コリント2,13）と述べている。5) というのも使徒（ヨハネ）は預言者たちに関して、＜われわれのすべてが、その＞、すなわちキリストの、＜充溢から得た＞（ヨハネ1,16）と述べている。だから預言者たちは盗人ではない。6) そして＜わたしの教えはわたしのものではなく、わたしを遣わした父のものである＞（ヨハネ7,16.18）と主は述べる。その一方で主は、盗み



を行う者たちに関して、＜彼はわたしについて語りながら、自分自身の栄光を求めているのだ＞と語っている。7) ギリシア人たちはそのような意味で＜自己愛に満ち、ほら吹きである＞（2テモ3,2）。聖書が彼らを賢者と呼んでいるのは、真の意味での知恵者ではなく、単に見せかけの上での賢者に過ぎず、それを非難しているのである。

### XIII. 万人が知恵に呼ばれていること。

88.1) 彼らに関して、使徒はこう言っている。＜わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする＞（1コリント1,19）。さらに使徒はこう付言する。＜知者はどこにいるのか。学者はどこにいるのか。この世の論客はどこにいるのか＞（1コリント1,20）。つまり使徒は、学者と対置するために、この世の論客、異邦人の哲学者を配しているのである。2) ＜神は世の知恵を愚かなものとされたではないか＞（1コリント1,20）。これは、神が「愚かさを明らかにした」というのと同義であり、彼らの考えていることが真実ではないという意味である。3) 使徒は、彼らが言う「知恵」の欺瞞の理由に気づいていたものの、＜彼らの心の頑なさのために＞（以下エフェソ4,18）述べているのである。＜神の智慧のうちに＞、すなわち預言者たちによって告げられた智慧のうちに、＜世は智慧を通して＞、つまり預言者を通じて語る智慧を通じて＜彼を＞、すなわち神を＜知ることがなかった＞ために、神は愚かさを告げ知らせることをもって＞、つまりギリシア人たちには愚かと思われることを通じて、＜信じる者たちを救うことを決意した＞。なぜなら、使徒が言うには、＜ユダヤ人たちは＞、信仰のための＜しるしを求める＞が、＜ギリシア人たちは智慧を探求する＞。これはすなわち「強制的論法」ないし別様には「省略三段論法」と呼ばれているものに属す。だが＜われわれは十字架に付けられたイエス・キリストを述べ伝える。彼は、ユダヤ人にとっては蹟きであるが＞。なぜなら預言を知っているものたちは、このような結末を信じないからである。3) ＜一方、ギリシア人にとっては愚かさである＞。なぜなら見せかけだけの知者は、人間を通して神の子が語ったり、神が子を有したり、ひいてはこの神の子が受難するなどということはおとぎ話に他ならないと考えるからである。そこから、思い込みの先入観が彼らをして信じないように説きつける。6) というのも、救い主の到来は、人々を愚かな者・心頑なな者・不信仰な者とするのではなく、むしろ理解があり、従順で、さらに加えては信仰深い者とするからで

ある。7) 聞き従う者たちが自ずから付き随ったがために、従うことを望まぬ者たちが、理解なく、信なく、愚かな者としてここから離反していったことが明らかにされている。8) <呼ばれたユダヤ人、ギリシア人たちにとって、キリストは神の力であり神の智慧である>。89.1) では—このほうがむしろ望ましいと思われるが—、<神は世の知恵を愚かなものとされたではないか>という句は、<愚かなものとされなかった>と等しく、否定的な意味に取るべきではないだろうか。つまりそれは、彼らにとって、心の頑なさの原因が、知恵を愚かなものにした神に由来するものであると思われるようにするためなのである。たとえ彼らが知者であるにしても、福音の告知を信じないとすれば、それはより大きな非難の対象となってしまう。というのも真理を選び取るかそこから逃れるかは、自由意志によるべきものだからである。2) だがそればかりでなく、<わたしは知者たちの知恵を滅ぼそう> (1コリント1,19) という表現を通じて、使徒は「軽蔑されるべき、また軽んじられるべき知恵を、異邦の哲学との対置によって明瞭にする」と言っているのである。それはちょうど、ランプが太陽によって照らされた場合、等しいエネルギーを発揮することができないために、滅ぼされてしまうと言われるのと同様である。3) したがって、すべての人々が招かれているのではあるが、その中で聴従することを望む者たちだけが<呼ばれた者>と名づけられている。というのも<不正は神から来るものではない>。(ギリシア人・異邦人) 各々の種族から出て信じる者たちは<受け容れられる民> (テトス2,14) である。4) 『使徒行録』においても、次のような表現を見出せよう。<使徒の言葉を受け容れた人々は、洗礼を受けた> (使徒2,41)。すなわち明瞭なことだが、自らが説得されることを望まなかった者たちは離反したのである。90.1) この者たちに向けて、預言の書はこう語っている。<もしあなた方が望み、わたしに聞き従うならば、地の善きものを享受するだろう> (イザヤ1,19)。彼はわれわれのために置かれたものを吟味し、選択か回避かを迫る。<神の知恵>と使徒が呼んでいるものは、主による教えであり、それは主が、子を通じて伝えられた真なる哲学を示すためである。2) というのも見せかけの知者であっても、一種の勧告を有しており、それは使徒にあって、次のように命じるものである。<神にかたどり、正義と真理の敬虔さのうちに創られた新しい人を身につけねばならない。それゆえ偽りを棄て、真理を語れ。悪魔に付け入る隙を与えてはならない。盗人はもう盗まず、善を実行することで富むがよい> (エペソ4,24 以下)。3) ここで「実行する」とは真理を探究して尽力することである。というのも理性的な善行を伴って、<必

要としている人に>、宇宙論的充溢と神的な智慧とを<分かち与えることができるため>である。4) なぜなら使徒は、御言葉を教え、利息をつけて貸せるように正確に吟味された貨幣を、食卓に投ずることを望んでいるからである。5) したがって彼はこう付け加える。<腐敗した言葉があなたの口から発せられないようにせよ>。ここで「腐敗した言葉」とは虚栄心に発する言葉である。<むしろ可能ならば、必要性を満たすべく打ち立てるに善いような言葉を発するがよい。聞き従う人々に恵みを与えられるように>。言葉が善くあるためには、善性に満ちた神の言葉が不可欠である。救い主が、どうして善くないことがありえようか。

## **XX. ギリシアの哲学者たちは部分的真理に到達していたこと。**

91.1) かくして、ギリシア人もまた、証しのうちに真理の何がしかを教説化しているということについては、ここに看取することができる。パウロは『使徒行録』の中で、アレオパゴス評議會の人々に対して次のように語ったと記されている。<わたしはあなた方が信仰厚き人々であることを認める。2) 道を歩きながら、あなた方が拝むいろいろなものを見てみると、「知られざる神に」と刻まれている祭壇さえ見つけたからである。それで、あなた方が知らずに拝んでいるもの、この方をわたしはあなた方に告げよう。3) 世界とその中の万物とを創った神が、その方である。この神は天地の主であるから、手で作った神殿などには住まない。また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もない。すべての人に生命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからである。4) 神は、一人の人からすべての民族を作り出し、地上の至るところに住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界を決められた。これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが捜し求めさえすれば、神を見出すことができるようにという目的による。実際、神はわれわれ一人一人から遠く離れてはいない。あなた方のうちのある詩人たちもこう述べている。

「われわれもその子孫である」（アタス『星辰譜』5）>

（使徒 17,22 - 28）.

5) ここから明らかなことは、パウロがアタスの『星辰譜』から詩行を引用しつつ、ギリシア人によって美しく語られたということを認めるとともに、<知られざる神>という表現を通して、ギリシア人の間では創造者たる神が、周回的

言説を通じて崇敬されていることを仄めかしている。しかしその一方で、子を通じた認識によって神を把握し学び取らねばならないということをも主張しているのである。92.1) <わたしはあなたを異邦人の中に遣わす。それは、彼らの眼を開き、闇から光へ、サタンの権能から神へと立ち返らせ、彼らがわたしへの信仰によって、罪の赦しと聖なる人々のうちなる嗣業 (klēros) とを手にすることができるようになるためである> (使徒 26,17 以下)。2) ここで<盲目であったのに開かれた眼>とは、子を通しての父をめぐる認識 (epignōsis) のことであり、ギリシア人が周回の言説 (periphrasis) によっていたものの把握 (katalēpsis) である。そして<サタンの権能からの立ち返り>とは、そのために隷属が生じていた罪からの転向である。3) われわれは、単にすべての哲学をではなく、ソクラテスがプラトンを通じ、それについて次のように述べている哲学を受け容れるのである。<秘儀についてある人々が述べているように、ウイキョウ持ちは多いが、パッコスの信徒はわずかだ> (プラトン『ファイドン』69CD)。これは、招かれる者は多いが、選ばれる者は少ないということを暗示したものである (マタイ 22,14)。4) 彼はさらに明瞭にこう付言している。<これらの人々は、わたしの考えでは、まさしく前哲学をしている人々に他ならないのだ。わたしとしては、可能な限りの事柄を、生涯の間何も疎かにしなかっただけでなく、あらゆる方法でもってそうなろうと熱望したのだ。もしわたしの望みが正しく、われわれが何かを成し遂げえたのであれば、われわれはかの地に赴いて明らかに見るだろう、もし神が欲するなら、もう少し後になろう。93.1) それにしても貴方には、ヘブライ人の諸書において、正しき者における死後の希望が明らかにされているとは思わないであろうか。また『デモドコス』においても—もしこれがプラトンの著作であるならだが—、<まさか、技芸を求めて放浪しながら、多く学びもせずに生活したりすることは、まさか哲学することではあるまい。まったく別物だ。むしろわたしとしては、これを非難に当たるものだと考えているのだ> (プラトン『愛人たち』137B)。2) というのも思うに、プラトンは、ヘラクレイトスに倣って、博学の理性を持つことを教えることはないということを知っていたのであろう。3) さらに彼は、『国家』の第5巻において、<そうなるとわれわれは、そういった人々や他の人々を、妙な事柄を学ぶのが好きな哲学者、また技芸を好む哲学者とでもいうものを立てることになろう。いや、彼らはむしろ、似非哲学者だ。彼は言った。ではあなたは、誰を真の哲学者と言うのか。わたしは言った。真理を観照するのが好きな者たちをだ> (プラトン『国家』475DE)。4) というのも疑問や仮説を含んだ

幾何学のうちに哲学は存在しない。音楽にしても、推論的ではあっても、そのうちに哲学はない。天文学にしても、自然のこと、流体のこと、推察される事柄などに満ち満ちてはいるが、そのうちに哲学はない。むしろ哲学とは、善そのものと真理に関する知識である。いま述べた諸学は、善に関わる他のものであり、いわば善に向かう道なのである。5) したがってそれは、善に向けての包括的教養（enkyklion paideia）を完成させることを可能にはせず、むしろ靈魂を、思惟される諸物に向けて覚醒させ、鍛え上げるものである。

94.1) だがもし、経験によって、ギリシア人たちが真の哲学の某かを述べたとすれば、その経験は神的な経綸に属している（というのも誰かがわれわれに対する競争心から、偶発的な事柄を神聖視するということはないであろうから）。あるいはたまたまの幸運によるのかもしれない。幸運は事前には測りたい。2) あるいはまた、ギリシア人たちが本性的に内的想念（ennoia）を描いたと言う人がいるかもしれない。自然の創造者として、われわれは一者を知っているだけである。それはわれわれが自然的な正義について語る場合と同様である。あるいはまた、共通の理性を有しているためかもしれない。その父、そして理性の分配に関する正義の父が誰であるのか、後ほど検証することにしよう。3) というのももし誰かが「先陳述」を述べながら、「共陳述」を批判するとすれば、その人は預言の種類を述べているわけである。実に、真理を強調すると言いながら、別の人々がある事柄を哲学者たちに述べようと望む場合もある。4) 実に、神的な靈感を受けた使徒は、われわれに関してこう記している。＜われわれはいま、鏡を通して見ているが＞（1コリント13,12）、これは主に對する呼びかけを通じて、自らを知りながら、われわれの内にある神的なものから、創造的な原因をできる限りともに見ようとするわけである。5) 使徒は言う。＜というのもあなたの兄弟を見ることは、あなたの神を見ることなのだから＞。6) 思うに、いまの一節は、われわれに対し、救い主である神のことが語られているのであろう。しかるに肉体が剥ぎ取られるとき＜顔と顔をあわせて＞、すなわち心が浄らかになるときは、すでに決定的にかつ把握可能な仕方である、という意味である。7) そしてギリシア人たちの中で正確に哲学した人々は、強調をもってかつ透徹した仕方、神を見ている。そのようなものとしては、不可能性を通じての真なる幻影がそれである。すなわち、水の面にわれわれが幻影を見出すとき、われわれはそれを、映った明晰な物体を通じて見るわけである。95.1) かのソロモンは、実に美しくこう述べている。＜正義を蒔く者は信仰を作り出す。自分自身のものを蒔きながら、より多くを為す人々

がある> (箴言 11,21 ; 11,24). あるいはまた<畑にある青草を世話せよ. あなたは草を刈るだろう. 時期に適った牧草を集めるがよい, 衣服にしうる羊を手に入れられるように> (箴言 27,25 以下). 2) 外側の覆いや守りに対して, どのように配慮すべきかがお分かりであろう. <あなたの群れの靈魂をよくよく認識せよ> (箴言 27,23). 3) <というのも法を持たない異邦の民が, 本性的に法に叶うことを為すのであれば, これらの人々は, 法を持たないながら, 自分たち自身が法なのである> (ローマ 2,14). <割礼がなくても法の正義は守る> (ローマ 2,16) と使徒は述べる. これは律法や主の到来以前にも看取されたことである. 4) 哲学の側から, 異端と呼ばれる人々に向けての内容の論証が, いわば判釈を行ったように, <遠くに住む兄弟よりも, 近隣の友人のほうが強力である> (箴言 27,10). <虚偽に依拠する者は, 不法者を牧し, 空飛ぶ鳥を追いかける> (箴言 9,12abc.16.17.18a). 5) わたしは, 多くの場合, 現在の哲学が, 蓋然的な事柄を手がけ, 蓋然的な論拠を用いているにしても, それが御言葉を愛智と呼んでいるとは思わない. 異端諸派に噛み付いているとは思いますが. 6) さらに聖書は続ける. <というのも彼は, 自らのブドウ畑の道を放棄し, 特殊な畑のあぜ道を彷徨っている>. そのあぜ道とは, 当初から存在する教会を離れてしまった者たちのことである. 7) 直ちに異端に陥ってしまった者は<水のない荒れ野を彷徨する>. それは, 真に存在する神を放棄し, 神なくして, 水のない水を追い求め, <住むことのできない乾き果てた土地を徘徊し, その両の手で不毛を集める>. 96.1) さらに, 智慧は語っている. <わたしは思慮において欠けたる者たちに勧告する>, すなわち, 諸異端の間で揺れ動く者たちに対して, <隠れたパンを甘美に食し, 盗んだ甘美な水を味わうがよい>. ここで聖書は, パンと水に関して, 他でもなく, 奉献(prosphora)のために, 教会の規定に則らずにパンと水を用いている異端のことを明瞭に示しているのである. というのも生の水だけをエウカリスティアに捧げている者どもがあるからである. 2) <だがその場所で無駄な時間を費やさぬよう, 立ち去るがよい>. この場所とは, シナゴグ(集会所)のことであって, 教会と同義語として述べているわけではない. 3) しかる後, 智慧はこう呼ばわっている. <こうして他の水へと赴くがよい>. ここで異端の洗礼は, 固有にして正真正銘の水だとは考えられていない. 4) <そして他の川へと移るがよい>. これは海へと通じ, 流れ出す川のことであり, 真理による磐石性から逸れたものは, 海へと流れ出し, 異邦の, 生命とは無縁の波へと混ざり合ってしまうのである.



## XX. 真理に到達するためには哲学が貢献すること.

97.1) たとえば船を曳く多くの人々は、多数の原因があるとは言わず、むしろ多くがあいまって一つの原因を成していると言うであろう（なぜなら船を曳くその各々の者が原因なのではなく、他の人々と力をあわせるから曳けるわけであるから）。ちょうどそれと同じように哲学は、真理の探究であるわけだが、真理の把握のために適用される。したがって把握の原因なのではなく、他とあいまって、その原因また協働者なのである。2) その際の共なる原因もまた、原因なのである。しかるに、幸福であるということは一つであるにしても、そのための原因としては、偶々複数の徳がある。ちょうど温まる理由として、太陽や火、浴槽や衣服などがありうるのと同様、真理はただ一つであっても、真理の探究に参画するのは数多くあるのに対して、発見は子による。かくして、もしわれわれが正しく観察するなら、力において徳は一つであるが、ある物事のうちに内在する場合、その力は思慮と呼ばれることになるし、ある場合には賢慮、またある場合には勇氣であったり正義であったりする。4) これと同じ論理により、真理は一つであるのに、幾何学には幾何学の真理があり、音楽には音楽の、そして正統なる哲学にはギリシアの真理が存するのであろう。しかるに、われわれが神の子において教えられる真理こそ、唯一の完全なる勝義的真理なのである。98.1) このようにしてわれわれは、同一の1ドラクマであっても、船乗りに与えられる場合には路銀、徴税人に支払われる場合には税金、家の管理人に支払われる際には家賃、教師に支払われる場合には報酬、売り子に支払われる場合には内金と呼ばれると理解する。これに対し、徳であれ真理であれ、同じ名で呼ばれるものの各々が、それ自体として同じ結果をもたらすものの原因なのである。2) これらの同意語としての使用により、正しき生を幸福と呼び、靈魂が徳に満ちた飾りを受けている人を幸福者と呼ぶ際には、それが「幸福に生きること」であると呼ぶのである（名前の上だけで「われわれは幸福である」とは言わない）。3) だがもしさらに、哲学が真理の発見のために登用される場合には、哲学がさまざまな適用によって、真理に関わってわれわれが継続的に行う知識にまで拡張される。ただこれは、ロゴスに基づいて手がける者に、覚知が前もって触れられるとも受け取られる。4) しかるにギリシアの真理は、われわれによる真理とは、たとえ同じ名詞を用いているにしても、別個のものとされている。それは覚知の大きさ、勝義的な実証、神的な

力、など類似の諸点に鑑みてである。なぜならわれわれは、＜神から教えを受けた者＞（1テサロニケ4,9）であり、真に聖なる文字を、神の御子にあって教わったからである。この点で彼らは、同じようにではなく、異なった教えによって靈魂を運動させているのである。99.1) だがもし、あら探し好きの人々のためにわれわれが申し開きをすべきだというのであれば、真理の把握のために、哲学は軌を一にした協働者であると言おう。なぜならわれわれは、哲学が真理の探究そのものであり、覚知者にとっての前教育であることに同意するからであり、それなくしては哲学すらもあり得ないのであるから、軌を一にするものを原因とせず、協働者を維持者としなない。なぜならわれわれはほとんどすべて、ギリシアの普遍的教養と哲学なく、そればかりでなく文法すらもなく、神的にして異邦の愛智によって突き動かされ、＜力によって＞（1テサロニケ1,5）神に関する事柄を信仰によって捉え、智慧そのものの働きを通して教育されたからである。2) しかるに他者とともに為す事柄に関しては、それ自体として働きを為すことは不完全であり、協働者また軌を一にするものとわれわれは言う。これは、原因とともに原因であること、ないし他者とともに来たりて原因となることのためにこう名づけられているのであるが、それ自体としては真理に基づいた結実をもたらすことができないもののことである。3) 哲学が、それ自体としてギリシア人たちを正しきものとしたにしても、哲学は、そのための協働者として見出される正義に向かわしめることはなかった（ちょうど、屋上へ登ろうとする者にとっての1階や2階、あるいは哲学しようと考えている者にとっての文法教師の役割に等しい）。すなわち、哲学を取り除くことで、総じて御言葉を放棄したり、真理が取り除かれるといったことにはならない。なぜなら、視覚も聴覚も声も、皆相まって真理のために貢献するが、理性は真理を本性的に知らしめるからである。4) だが協働者に関して、ある場合には多くが、ある場合には少量が、力をもたらす。実に、明瞭さは真理の伝承のために協働するし、弁証法は、行き掛かりの異端に陥らないようにするために協働する。100.1) かくして、救い主に関する教えは自己完結し自己充足しており、＜力＞でありまた＜神の智慧＞である。したがってギリシアの哲学がこれに加わったところで真理をより強力なものにするわけではなく、ただ哲学に対する詭弁的な攻撃を無力なものにし、かつ真理に対する企てに満ちた攻撃を打倒するのである。ここから相応しくも、哲学はブドウ畑の垣根また柵と言われるのである。2) したがって哲学は、信仰に基づく真理として、ちょうどパンのように、生きるために不可欠であり、付け合せまたデザートにも似て、前

教養だと思われる。

「宴が終われば、ナッツの類は甘美なもの」

（ピンダロス、断片 124c）。

これはテバイの人ピンダロスの言葉である。3) これに対し、聖書にあっても直截にく浅はかな者が理解すればより悪巧みする者となり、知者が理解すれば覚知を受け容れる>（箴言 21,11）と語られている。また<自分勝手に喋る者は、自分自身の栄光を求める>（ヨハネ 7,18）と主は述べる。しかし自らを遣わした方の栄光を求める者は真実であり、その人のうちに不正はない>。4) したがって、異邦の知恵を己がものとし、自分のものだと言語して、己の栄光を増さんとする者は真理を偽っているがゆえに不正を犯している。彼は聖書にあつて盗人>と呼ばれている。実に、次のように述べられる。<子よ、偽善者になるな。偽りは盗みへと道案内する>（『使徒の教え』 3,5）。5) しかるに盗人が略奪して有しているものは、本当に有しているものであり、たとえそれが金であれ銀であれ、あるいは御言葉であれ教義であれ、これは変わらない。彼らが盗み取ったものの一部には真理があり、推測的にであっても、論理の必然から彼らはそれを知るのである。ここから教えを受け、彼らは把捉的に認識を得ることになるのである。

## XXI. 古代世界における年代記。

101.1) さて、哲学者たちの教説がヘブライ人たちから捏造されたものであるという点に関しては、少しく後で取り上げることにしよう（cf. 5.14.89 以下）。それよりも前に、叙述の順序に適ったこととして、まずモーセによる年代記について述べておかねばならない。それを通して疑う余地なく、ヘブライ人たちによる愛智があらゆる叡智のうちで最も古くに遡るということが示されるであろう。2) これらの事柄に関しては、タティアノスにより『ギリシア人に宛てて』の中で正確に語られているが、カッシアノスによっても『釈義論』第1巻において述べられている。しかしながらこの覚書は、われわれに対しても、この論点に関して語られている問題を概観するように要請する（以下 107.6 まで、ほぼ *ἡ ἐκτίσις* 『福音の準備』第10巻 12.1 – 30）。3) まず文法家のアピオンは、プレイストニケスと呼ばれている人物であり、『エジプト史』の第4巻において、生まれがエジプト人であるためにヘブライ人に対して論争的な態度により、ユダヤ人に反駁する書物を著す目的をもって、エジプト人たちの王であるアモ

シスと、この王による事績に言及し、メンデシのプトレマイオスを証人として引いている。4) 彼の記述は以下のような次第である (cf. 𐤎𐤌𐤓𐤕𐤓『福音の準備』第10巻10章16節)。「アモシスは、アルゴスの人イナコスの同時代人であるが、アウァリアを破壊した。これはメンデシのプトレマイオスが『年代記』の中で記している事柄である」。5) しかるにこのプトレマイオスとは神官であって、エジプトの王たちの事績を3巻の書物に提示しつつ、エジプトの王がアモシスであった頃に、モーセの導きの下、ユダヤ人たちによるエジプトからの脱出が行われたとしている。ここからモーセは、イナコスの頃に盛りを迎えたのだということが判るのである。102.1) しかるにギリシア人に関する事柄の中で最も古いのはアルゴス地方の話、すなわちイナコスの裔に関する話であり、これはハリカルナッソスのディオニュシオスが『年代史』のなかで教えている事柄である (ディオニュシオス・ハリカルナッセシ『ローマ古代誌』1.74.2)。2) アッティカ地方の話は、(蛇との) 二性を具有し大地から生まれたとされるケクロプスに発するが、このアルゴスの話に比べて4世代新しい。これはタティアノスが正確に述べている説であるが、ペラスゴスに始まるアルカディア地方の話は9世代新しい。このペラスゴスもまた、大地から生まれたとされる。3) これら二地方よりも新しいのが、デウカリオンの裔たるフティオティスの話である。イナコスの時点からトロイア戦争までは、20世代もしくはそれ以上を数える。そして年数としては、いわば、400年以上ということになる。4) もしクテシアスの言うように、アッシリアの事柄がギリシアの事柄よりも古いとすれば、アッシリアの支配の第402年目、第8王朝ベルコスの王位<sup>8</sup>の第32年目に、アモシスの治世におけるモーセのエジプトからの脱出が行われたことになる。それはアルゴス王イナコスの治下のこととなる。5) しかるにギリシアでは、イナコスの次のフォロネウスの治世下に、オギュギエの洪水があり、シキュオンにおける王国があって、まずはアイギアレス、次いでエウロプス、次いでテルキノス、それからクレタ島でのクレトスの治世となった。6) なぜならアクシラオスは、フォロネウスは最初人間であったと言っている。そこからフォロニスの詩人は、彼は「死すべき人間たちの父であった」と言っている。103.1) ここからプラトンもまた『ティマイオス』の中で、アクシラオスにしたがってこう記している。＜そしてまたあるとき、彼らに古い時代のことを話してもらうように仕向けるつもりで、ギリシア側の最古の話を試みたというのだ。つまり、最初の人間と言われたフォロネウスとニオベのこと、さらにはあの大洪水の後のことを話したのだ＞(プラトン『ティマイオス』22AB)。2) ＜しかるにフォルバスの頃アクタ

イオスが出て、彼からアッティカの女性・アクタイアが生まれた。一方トリオパスの頃プロメテウス、アトラス、エピメテウス、二様のケクロプス、イオが出た。クロトポスの頃、ファエトンを襲った炎上とデウカリオンを襲った洪水があった。3) 一方ステネロスの頃、アンフィクトュオンの王制とペロポネソスへのダナオスの到来、ダルダノスによるダルダニアの創建があった> (タイバス39)。このダルダノスを、ホメロスはく叢雲を寄せるゼウスは最初の子として儲けた> (ホメロス『イリアス』20.215) と言う。<またエウロペによる、フェニキアからクレテへの移住があった。4) リュンケウスの頃、コレの略奪、エレウシスの聖域の定礎、トリプトレモスによる農耕、カドモスによるテバイへの到来、ミノスによる王制があった。5) プロイトスの頃、エウモルボスによるアテナイ人たちへの宣戦があった。アクリシオスの頃、ペロプスによるフリュギアからの移住と、イオンによるアテナイへの到着があり、二人目のケクロプスが出て、ペルセウスやディオニュソスによる偉業が行われ、オルフェウスやムサイオスが登場した> .104.1) しかるにアガ멤ノンが王位に就いて18年目に、彼がトロイアを陥落させた。これは、テセウスの子デモフォンがアテナイで王座に就いて最初の年、タルゲリオンの月の12日目であり、これはアルゴスの人ディオニュシオスが述べている通りである。またアギアスとデルキュロスは、著作の第3巻において、パネモスの月<sup>9</sup>の23日目だと言っている。一方ヘッラニコスによれば、タルゲリオンの月の第12日目だという。あるいはアッティカの年代記作家のある者たちは、その月の23日目だとし、それはメネステウス王の最後の年であり、満月だったという。『小イリアス』の詩人は、こう歌っている。

「それは夜であった。中天に、輝ける月が昇っていた」

(『小イリアス』、断片11)。

また他の人々は、その日スキロフォリオンの祭りが行われていたという。3) 一方ヘラクレスの追随者であるテセウスは、トロイア戦争よりも1世代年長である。かくしてヘラクレスの子であるトレポレモスに関して、ホメロスは『イリアス』の中で、彼が従軍していることに触れているのである (ホメロス『イリアス』2.657)。

105.1) かくして、モーセがディオニュソスの神格化よりも、604年先立つことが示された。それは、ディオニュソスが、ペルセウスが王位にある32年目に神とされたとしての話である。これはアポドロロスが『年代記』の中で述べていることである。2) 一方ディオニュソスからヘラクレスまで、すなわちイア

ソンの周囲に集い、アルゴ号に乗って航行したつわものたち<sup>10</sup>までの年数を総計すると63年になる。これはロドス島のアポロニオスが『アルゴナウティカ』の中で述べていることである（ $\alpha\pi\omicron\lambda\omicron\nu\iota\omicron\sigma$ 『アルゴナウティカ』1.146 以下）。3) しかるにヘラクレスのアルゴスにおける王位から、同じくヘラクレスとアスクレピオスの神格化までの年数を総計すると、38年になる。これは年代記作家のアポドロスが述べていることである。4) ここからカストルとポリュデウケスの神格化まで、53年間である。この頃にトロイアの陥落も生じた。5) しかるに、もし詩人ヘシオドスの言葉に従わねばならないのであれば、彼の言葉に聴こう。

「さてゼウスに、アトラスの娘マイアが、栄えあるヘルメス、  
不死の神々の使者を産んだ。聖い臥床に入って。  
カドモスの娘セメレは、ゼウスと情愛の契りをして、  
彼に、輝かしい息子、賑やかなディオニュソスを産んだ」

（ $\eta\sigma\iota\omicron\tau\omicron\varsigma$ 『神統記』938－941）。

106.1) セメレーの父親であるカドモスは、リュンケウスの時代にテバイにやって来て、ギリシア文字の発明者となった。しかるにトリオパスはイシスと同時代人であり、イナコスから7世代の後である（イシスについては、イオとも呼ばれている。彼女はあらゆる土地を巡り歩いた（ienai）からである）。一方イストロスは、『エジプト人たちの植民について』という著作の中で、彼女のことをプロメテウスの娘だと言っている。2) しかるにプロメテウスはトリオパスの時代の人で、モーセから7世代後である。したがってモーセは、ギリシア人たちの理解による人間の誕生よりも以前に人生の最盛期を迎えたように思われる。3) 一方、エジプトにおける神々の問題を取り扱ったレオンは、イシスが、ギリシア人によってデメテルと呼ばれていると述べている。デメテルは、リュンケウスの後、モーセより後れること11世代である。4) またアルゴスの王アピスは、メンフィスの町を建てたが、これはアリストテッポスが『アルカディア誌』の第1巻で述べている。5) しかるにこのアピスについて、アルゴスの人アリストアスは、サラピスという名を持ち、彼こそエジプト人たちが崇敬する人物だと言っている。6) しかるにアンフィポリスの人ニユンフォドロスは、『アジアの諸制度について』という著作の第3巻において、アピスは雄牛として生涯を終え、ミイラ化されて棺に納められ、神殿において神霊として崇敬を受けており、そこからソロアピスと呼ばれ、後には土地の者の習慣でサラピスと呼ばれていると記している。107.1) しかるにアピスはイナコス



から数えて3代目であり、レトはティテュオスと同時代人である。

「なぜなら（ティテュオスは）、ゼウスの高貴な妃レトを、

力づくでものにしようとした」（ホメロス『オデュッセイア』11.580）

からであり、一方ティテュオスはタンタロスと時を同じくしている。ポイオティアの人ピンダロスがこう記しているのも、至極もつともである。

「この頃、アポロンが誕生した」（ピンダロス、断片147 Schröder）。

これはまったく驚くに値しない。そこでは実に、アポロンがアドメトスとヘラクレスに「まるまる一年間」仕えた、と記されているのが見られる。3) 一方、音楽の創始者として知られるゼトスとアンフィオンは、カドモスの頃の人であった。4) もし誰かがわれわれに、フェモノエはアクリシオスに初めて預言したと言ったとすれば、フェモノエから27年後に、オルフェウス、ムサイオス、それにヘラクレスの師であるリノスらが出たということを知っておくがよい。5) またホメロスとヘシオドスは、イリオスで戦った人々よりもはるかに後代の人たちである。さらにこの二人からずっと下った頃に、ギリシアの立法家たち、すなわちリュクルゴスとソロンが出、さらに七賢人たち、あるいはシリアの人フェレキュデス、偉大なるピュタゴラスが出たが、彼らはオリュンピア紀で言えばずっと後代の人たちであり、これに関してはすでに提示を終えた（『ストロマテイス』1.14.59－65）。6) したがって、ギリシア人たちの間で知者とか詩人と呼ばれる人々だけではなく、そのほとんどの神々よりも、モーセのほうが古くに遡るということが示された。

108.1) だがモーセに留まらず、かのシビュッラの巫女も、オルフェウスよりも古くに遡るのである。というのも彼女の名と彼女によって語られた預言に関しては、さらに多くの言い伝えがあるとされ、彼女はフリュギア人でアルテミスとも呼ばれ、彼女がデルフォイの神殿を訪れてこう歌ったとされる。

2) 「おおデルフォイよ、遠矢を射掛けるアポッロンに仕える者たちよ、

わたしは、アイギスを保つゼウスの御心を説くためにやって来た。

はらからなるアポッロンに怒りを抱いて」。

3) ヘロフィレと呼ばれるもう一人の女性、エリュトライアもいる。彼女たちについては、ポントスの人ヘラクレイデスが『預言について』のなかで言及している。わたしはエジプトの女性や、ローマではカルマロスに住まい、その息子が、ローマにルペルキオンと呼ばれるパンの神殿<sup>11</sup>を建てたかのエウアン

ドロスであるとされるイタリアの女性については省略することにする。

109.1) では、モーセ以降の他のヘブライ人たちの預言者たちの年代についても、ここで検討する価値があるだろう。

2) モーセの生涯の終わりの後、民を導く職を引き継いだのはヨシュアである。彼は58年間にわたって戦士であった。その後、約束の土地に入ってからさらに25年間で平穏に過ごした。3) しかし『ヨシュア記』に載っているとおり、この上述の人物がモーセを継承したのは27歳のときであった(ヨシュア 24,29)。4) その後ヘブライ人たちは過ちを犯し、メソポタミアの王クシャン・リシュアタイムに8年間にわたって委ねられた(士師 2,8)。これは『士師記』が記しているとおりである。5) その後彼らは神に嘆願し、指導者として、カレブの兄弟であり、ユダの部族から出た最も若い男オトニエルを得た。この男はメソポタミアの王を殺し、次の50年間にわたって民を治めた。6) だが再び過ちを犯したために、民はモアブ人の王であるエグロンに、18年間にわたって渡された。だが彼らは立ち返ったため、直ちにエフドが彼らを80年間にわたって導いた。彼はエフライムの部族出身で、非常に有能な人物であった。この男がエグロンを亡きものとしたのである(士師 3,21)。110.1) エフドが亡くなった後、民は、再び過ちを犯したので、カナン人の王ヤビンの手に20年間にわたって渡された。この期間に、ラピドトの妻でエフライム部族の出身であるデボラが預言者活動をおこなった。そして大祭司は、リエソスの子オジアであった。2) この女性の戦術によって、アビノアムの子でナフタリ族出身のバラクが指揮を執り、ヤビンの將軍であったシセラに抗して戦列を敷き、これに対して勝利を収めた。こうしてデボラは裁きつつ、40年間にわたって民を治めた(士師 5,31)。3) 彼女が亡くなると再び民は過ちを犯し、ミディアン人の手に7年間にわたって渡された。4) この時代にマナセ族出身でヨアシュの子ギデオンが、300人の精鋭兵を募り(士師 7,6)、12万人のミディアン人たちを滅ぼし、40年間にわたって治めた(士師 8,10;8,28)。彼の後、その子アビメレクが3年間治めた(士師 9,22)。5) この男をエフライム族出身でカッラスの子ベダスの息子、ボレアスが継ぎ、23年間にわたって治めた(士師 10,2)。彼の後、民は、再び過ちを犯したため、18年間にわたってアンモン人の手に渡された。111.1) だが民が悔い改めたため、マナセ族出身でギレアドの人エフタが彼らを導き、6年間にわたって治めた(士師 12,7)。彼の後、ユダ族出身でベトレヘムの人、イブツァンが7年間、それからゼブルンの人エロンが8年間、その後エフライムの人アブドンが8年間治めた(士師 12,14)。イブツァンの7年間にエロンの8年間で

つなぐ人たちも若干いる。2) この人物の後、民は再び過ちを犯したので、40年間にわたって異民族ペリシテ人の下に置かれた。しかし彼らは悔い改めたため、ダン族出身のサムソンが出て彼らを導き、異民族に対し、戦闘で勝利を収めた。この人物は20年間にわたって民を治めた（士師 16,31）。3) その後無政府状態が生じたため、祭司のエリが40年間にわたって民を裁いた。4) このエリを預言者サムエルが継ぎ、彼らとともにサウルが王制を敷き、27年間支配した。このサムエルはダビデにも油を注いだ（サムエル上 16,13）。112.1) サムエルはサウルよりも2年早く没したが（サムエル上 25,1; 31,6）、このとき大祭司はアヒメレクであった（サムエル上 21,2）。このサムエルがサウルを王とすべく油を注いだのであり、このサウルが、士師たちの後、初めてイスラエルの王となったのである。この士師たちの年数は、サムエルまで全部で463年と7ヶ月であった。2) しかる後『サムエル記』の上巻<sup>12</sup>を通して、サウルが新たにされてから王として治めた治世は20年間である。3) サウルの死後、第2代の王、ユダ族の出身でエッサイの子ダビデがヘブロンで王政を敷き、40年間治めた。これは『サムエル記』の下巻に収められている年代である。このとき大祭司だったのは、エリの親戚筋でアヒメレクの子アビアタルであった。この時代に、ガドとナタンという人物が預言者として活動した。4) かくして、ヌンの子ヨシュアからダビデが王位を受け継ぐまでの年数は、まずある人によれば、450年間となり、また上掲した年代記が示しているように、それらを総計すれば、ダビデの死に至るまで、543年と7ヶ月ということになる。113.1) その後王となったのは、ダビデの子ソロモンであり、40年間王位にあった。この期間、ナタンが預言者職に留まり、ナタンはソロモンに対して、神殿の造営を勧告した。同じようにシロ出身のアヒヤも預言者活動を行った（列王 11,29）。また二人の王、ダビデとソロモンも預言者であった。2) 神殿における最初の大祭司はツァドクであり（列王上 4,4）、この神殿はソロモンが建てたものである。ツァドクは聖務を執り行ったが、彼は最初の大祭司であるアアロンから数えて8代目であった。3) かくしてモーセからソロモンの時代までは、ある人々の言うように、595年間である。しかるに他の人々の見解では、576年だという。4) もしヨシュアからダビデまでの450年に、モーセが将軍を務めていた40年間、およびヘブライ人によるエジプトからの脱出の前にモーセが経た80年間を数え併せ、さらにダビデの王位期間である40年間を加えるならば、全体で年数は610年になる。114.1) だが、ダビデの死に至るまでの523年と7ヶ月に、モーセの120年間、およびソロモンの40年間を加えるならば、われわれによる年

代記はさらに正確に進むことになる。すなわちソロモンの死まで、年数の総体は683年と7ヶ月となる。2) イラモスは自分の娘をソロモンに与えたが、これはトロイアの陥落の後、メネラオスによるフェニキア到着の頃のことであった。これはペルガモンのメナンドロス、およびライトスが『フェニキア記』の中で述べていることである。3) ソロモンの後、その子レハブアムが王位に就き、17年間治めた。そのときの大祭司はツアドクの子アビメレクであった。4) この時代に王国は分裂し、サマリアではエフライム族出身でソロモンの奴隷であったヤロブアムが王となった。セロンの人アヒヤ、およびアイラムの子サマヤ、そしてユダを去ってヤロブアムの許へ走った者がなお預言者活動を行い、祭壇において預言をした。115.1) その後、レハブアムの子アビヤムが王となり、3年間治めた。その後同様にして、アビヤムの子アサが41年間王位にあった。彼は老いて通風を病んだ。彼の時代に、ハナニの子イエフが預言者活動をおこなった(列王上16,1以下)。その後、アサの子ヨシャファトが王となり、25年間治めた。彼の時代に、ティシュベ人のエリヤ(列王上17以下)、イムラの子ミカヤ(列王上22)、アナニヤの子オバドヤ(列王上18,3以下)が預言者として活動した。2) ミカヤの時代には偽預言者でケナアナの子ツイドキヤもいた。3) 彼らに続き、ヨシャファトの子ヨラムの王政があり、これが8年間に及んだ(列王下8,17)。この時代にエリヤが預言者活動をおこない、エリヤの後、シャファトの子エリシャが預言者となった。4) この時代に、サマリヤの人々は鳩の糞、さらには自分たちの子供を食べた。ヨシャファトの時代は、『列王記』第3卷(=現行『列王記』第1卷)の末尾から第4卷(=『列王記』第2卷)に及んでいる。5) ヨラムの時代にエリヤが天に挙げられ、シャファトの子エリシャが6年間に及ぶ預言者活動を始めたが、このとき彼は40歳であった。その後アハズヤが1年間王位にあり、この時期にもなおエリシャが預言者活動をおこない、彼にアブダドナイオスも帯同した。116.1) その後アハズヤの母アタルヤが王位に就き、8年間治めた。彼女は自分の兄弟の子を殺した。というのも彼女は、アハブの家系の出身だったからである。しかるにアハズヤの姉妹であるヨシェバがアハズヤの子ヨアシュを盗み出し、後に彼に王権を委ねた(列王下11,2以下)。2) このアタルヤの時期にもなおエリシャが預言者の活動をおこなった。彼女の後、上述のように、大祭司ヨデヤ<sup>13</sup>の妻であったヨシェバによって救い出されたヨアシュが王となった。総計で在位は40年間になる。3) かくしてソロモンから預言者エリシャの死の年まで、ある人々が言っているように、105年となる。だが別の人々は、102年だと言っている。しかるに上掲の年代誌が明らかにし

ているように、ソロモンの王政からの年は181年になる。

117.1) さて、トロイア戦争からホメロスの誕生まで、フィロコロスによれば180年間であり、これはイオニア植民の後ということになる。2) しかるにアリストaiosは『アルキロコス風の覚書』の中で、自分はイオニア植民によって移住したとし、その植民はトロイア戦争の140年後に起こったと述べている。3) 一方アポドロスは、イオニア植民の100年後に、ドリュッサイオスの子であるアゲシラオスがスパルタ人を王として治めていたとき、まだ若かったリュクルゴスを立法家として登用するよう、彼に進言したのだという。4) 一方エウテュメネスは『年代記』の中で、自分がヘシオドスと盛期が同じであり、アカストスの頃、トロイアの陥落の200年後にキオス島にいたと言う。5) しかるにアルケマコスも『エウボイア記』の第3巻で、この見解を採っている。そうになると、彼とヘシオドスは、預言者のエリシャよりも年少だということになる。6) もし誰かある人が、文法家のクラテスに従って、ホメロスは、ヘラクレスの後裔たちによる帰還と同時期であり、それはトロイアの陥落から80年後であると主張しようとするならば、やはりソロモンよりも後代の話であるということが判明し、メネラオスによるフェニキアへの到来がちょうどソロモンの頃であって、このことについては先述したところである。7) 一方エラトステネスは、ホメロスの年代をトロイアの陥落から100年後に置いている。8) 実に、テオポンポスは『フィリッポス事蹟録』の第43巻において、ホメロスはトロイア遠征の50年後であると語っている。9) 一方エウフォリオンは『アレウアデス論』の中で、ホメロスをギュゲスと同時代人であるとし、ギュゲスがオリュンピア紀の第18期から王政を始め、彼が初めて「僭主」と呼ばれた人物であると述べている。10) しかるにラコニア人のソシビオスは、その著者『年代記』の中で、ポリュデクテスの子であるカリッロスによる王政の第8年目ごろにホメロスを置いている。つまりカリッロスは64年間王位にあり、彼の後、子のニカンドロスが39年間王位にあった。この彼の34年目に第1オリュンピア紀が置かれたと彼は言っている。結局ホメロスはオリュンピア紀が定められるよりも90年ほど前だということになる。

118.1) ヨアシュの後、その息子であるアマツヤが王国を39年間にわたり継承し（列王下14,2）、アマツヤをその息子アザルヤが同じように継承して52年間に及んだ（列王下15,2）。アザルヤはハンセン氏病のために没した（列王下15,5）。彼の時代に、アモスとその子イザヤ、ベエリの子ホセア、それにホベルのゲト出身のアミタイの子で、大魚の腹から生還しニネベの人々に告知ら

せたヨナが、預言者として活動した。2) その後、アザルヤの子ヨタムが16年間にわたり王であった(列王下15,33)。この時代にもなお、イザヤおよびホセアが預言者として活動し、他にモレシエトの人ミカ、ペトエルの子ヨエルも預言した。119.1) このヨタムを継いだのが息子のアハズであり、王政は16年に及んだ(列王下16,2)。この王による治世の第15年目に、イスラエルがバビロンに捕囚され、アッシリア人の王シャルマナサルが、サマリアにいた人々をメディアとバビロンに強制移住させた(列王下17,5-6)。2) 次いでこのアハズをホセアが継承して<sup>14</sup>、8年間に及び、しかる後ヒゼキヤが継いで29年間に及んだ(列王下18,2)。この人物に対しては、その生涯の晩年に見せた敬虔さのゆえに、神はイザヤを通じ、太陽を後戻りさせて、さらに15年間を生きる賜物を贈った(列王下20,5)。3) イザヤとホセア、それにミカの預言者としての活動は、この人物の時期にまで及んでいる。これらの人物は、スパルタ人の立法家であるリュクルゴスの時代に当たると言われている。4) というのもディエウキダスは『メガラ誌』の第4巻において、リュクルゴスの盛期を、トロイア陥落の290年後ごろに置いているからである。5) 一方イザヤは、ソロモンが王位にあった頃から(その頃メネラオスがフェニキアに至ったことが記されているが)、200年後ごろに預言していることになり、さらにイザヤとともに、ミカ、ホセア、ペトエルの子ヨエルが現れている。120.1) ヒゼキヤの後、彼の息子のマナセが王となり、55年間治めた(列王下21,1)。その後、マナセの子であるアモンが2年間王として治め(列王下21,19)、彼の後、その子で律法に最も忠実なヨシヤが31年間にわたって王であった(列王下22,1)。このヨシヤは、『レビ記』に記されているとおり、人間の死体を偶像の死体の上に置いた(レビ26,30)。2) この王による治世の第18年目に過越祭が執り行われたが(列王下23,23)、これはサムエル以降、それまでの間一度も行われたことがなかった。このとき、祭司であり預言者エレミヤの父親であった祭司のヒルキヤが、神殿の中に律法の書が安置されているのを発見し<sup>15</sup>、これを読んで没した。この時代にフルダとゼファニヤ、そしてエレミヤが預言者活動を行った。3) エレミヤの時期には、偽預言者ハナンヤがいた(エレミヤ28)。このヨシヤは、預言者エレミヤの言葉に逆らい、ユーフラテス川の河畔でエジプトの王ネコによって殺された。ヨシヤはアッシリア人に対して攻め寄せて来たネコを阻もうとしたのである。121.1) このヨシヤを継いだのがエコニヤで、ヨアハズとも呼ぶ。ヨシヤの子であり、3ヶ月と10日間統治した(列王23,31)。この人物をエジプトの王ネコは拘束してエジプトに連行し、彼の代わりにその兄



弟であるヨヤキムを王として立て、この地に税金を課し、11年間に及んだ（列王下23,35－36）。2）彼の後、彼と同名のヨヤキンが<sup>163</sup>ヶ月間王として統治し、続いてゼデキヤが11年間統治した。3）この王の時期までエレミヤは預言者活動を継続し、ブジ、シュマヤの子ウリヤ（<sup>164</sup>イミヤ26,20）、それにハバククも、エレミヤと同時期に預言者として活動した。こうしてユダヤ人の王制は終焉を迎えた。4）かくしてモーセの誕生から捕囚までの年数は、ある人々によれば972年、正確な年代計算に従えば1085年と6ヶ月と10日である。一方、ダビデの王制からバビロニア人による捕囚までの年数は452年と6ヶ月、一方われわれによる正確な年数計算では482年と6ヶ月と10日ということになる。

122.1) さて、ゼデキヤの王制の第12年目、ネブカドネツアルは、ペルシアによる支配の70年前に、フェニキア人とユダヤ人たちに対して出征した。これはペロッソスが『バビロニア誌』の中で述べていることである。2）一方ユバは、アッシリアについて記した著書でこれに同意してペロッソスから歴史記述を借用し、ペロッソスが真理を述べていることを証ししている。3）そしてネブカドネツアルはゼデキヤの目をえぐってバビロンに連行し、民をすべて移住させた（こうして捕囚は70年間に及んだ）。この際、エジプトに逃れた少数の者だけは例外であった。4）ゼデキヤの時代にもなお、エレミヤとハバククは預言者活動をおこない、ゼデキヤの王制の第5年目に<sup>165</sup>、バビロンにおいてエゼキエルが預言を行った。その後預言者ナホム、そしてダニエル、またその後ハガイとゼカリヤは、ダレイオス1世の治世（前522－486）に2年間、その後、12小預言者の一人であるマラキが預言した。123.1) ハガイとゼカリヤの後、アルタクセルクセス王（1世；在位前465－424）の筆頭献酌官（<sup>166</sup>ネミヤ1,11）であったネヘミヤ、すなわちイスラエル人ハカルヤの子が（<sup>167</sup>ネミヤ1,1）、エルサレムの町を建設し、神殿を修復した。2）この捕囚民の中には、エステルとマルドカイも含まれていた（<sup>168</sup>ギリシア語エステル記A1－3）。『マカバイ記』はこの人物の書として伝えられている。3）この捕囚の期間中、偶像に仕えることを欲しなかったミシャエル、ハナンヤ、そしてアザルヤは、火の炉のうちに投げ込まれたが、天使の顕現によって救われた（<sup>169</sup>ダニエル3,19－26）。4）このときダニエルは、竜のために、獅子の洞窟に投げ入れられたが、ハバククを通じて神の先慮により養われ、7日目に救い出された（<sup>170</sup>ダニエル補遺ベルと竜）。5）この頃ヨナもしるしとなり、トビアも天使ラファエルを通じてサラを妻として迎えた（<sup>171</sup>トビト7,12）。このとき、彼女の最初の7人の求婚者たちは悪魔が滅ぼしてしまっていた（<sup>172</sup>トビト3,8）。だがトビアの結婚の後、トビアの父トビトは眼が

見えるようになった。124.1) この頃ゾロバベルは、知恵によって対立者たちに勝利し（エズラ3,2;3,8）、ダレイオス王に金を払い、エルサレムの修復を許されて、エズラとともに祖国の地に凱旋した。2) 彼を通して民の購いと、神の息吹を受けた書の朗読と、諸書の刷新が行われ、救いの過ぎ越しと異国人との通婚の解禁が成った。キュロスもまた、ヘブライ人たちの状態が旧に復すこと（apokatastasis）を布告し、ダレイオスの治世下には、約束の成就が果たされて、神殿奉献記念祭が、仮庵祭と同様に執り行われた。4) かくしてすべての年数は、捕虜であったときも合わせて、モーセの誕生から民の復旧までの期間が、1155年と6ヶ月と10日であり、しかるにダビデの王制からの年は、ある人々によれば、352年間であるが、より正確を期すならば、572年と6ヶ月と10日ということになる。

125.1) かくして、預言者ダニエルによって語られたこと、すなわち次に挙げる事柄は、預言者エレミヤによってバビロンに向けて行われるとされた捕囚によって成就したことになる。2) <お前の民と聖なる都に対して70週が定められている。それが過ぎると逆らいは終わり、罪は封じられ、不義は償われる。とこしえの正義が到来し、幻と預言は封じられ、もっとも聖なる者に油が注がれる。3) これを知り、目覚めよ。エルサレム復興と再建についての御言葉が出されてから、油注がれた君の到来まで、7週あり、また62週あって、危機のうちに広場と堀は再建される。4) その62週のあと油注がれた者は、不当に断たれ、都と聖所は次に来る指導者の民によって荒らされる。その終わりには洪水があり、終わりまで戦いが続き、荒廃を避けることはできない。5) 彼は1週の間、多くの者と同盟を固め、6) 半週でいけにえと献げものを廃止する。憎むべきものの翼の上に荒廃をもたらす者が座す。そしてついに、定められた破滅が荒廃の上に注がれる>（ダニエル9,24－27）。

126.1) かくして、神殿が7週間の間に建てられたということは明らかである。というのもこのことは『エズラ書』に記されているし（ネミヤ6,15?）、このようにして、エルサレムにおいて7週間が満ちたときに、油注がれた王がユダヤ人の指導者となったのである。そして62年間にわたって全ユダヤが平穏であり、戦争を経験することがなかったのである。2) こうしてわれらの主キリスト、<聖なる者のなかの聖なる者>（ダニエル9,24－27）が到来し、<幻影と預言者>を成就し、肉において、彼の父の霊によって油注がれた者となった。これは預言者が言うように、<72年間>のことであった。3) そしてくわずか1年の間に、その1年の半分をネロ帝が支配し、聖なる町エルサレムの中に

＜嫌悪すべきもの＞を立てたが、それは＜半年の間に＞撤去されて、彼とオト、ガルバ、ウィッテリウス、ウェスパシアヌスが支配し、エルサレムを破壊し、聖なるものを略奪したのである。そしてこれらがこのような次第であるということは、理解する力のある者には、預言者が述べていることに照らして明らかなのである。

127.1) さて、次の王ヨヤキムの治世第11年目の年が満ちると（597）、ネブカドネザル王（2世、604－562）の下でバビロンへの捕囚が行われた。この王がアッシリア人の王となつてから7年目のことであった。一方エジプト人に対してはワフレウス（アプリエス、588－568）が王となつて2年目、フィリッポスがアテナイのアルコンの年、オリュンピア紀第48期の第1年目のことであった（ $776 - 4 \times (48 - 1) = 588$ ）。2) 捕囚は70年間にわたつて継続し、ヒュスタスベスの子ダレイオスがペルシア人、アッシリア人、エジプト人の王となつて治世2年目のことであった。この時代には、先述のように、ハガイとゼカリヤ、それに12預言者の一人であるマラキ（遣わされた者）が預言者活動をおこなつた。また大祭司はヨツァダクの子ヨシュアであつた（ハガイ1,1）。3) ダレイオス王に関しては、ヘロドトスがマゴイたちの支配を破つたとしているが（ヘロドトス『歴史』3,79）、その治世第2年目には、シェアルティエルの子ゼルバベルが、エルサレムに神殿を興し飾りつけるために派遣された（エズラ3,2）。

128.1) かくして、ペルシア人の年代は次のように算出される。キュロスが30年間、カンビュセスが19年間、ダレイオスが46年間、クセルクセスが26年間、アルタクセルクセスが41年間、ダレイオスが8年間、アルタクセルクセスが42年間、オコスが8年間、そしてアルセスが3年間である。（この部分欠落あり）2) ここまでですなわちペルシア人の年代は計235年間と算出される。このダレイオスをマケドニア人のアレクサンドロスが襲い、この年のうちに彼が王として統治し始めたのである。3) 同様にして、マケドニア人の王たちに関しては、次のように算定される。アレクサンドロスは18年間、ラゴスの子プトレマイオスは40年間、プトレマイオス・フィラデルフォスが27年間、しかる後、プトレマイオス・エウエルゲテスが25年間、その後プトレマイオス・フィロパトルが17年間、彼の後を継いでプトレマイオス・エピファネスが24年間である。4) 彼を継承したのがプトレマイオス・フィロメトルで35年間、王の座にあつた。その後プトレマイオス・フュスコンが29年間、その後プトレマイオス・ラトゥロスが36年間、その後ディオニュソスとの添え名を得るプトレマイオスが29年間王位にあつた。129.1) 最後にクレオパトラが

21年間王位にあり、彼女の後、クレオパトラの子供たちによる王制が18日間続いた<sup>18</sup>。2) かくしてマケドニアの王たちの年数は、同様の方法で、312年と18日間であった。3) したがってヒュスタスベスの子のダレイオスの時期、彼の王制の第2年目に預言していたハガイとゼカリヤ、および12小預言者の一人のマラキに関しては、彼らは第48オリュンピア紀の第1年に預言し、第62オリュンピア紀の頃と伝えられるピュタゴラスよりも年長、またギリシアの賢人たちの中で最年長とされ、第50オリュンピア紀の頃の人と伝えられるタレスよりも年長ということになる。4) タレスとともに賢人のうちに数え上げられる人々も、タレスと同時代人である。これはアンドロンが『鼎』の中で述べていることである。というのもヘラクレイトスはピュタゴラスよりも後代の人であり、その著作の中で、ピュタゴラスについて言及しているからである。130.1) ここから、先述した預言者たちの年代に対し、7賢人と称される人々をそれに併せ、その彼らよりも、第1オリュンピア紀のほうが時期的に遡るということに議論の余地はないであろう。この第1オリュンピア紀は、トロイア戦争の時期よりも407年後代である。2) したがって、メネラオスの時期の人であるソロモンが（つまりトロイア戦争の時期ということである）、ギリシアの賢人たちよりも遥かに年長であると結論づけるのは容易であろう。また、このソロモンよりもモーセがどれほどの年数先立つのかということに関しては、われわれにより、すでに上掲の諸節で明らかにされた（『ストロメイス』1.21.113）。3) 一方「ポリュイストル」と呼ばれるアレクサンドロスは、『ユダヤ人論』と題する著作の中で、ソロモンによるいくつかの書簡が、エジプト王のワフレス、フェニキアのテュロス人たちに宛てられている一方、彼らの側からソロモンに宛てた書簡もあるということを書き記している。これらの書簡から、ワフレスはエルサレム神殿の建設のために、ソロモンの許に8000人のエジプト人男性を派遣したということがわかる。もう一方の人物は、同じ数つまり8000人の人々を、テュロス人の棟梁とともに派遣しているが、この棟梁の母は、ダビデの族出身のユダヤ人を母に持つ人物で、そこに記されている名によれば、ヒュペロンという名を持っていた。

131.1) 実に、アテナイ人オノマクリトスは、オルフェウスに帰せられた詩篇の著者とされる人物であるが、ペイシストラトス一族の治世をオリュンピア紀第50期に置いている。しかるにオルフェウスは、ヘラクレスとともに航海したとされるが、ムサイオスの弟子であった。2) というのもアンフィオンはトロイア戦争に二世代先立つ一方、デモドコスとフェミオスはイリオンの攻略

後（なぜなら前者はファイアケス人の館で登場し【『ᾠδὲ Ὑσσειᾶ』】、後者は求婚者たちのくだりに現れるから）、豎琴の技で名声を博した。3) そしてムサイオスに帰せられる託宣に関して、人々はこれをオノマクリトスの作であるとする一方、『クラテール』は、ヘラクレオテスの子でゾピュロスの人オルフェウスの作、『冥界への降下』は、サモスの人プロディコスの作であるとしている。4) しかるにキオス島のイオンは『トリアグモス』の中で、ピュタゴラスもオルフェウスにある作品を帰している、と言っている。5) 一方エピゲネスは『オルフェウスに宛てた詩篇について』の中で、『冥界への降下』と『聖なる言葉』はピュタゴラス派のケクロプスの作であるが、『ペプロス』と『自然学』はブロンティノスの作だとしている。6) 一方、テルパンドロスを古代人のうちに含める人々もある。実際、ヘッラニコスはこの人物をミダス王の同時代人だとしている。一方ファニアスは、レスボス島のレスケスをテルパンドロスより前の人だとし、テルパンドロスをアルキロコスよりも新しいとする一方、レスケスはアルクティノスと競演して勝利を収めたとしている。7) 一方リュデの人クサントスは、オリュンピア紀第18期（ディオニュシオスによれば第15期）の頃、タソスを建立したとされる。アルキロコスがすでにオリュンピア紀第20期の後に知られていたことは明らかである。実に彼は、マグネシアの破壊が、少し以前に起こったということを記憶しているのである。8) 一方シモニデスはアルキロコスの時代の人だとされている。カッリノスはそれよりやや年長であろう。マグネシア人たちが滅ぼされたということを、アルキロコスが言及しているのに対して、カッリノスはこれを暗に暗示しているだけだからである。コリントスの人エウメロスはやや年長であり、シラクサを建てたアルキアスと会ったことがあるとされている。

132.1) さて、この件に関しては、次のことを述べておかねばならない。すなわち彼らは、「叙事詩の圏」の詩人たちを、きわめて古代に遡る人々のうちに置いているのである。すでにギリシア人たちの間には、託宣を行うきわめて多数の人々、たとえば両バキス（その一方はボイオティア人、もう一方はアルカディア人である）のような者がいたと言われている。彼らは多くの事どもを多数の人々に向けて語った。2) 一方、アテナイの人アンフィリュトスの助言により、ペイシストラトスは僭主の地位を手に入れた。これはアンフィリュトスが攻撃の時機を示したからである（ἁπλοῦς『歴史』1,62）。3) 次の人々には黙っておいていただこう。クレタのコメテス、キュプロスのキニュラス、テッサリアのアドメトス、キュレネのアリスタイオス、アテナイのアンフィアラオス、

ケルキュラのティモクセノス、フォカイアのデマイネトス、テスピアイのエピゲネス、カリュストスのニキアス、テッサリアのアリストン、カルケドンのディオニュシオス、コリントのクレオフォン、ケイロン<sup>1</sup>のヒッポ、ポイオ、マント、それに多数のシビュッラ、すなわちサモス、コロフォン、キュメ、エリュトライ、フュト、タラクサンドリア、マケティス、テッサリア、テスプロトイの女預言者。さらにはトロイア戦争の時期に生きたカルカスとモプソス。彼らのうちモプソスのほうが年長であり、アルゴ号の遠征隊に同行したという。133.1) さて、キュレネのバットスは「モプソスの神託」と呼ばれるものを編集したと言われている。一方ドロテオスも『パンデクタ』の第1巻において、モプソスがカワセミやカラスの声に耳を傾けていたと述べている。2) かの偉大なるピュタゴラスも、常に先見<sup>2</sup>に留意していたし、ヒュペルボレオイ族のアパリス、プロコンネソス人のアリストエアス、クレタ人のエピメニデス(彼はスパルタにやって来た)、メディア人のゾロアストレス、アクラガス<sup>3</sup>の人エンペドクレス、ラコニアの人フォルミオン、そればかりでなく、タソスの人ポリュアラトス、スュラクサイのエンペドティモス、さらに加えるにアテナイの人ソクラテスも、とりわけそうであった。3) 『テアゲス』篇のなかでソクラテスは言っている。＜わたしには、子供の頃から始まって、神的な運命によるダイモンのしるしが起こったのだ。これは一種の声であって、これが起こるときには、わたしが何かをやりようとしているときにそれを制するように働き、促す場合というのはまったくなかったのだ＞(プラトン『テアゲス』128D)。4) フォキス人の僭主エクセkestosも、まじないを懸けた二つの指輪をかざし、互いに打ち当てたときの音でもって、事を実行すべき好機を聞き当てたという。死ぬときも姦策にかかって果てたのだが、これはその音が予め告げていたことであったとアリストテレスが『フォキス人の国制』の中で記している。134.1) だがそればかりではなく、かつてエジプトの人間の中には、人間の思いによって神々となった者もある。テバイのヘルメス、メンフィスのアスクレピオス、テバイのテイレシアスとマントもそうで、彼らについてはエウリピデスの語っているとおりである。他には、すでにトロイアにおけるヘレノス、ラオコオン、オイノネ、ケブレノスがそうであった。2) ヘラクレスの裔の一人クレノスも、傑出した占い師の一人であったと伝えられ、エリスの人でもう一人のイアモスもそうで、彼は、そこからイアミダイ<sup>4</sup>が興る人物である。またアルゴスとメガラにおけるポリュイドスもそうで、彼については悲劇が言及している。3) テレモスを数え上げる必要があるのか。彼はキュクロペス人の占い師で、ポリュフェモス<sup>5</sup>に対して、オデュッセウスの



放浪に関することを予言した（ホロス『ホテュッセイア』9,509—512）。またアテナイにおけるオノマクリトス、あるいはテバイに向けて出征した将の一人に数えられるアンフィアラオス。この彼は、トロイアの陥落よりも一世代遡ると伝えられる<sup>19</sup>。あるいはケファッレニアにおけるテオクリュメノス、カリアにおけるテルメッソス、シケリアにおけるガレオスについてはその必要があるだろうか。

4) おそらく、彼らに加えてさらに他の人々もあるだろう。アルゴ号の遠征隊に同行したイドモン、デルフォイの女性フェモノエ、アポッロンの子モプソス、パンフィリアとキリキアにおけるマントゥス、アンフィアラオスの子でキリキアの人アンフィロコス、アカルナイの人アルクメオン、デロス島の人アニオス、アレクサンドロスに同行したテルメッサの人アリストアンドロス。すでにフィロコロスは、著書『神託について』の中で、オルフェウスのことを占い師であったと述べている。135.1) 一方テオポンポスとエフォロス、それにティマイオスは、オルタグラスという人物を占い師であると述べており、これはちょうど、サモスの人ピュトクレスが、『イタリヤ誌』の第4巻でガイウスとユリウス、それにネポスを占い師としているのと同様である。2) だが彼らは、聖書が述べているようにくすべて、盗人であり盗賊である>（cf. ヨハネ10.8）。それは彼らが、大半の事柄を注記と推測に基づいて予言しているからであり、ちょうど自然現象から言い当てる医師や占い師と同様である。その一方で、鬼神に衝き動かされたり、水や香り、大気の性質に影響を受けたりする者もある。3) しかるにヘブライ人たちの間では、預言者たちは神の力と息吹に動かされる。律法以前では、アダムが女性および動物の命名の際に予知をおこない（創世2,23）、ノアは回心を述べ伝え（2ペトロ2,5）、アブラハム、イサク、ヤコブも、言うまでもなく、将来のことおよび現に起こっていることの少なからざる部分を予知した。4) また、律法とともにモーセとアアロンが、彼らの後にはヌンの子ヨシュア、サムエル、ガド、ナタン、アヒヤ、サマヤ、イエフ、エリヤ、ミカ、オバデヤ、エリシャ、アブダドナイ、アモス、イザヤ、ホセア、ヨナ、ヨエル、エレミヤ、ゼファニヤ、ブジ、エゼキエル、ウリヤ、ハバクク、ナホム、ダニエル、ミシャエル（彼は理性的に預言した）、ハガイ、ザカリヤ、そして12小預言者の一人マラキが預言者であった。136.1) すなわち、預言者は全部で35人ということになる。一方女性としては（彼女たちも預言したからであるが）、サッラ、レベッカ、ミリヤム、デボラ、オルダがいる<sup>20</sup>。2) その後、彼女たちと同時期にヨハネが預言し、救いの洗礼まで活動した。キリストの誕生後は、アンナとシメオンがいた。ヨハネの父親であるザカリヤも、息子の誕生の前に預言

をしたことが福音書に記されている (ルカ 1,67 以下)。

3) さてわたくしとしては、モーセの時代から始めて、ギリシア人たちによる年代記を収集してみようと思う。モーセの誕生から、ユダヤ人によるエジプトからの脱出までは 80 年であり、モーセの死までの期間はそれからさらに 40 年間である。脱出はイナコスの頃、ソトの革命に遡ること 345 年の頃にモーセのエジプトからの出国がおこなわれたことになる。4) しかるにモーセによる指揮とイナコスの頃から、デウカリオンの頃の洪水すなわち第二の洪水、あるいはファエトンの炎上 (これらはクロトポスの頃に起こった) までは (『ストロテイス』 1.103 を参照), 4 世代を数えることになる。これは 3 世代を 100 年と換算してのことである。5) また洪水からイダ山の炎上、鉄の発見, 「イダイオイ・ダクテュロイ」までは 73 年であり (『ストロテイス』 1.75.4 を参照), これはトラッシュュロスが述べているとおりである。そしてイダ山の炎上からガニューメデスの略奪までは, 65 年ということになる。137.1) ここからペルセウスの遠征, すなわちグラウコスがメリケルテスを悼んでイストミア祭を興した時までは<sup>21</sup>, 15 年ということになる。ペルセウスの遠征からトロイアの創建までは 34 年である。そこからアルゴ号の遠征までは 64 年である。2) ここからテセウスとミノタウロスの頃までは 32 年であり, そこからテバイ攻めの七将までは 10 年, ヘラクレスがペロプスのために興したオリュンピアでの競技までは 3 年, アマゾン女族によるアテナイへの来襲と, ヘレネのテセウスによる略奪までは 9 年である。3) ここからヘラクレスの神化までは 11 年, それからヘレネのパリス・アレクサンドロスによる略奪までは 4 年である。ここからトロイアの陥落までは, 20 年である。4) トロイアの陥落からアエネアスのローマ移住およびラウィニウムの創建までは 10 年, アスカニウスの統治まで 8 年, そしてヘラクレスの裔の帰還までは 61 年, イフィトスのためのオリュンピア競技祭の創設までは 338 年である<sup>22</sup>。

138.1) さてエラトステネスは, 年代を次のように算定している。まずトロイアの陥落からヘラクレスの後裔たちの帰還までが 80 年, そこからイオニアの創建までが 60 年, それ以降のことに関しては, まずリュクルゴス<sup>23</sup>による改革までが 159 年, 2) 第 1 オリュンピア紀の最初の年 (前 776) までが 108 年, このオリュンピア紀からクセルクセスによる来寇 (前 479) までが 297 年, ここからペロポネソス戦争の開始 (前 431) までは 48 年, 3) アテナイの陥落と降伏 (前 404) までは 27 年, さらにレウクトラの戦 (前 371)<sup>24</sup> までは 34 年, その後, フィリッポスの死 (前 336) までは 35 年である。この後, アレクサ

ンドロスの死没（前 323）までは 12 年である。

4) さて、第 1 オリュンピア紀からローマの創建（前 753）までは 24 年になると何人かの人々は言っている。そこから王制の廃止と執政官（hypatoi）の創設（前 509）まで 243 年<sup>25</sup>、王制の廃止からアレクサンドロスの死（前 323）まで 186 年である。139.1) ここからアウグストゥスの勝利、すなわちアントニウスがアレクサンドリアにて自刃したとき（前 30）まで 294 年であり、このときアウグストゥスは四度目の執政官となる。2) この時からドミティアヌス帝がローマに競技祭を創建するまで 114 年であり、この最初の競技祭からコンモドゥス帝の死（後 192）まで 111 年である。

3) さて、ケクロプスの時代からマケドニア王アレクサンドロスの時代まで、総計すると 1228 年<sup>26</sup>、デモフォンから数えると 1250 年である。またトロイアの陥落からヘラクレスの後裔たちによる帰還まで、120 年もしくは 180 年である。4) ここからエウアイネトスがアルコンであった年（この年にアレクサンドロスがアジアに渡ったと言われているが<sup>27</sup>）までは、ファニアスによれば 715 年、エフォロスによれば 735 年、ティマイオスとクレイタルコスによれば 820 年、エラトステネスによれば 770 年となる。しかるにドゥリスは、トロイアの陥落からアレクサンドロスによるアジアへの東征まで 1000 年だと言っている。5) ここからヘゲシアスがアテナイでアルコンであった年（この年にアレクサンドロスは没するのであるが<sup>28</sup>）までは、11 年である。ここからゲルマニクス・クラウディウス・カエサル<sup>29</sup>の支配までは 365 年である。この年号から以降は明らかであり、コンモドゥス帝の死まで算出が可能である。

140.1) さて、ギリシア世界の年代記の後には、異邦人たちによる年代から、きわめて大きな年代の期間について説明を施さねばならない。2) まずアダムから洪水までは 2148 年と 4 日である。次いでセムからアブラハムまでは、1250 年である。またイサクから土地の分割までは、616 年である。3) 次いで士師の時代からサムエルまでは 463 年と 7 ヶ月である。4) そして士師以降、諸王の年数は 572 年 6 ヶ月と 10 日である。5) この時代以降、ペルシア王制の時代は 235 年であり、その後マケドニアの王制があり、アントニウスの没年まで 312 年と 18 日である<sup>30</sup>。6) その後ローマの帝政がコンモドゥスの死没まで 222 年間存続する。7) 遡ると、捕囚期の 70 年と民の祖国の地への帰還<sup>31</sup>から、ウェスパシアヌス帝による捕囚の開始（後 70）まで、410 年が算定される。最後に、ウェスパシアヌス帝からコンモドゥス帝の死まで、121 年 6 ヶ月と 24 日が算出される。

141.1) ところで、デメトリオスは『ユダヤの王たちについて』と題された著作の中で、ユダ族・ベニヤミン族・レビ族はセンナケリブ（前 706 - 681）によっては捕囚を被らず（前 701）、かの捕囚（前 721）から、ネブカドネザル（前 605 - 562）がエルサレムからおこなった最後の捕囚（586）まで、128 年 6 ヶ月であると述べている。2) したがって、10 部族がサマリアから捕囚の民となった年から、プトレマイオス 4 世（前 222 - 205）まで 573 年 9 ヶ月となる<sup>32</sup>。一方、エルサレムからの捕囚からは 338 年と 3 ヶ月ということになる。

3) さてフィロンは彼自身、ユダヤ人の王たちについて著作を著しているが、デメトリオスとは見解を異にしている。4) さらにエウポレモスもまた、同様の問題に関して、アダムからエジプトの第 12 番目の王として治めたデメトリオス・プトレマイオス<sup>33</sup>の治世第 5 年目までを算出すると、5149 年になると述べる。5) 彼によると、モーセがユダヤ人たちをエジプトから脱出させた年から先述の時点までを算出すると、1580 年になると言う。この年からローマでグナエウス・ドミティウスとアシニウスが執政官を務めた年までを算定すると、120 年になる。

142.1) 一方、エフォロスや他の歴史家たちの多くは、民族と言語は 75 個であると述べている。これはモーセの言に従ったものである。＜ヤコブから出た息子たちで、エジプトへ下った者たちは、総勢で 75 名であった＞（創世 46,27）。2) しかるに真実なる論理に従っても、真正なる方言は 72 個であると思われ、これはわれわれの聖書が伝えているとおりである。しかるにそれ以外のものも、方言の 2 個、3 個あるいはそれ以上を共有している。3) ちなみに方言とは、場所に固有の特徴を映し出している言辞であるか、もしくは民族に固有のあるいは共通の特徴を映し出している言辞である。4) ギリシア人たちは、自分たちの方言は 5 個であり、それはアッティカ方言、イオニア方言、ドリス方言、アイオリス方言、そして第 5 番目はコイネー（共通）方言であると言う。一方、異邦人たちの発音も方言も、把握し得ないほどに数多く、むしろ「～語」と呼ばれている。143.1) しかるにプラトンは、神々にもある種の方言を配し、とりわけ、夢や神託を解く際の方言があるとし、さらには殊に、鬼神に取りつかれた者の方言があるとしている。彼らは自らの発音ないし方言を発するのではなく、自身のうちに入り込んだ鬼神の方言を発しているのだというのである。2) 彼はさらに、理性を持たない動物にも方言があり、それは同類のものが聞き取れるのだという。3) つまりある象がぬかるみにはまり、叫びを上げているとき、別の象がその場に居合わせ、一部始終を見ていたとする。

するとその象は、少しく後に象の群れを連れて戻ってきて、ぬかるみに落ちていた象を助け出すのだからというのである。4) さらに、リビュアのサソリは、もし人間を撃つことに成功しなかったならば、一度去ってより多くの仲間を引き連れて戻ってくるという。そしてあるサソリが別のサソリにぶら下って掴まり、先んじて攻撃を仕掛けてくるというのである。実に、理性を持たない動物には、目に見えない合図を用いたり、体勢で告げたりするのではなくて、むしろ思うに、固有の方言があるのだと考えたい。5) 他のある人々によれば、もしある魚が網に懸かりながら、それを引き裂いて逃走すると、その同じ場所でその同じ日には、同じ種類の魚はもう決して見つからないとされる。しかるに最初の真正なる方言は異邦人のもので、本性的に名詞に関わり、それは、特に祈りに関して、より強力に異邦人の発音で語られるということが同意されている。7) プラトンもまた『クラテュロス』篇の中で(410A)、火を表現しようとして、この語彙が異邦人のものであると言っている。彼は、フリギア人たちがく少しばかり格形を変じて>そう語っていると述べている。

144.1) わたくしには、これに加え、救い主の誕生の明証のために、ローマ皇帝たちの在位年代を提示することも無益でないと考える。2) アウグストゥスが43年間、ティベリウスが22年間、ガイウス（・カリグラ）が4年間、クラウディウスが14年間、ネロが14年間、ガルバが1年間、ウェスパシアヌスが10年間、ティトゥスが3年間、ドミティアヌスが15年間、ネルウァが1年間、トラヤヌスが19年間、ハドリアヌスが19年間、アントニヌス（・ピウス）が21年間、さらに同じように（マルクス・アウレリウス・）アントニヌスとコンモドゥスが32年間である。3) かくしてアウグストゥスからコンモドゥスまでが222年、アダムからコンモドゥスの死までが5784年2ヶ月と12日である。4) しかしながら、ある人々はローマ皇帝の年代を次のように算定している。ガイウス・ユリウス・カエサルが3年4ヶ月と5日、彼の後アウグストゥスが46年4ヶ月と1日。その後ティベリウスが26年6ヶ月と19日、彼を継いだのがガイウス・カエサルで3年10ヶ月と8日、それを継いだのがクラウディウスで13年8ヶ月28日、ネロは13年8ヶ月と28日、ガルバは7ヶ月と6日、オトは5ヶ月と1日、ウィテッリウスは7ヶ月と1日、ウェスパシアヌスは11年11ヶ月と22日、ティトゥスは2年2ヶ月、ドミティアヌスは15年8ヶ月と5日、ネルウァは1年4ヶ月と10日、トラヤヌスは19年7ヶ月と15日、ハドリアヌスは20年10ヶ月と28日、アントニヌスは22年3ヶ月と7日、マルクス・アウレリウス・アントニヌスは19年と11日、コンモドゥスが12年9ヶ月

月と14日である。5) かくしてユリウス・カエサルからコンモドゥス（在180－192）の死まで236年6ヶ月である<sup>34</sup>。したがってローマを建立したロムルスからコンモドゥスの死まで953年と6ヶ月である。

145.1) 一方われらの主が誕生したのは（アウグストゥス帝の）第28年目であり、これは、アウグストゥス帝の下で、初めて人口調査が行われるよう命令が出た時のことである。2) これが真実であることに関しては、『ルカによる福音書』の中に次のように記されているとおりである。＜ローマ皇帝ティベリウスの第15年、主の言葉がザカリアの子、（洗礼者）ヨハネの上に下った＞（ルカ3,1－2）。また同福音書の中にはこうも記されている。＜イエスが洗礼を受けるためにやって来たのは、30歳のときであった＞（ルカ3,23）。3) またイエスが宣教を行うために1年間だけが必要であったということに関しては、＜主は、主の恵みの1年を告げ知らせるためにわたしを遣わされた＞（ルカ4,19；イザヤ61,1）。このことに関しては、預言者も福音書もどちらも記している。4) したがって、ティベリウス帝の15年間とアウグストゥス帝の15年間、以上でイエスが受難を経験するまでの30年間の満ちることになる。5) イエスが受難を経た後、エルサレムの破壊が起こるまでの年数は、42年と3ヶ月である。さらに、エルサレムの破壊からコンモドゥス帝の死までは128年10ヶ月と3日である。こういうわけで、主が誕生してからコンモドゥス帝の死まで、年数を総計すると194年1ヶ月と13日となる。6) しかるにわれわれの救い主の誕生に関してさらに精確を究める人々は、その年号ばかりでなく、その日付までも算出し、それはアウグストゥス帝の第28年パコン月の第25日であるとしている。

146.1) しかるにバシレイデス派の者どもは、キリストの受洗の日をも、前晩から朗読のために夜を費やして祝している。2) ある者によれば、これはティベリウス帝の治世第15年目、テュビ月（※エジプトの月名；以下同様）15日のことであったと言い、また他の者によれば、その同じ月の11日であったと言う。3) 一方主の受難を正確に算定する人々のうちある者は、これをティベリウス帝の治世第16年目、ファメノト月の25日だとし、また別の者はファルムティ月の25日だとしている。また他の者は、救い主はファルムティ月の19日に受難に遭ったと言う。さらに彼らのある者たちは、主がファルムティ月の24日あるいは25日に誕生したと言っている。

5) さらに次のこともまた、年代記に付記されるべきであるが、それはダニエルがエルサレムの荒廃に関してほのめかしている日数のことである。ウェスパシアヌスの年が7年7ヶ月、というのもオト、ガルバ、ウィテッリウスの



17ヶ月と8日に、2年が付加されるからである。6)かくして3年6ヶ月になり、これは「7年の半分」ということで、預言者ダニエルが述べているとおりである（ダニエル9,27）。7) 一方彼は、ネロによる聖なる都への嫌悪があってからその陥落まで、2300日を経つと述べている（ダニエル8,14）。8) すなわち彼は、次のような言葉を発しているのである。＜この幻、すなわち、日ごとの供え物が廃され、罪が荒廃をもたらし、聖所と万軍とが踏みにじられるというこの幻の出来事は、いつまで続くのか。彼は続けた。日が暮れ、夜が明けること2300回に及んで、聖所はあるべき状態に戻る＞（ダニエル8,13－14）。9) つまりこの「2300日」とは、6年4ヶ月であり、そのうちの半分以上をネロが王として占め、7年の半分ということになる。一方、残りの半分はオト、ガルバ、ウィテッリウスとウェスパシアヌスが占める。10) それゆえダニエルはこう述べている。＜待ち望んで1335日に至る者は幸いである＞（ダニエル12,12）。なぜならこの日までは戦争が続くが、この日をもって戦争が終わるからである。147,1) この数字は、次に続く章でこう記されていることにより明らかにされる。＜日ごとの供え物が廃止され、憎むべき荒廃をもたらしものが立てられてから、1290日が定められている。待ち望んで1335日に至る者は幸いである＞（ダニエル12,11－12）。

2) 一方ユダヤ人のフラウィウス・ヨセフスは『ユダヤ戦記』を執筆しながら、モーセからダビデまでの期間を計算し、これを585年としている。一方ダビデからウェスパシアヌスの2年目までを1179年とする。3) かくしてモーセからアントニヌスの10年目までは、全体で1933年となる。4) 一方ほかに、イナコスとモーセからコンモドゥス帝の死までを計算した人々のうち、ある人々はこれが2942年だと言い、別の人々は2821年だと言っている。5) しかるに『マタイによる福音書』の中で、アブラハムから、主の母マリアまでの系譜が辿られており（マタイ1,17）、＜アブラハムからダビデまで14代、ダビデからバビロンへの移住まで14代、バビロンへ移されてからキリストまでが同様に14代＞とされており、これら3つの期間は、神秘的にも7の6倍を満たすことになる。

## XXII. 聖書の七十人説。

148.1) さて年代が、多くの人々によりさまざま異なったかたちで記録され、われわれの前に提示されたということに関しては、以上をもって終えるとしよう。ところで、律法と預言者の諸書は、ラゴスの子プトレマイオス王の頃、へ

ブライ人の言葉からギリシア語に翻訳されたと言われている。あるいはある人々によれば、それはフィラデルフォス（「兄弟愛に満ちた」）という異名を持つ王の下であったとも言われる。この王は、この件に関して最大限の野心を注ぎ、ファレロンデメトリオスに、翻訳に関することを正確に取り仕切らせたという。2) というのもなおマケドニア人がアジアを占領していた頃、かの王は、自らの手でアレクサンドリアにでき上がった図書館を、あらゆる書物で飾ることを価値あることと見なし、エルサレムの人々を用いて、彼らの許にあった預言書をギリシア語に翻訳させたのである（ヨセフ『ユダヤ古代誌』12,2,1以下）。149.1) 一方ユダヤ人たちは、マケドニア人たちに従い、自分たちの間で最も徳性の優れた人々の中から、聖書に通じ、ギリシア語の方言にも精通している年長者たちを70人選出し、神的な書とともに彼の許に遣わした。2) 各々の者が、それぞれ個々に各預言を解釈したところ、提出された解釈がすべて、意味の上でも字句の点でも、同じ趣旨のものとなったという。これは、神の意向がギリシア語の音に移されたためである。3) 実に、その解釈を、あたかもギリシアの預言であるかのように機能させることすら、預言を与える神の息吹にとって、無縁ではないからである。なぜならネブカドネザルによる捕囚の間に聖書は廃れてしまっていたにもかかわらず、ペルシア人の王アルタクセルセスの時代に、レビ人であり祭司となったエズラが神感を受け、すべてのいにしへの聖書に再度息吹を吹き込んで預言したからである（第4エズラ14,18－22。37－47）。

150.1) 一方アリストブロスは、『フィロメトルに宛てて』と題した著書の第1巻において、次のような表現を用いて述べている。＜プラトンは、われわれによる律法制定の次第に従っている。彼が律法のうちに述べられている事柄の各々を改作していることは明白である。2) デメトリオス以前に、他の誰かの手で、律法の解釈がおこなわれ、アレクサンドロスによるペルシア制圧の前に、われわれへブライ人市民によるエジプトからの脱出に関する事どもや、彼らに生じた事柄すべての解釈、土地の占領、律法全体の解説などが為されていたのである。3) かくして上述の哲学者は多くをここから取り入れたことはいとも明らかである（プラトンは学問好きであった）。それはちょうどピュタゴラスが、われわれの許なる様々な事柄を自らの教説形成のために移し変えているのと同様である＞。4) 一方ピュタゴラス派の哲学者であるヌメニオスは、率直にこう記している。＜プラトンとは、アッティカ語で話すモーセ以外の何者であろうか？＞。このモーセとは神学者であり預言者であって、ある人々と同様

に、聖なる法の解釈者であったのだ。5) 彼モーセの生まれ、行動、その生涯を、信頼するに値するかの聖書が告げ知らせているが、それでもなお、われわれによって、できる限り述べ明かされねばならない。

### XXIII. モーセの生涯.

151.1) さてモーセは、遡れば生まれはカルデア人であり、エジプトに生まれ、彼の祖先は長期にわたる飢餓のためにバビロンからエジプトに移住した。彼は第7世代に生まれを受け、王としての養育を受け、そのような環境を享受した。2) エジプトにおけるヘブライ人たちの人口が増えたため、その地域の王は大挙して陰謀を企てられるのではないかと恐れをなし、ヘブライ人たちの中から、女の子は育てるが（女性は戦争に際しては非力である）、男の子については、十分な若さに到達したと見れば、これを廃絶するように命じた。3) 子供が高貴な生まれであったため、両親は3ヶ月にわたって隠れて育てた。本性上の善意が、僭主の残忍さをしのいだのである。しかし後に、彼ら自身も子供とともに滅ぼされるのではないかと恐れ、その土地に生えていたパピルスで一種のかごのようなものを作り、子供をその中に隠して、沼のような川の岸辺に放置した。ところが上流に立って、この子の姉妹が事の成り行きを見守っていた。152.1) ここに王の娘がやってきた。彼女はもう長らく妊娠することがなかったが、子供を熱望していた。彼女はその日、河畔にやって来て、洗い物と身洗めをしていた。そこへ子供の泣き叫ぶ声を聞きつけたので、自分の所へ赤子を運んでくるように命じ、憐れみを覚えて乳母を探した。2) そこへ子供の姉妹が駆けつけ、ヘブライ人の婦人がいること、少しく前に出産を済ませ、もしそのような希望があるのなら、王女のために乳母をさせることができること、を伝えた。王女がこれに同意し、そう願ったので、その女は、あたかも報酬で働く他人の女性であるかのごとくに、子の母親を乳母にすべく連れてきたという。3) しかる後、王女はその子供に名前が付けた。それはその子が水から取り上げられたということで、語源にちなむ名であり（というのも水のことを、エジプト人は「モーユ」と呼ぶからである）、この子は水の中で死を迎えるべく放置されたのだから、というのである。こうして彼らは、「自ら上がって息をする者」という意味で「モーセ」と呼ぶのである。153.1) かくして、それ以前に、子供に割礼を施し、その子に両親が名を付けていたということは明らかであり、その頃彼は「ヨアキム」と呼ばれていた。しかるに彼が天に上げられた後、三

番目の名前を得た。それは神秘家たちの言うところでは「メルキ」というものである。2) ところが彼は、成長して代数学、幾何学、韻律学、和音学、さらには測量学、音楽学などを優れたエジプト人たちの許で教わり、加えて、象徴的事物による哲学も学んだ。この哲学は、ヒエログリフ文字で表されたものであった。しかるにギリシア人たちは、他の「円環的教養」(enkyklios paideia) をエジプトにおいて学ぶ。それは、言わば「王の子供」でもあるかのようなものであり、フィロンが『モーセの生涯』の中でそう述べている。だがモーセはさらに加えて、アッシリア文字と、天文学に関する知識を、バビロニア人やエジプト人から学んだ。それゆえ『使徒行録』の中で、＜モーセはエジプト人のあらゆる知恵を教育によって身に付けた＞(使徒7,22)と伝えられているとおりである。4) 一方エウポレモスは、『ユダヤの王たちについて』という著作の中で、モーセを「最初の知恵者であった」とする。そしてユダヤ人たちに最初に文字を与え、これをユダヤ人からフェニキア人が受け取り、ギリシア人はさらにこれをフェニキア人から受け取ったとしている。5) しかるに人間の本性について調べながら、彼は思索を飛ばたかせ、生まれを同じくし生まれを先にする教養を求めて、ヘブライ人に対して不当な強制労働を強いていたエジプト人を撲殺するところまで至ったのである。154.1) しかるに秘儀伝授者は、エジプト人を言葉一つで亡き者にしたと言われているが、それはちょうど、後にペトロが『使徒行録』の中で、土地の価格をごまかして偽った者ども(7:17と7:18)を言葉で殺したと言われているのと同じである(使徒行録5,1-10)。

2) 実にアルタパノスは、『ユダヤ人の書き物について』という著作の中で、監視のうちに閉じ込められていたモーセが、エジプト人たちの王ケネフレエースによって、民に勧告を与えるためにエジプトから釈放され、夜のうちに、監獄の扉が開き、神の意向によって脱出し、王宮へと至り、眠っている王の傍らに立ち、彼を起こしたという。この出来事に驚愕した王が、モーセに対し、彼を遣わした神の名を述べ、自分の耳元でささやくように命じると、王はこれを聞いて無言のまま倒れ、モーセによって力づけられて再び生き返ったというのだ。

155.1) さて、モーセの教育に関しては、ユダヤ人の悲劇作家であるエゼキエロスも、われわれと見解を同じくしている。彼は『脱出』と題する劇作品において、モーセ自身のせりふとして次のように記している。

- 2) 「われわれの部族が十分に成育したのを目にとると、  
王ファラオは、われわれに対して大いに姦策をたくらみ、

ある者たちはレンガ焼きに、ある者たちは重い建設労働に虐待した。

町々には塔をめぐらした。これも不運な人々を酷使したもの。  
その後王はわれわれに、ヘブライ人の部族に告げた、  
男の子を、流れの深い河に投ずるようにと。

- 3) 直ちに、わたしを産んだ母は、わたしを隠した、  
母によれば、3ヶ月もの間。だがもう隠しおせなくなると、  
わたしに産着をまといせ、川岸の小高いところに置いた、  
沼地になった深い繁みに。
- 4) わたしの姉のマリヤムが、そばでうかがっていた、  
すると、王の娘が腰元たちを連れ、  
洗い場に降りて来た、新しい衣を浄めるために。  
見るや直ちに声を挙げて取り上げた。  
ヘブライ人であることはすぐに判った。そこへ  
姉のマリヤムが駆け寄り、王妃にこう話しかけた。  
「この子のために、乳母をお望みでしょうか。ヘブライ人の中  
から  
すぐに見つけて差し上げましょう」。王妃は少女にうなずいた。
- 5) 姉は走って母の許に行き、すぐに母が  
やって来て、わたしを自分の腕に抱いた。  
王の娘は言った。「婦人よ、この子に乳をやりなさい。  
わたしもあなたのために報酬を与えましょう」。  
わたしはモーセと名づけられた。王妃が湿った河の岸边から取  
り上げたので。
- 6) だが青年期がわたしにやって来ると、  
母はわたしを連れて王妃の館を訪れ、  
すべてをわたしに語って聞かせた、父祖の人種、神の賜物につ  
いて。
- 7) わたしが子供だった時期には、  
食べ物も教育も、すべて王子のものを約束された。  
まるで王の実子であるかのように。  
でも日々がめぐり、時が満ちたので  
わたしは王の家を後にした」。

156.1) その後、ヘブライ人とエジプト人の交戦を記し、エジプトの砂地の中にある墓に触れたあと、別の戦いについてエゼキエロスはこう述べている。

2) 「あなたはなぜ、あなた自身よりも脆弱な者を打つのか。

そこで彼は言った。われわれのために、誰があなたを裁き手として、あるいは

監督者としてここへ遣わしたというのか。あなたはわたしを、あたかも

敵対する人間でもあるかのように殺してはならないのではないのか。

そこでわたしは恐れてこう言った。この件はどうして知れてしまったのだろうか」。

3) そこでモーセはそこから逃げ、羊を飼い、牧者としての術によって支配する術を教わった。というのも将来、人間の中でも最も従順な群れを統べようとする者にとって、牧者としての術は帝王学の前訓練なのである。それはちょうど、狩の術が本性的に戦闘術の先立ちであるのと同様である。神はそこからモーセを導き、ヘブライ人たちのための将軍術へと向かわしめた。157.1) しかる後、エジプト人たちはたびたび訓告を受けたが、彼らはしばしば無理解であった。ヘブライ人たちは傍観者となって、他の者たちがどのような災いを被るのかを、危険にさらされることなく見守り、神の力を学ぶことになった。2) さらにエジプト人たちは、聴覚をもってしても、神の力の結末を受け入れようとせず、無節制から訳も判らない者のように、信じようとしなかった。ちょうど、＜子供は為された後になって道理を知る＞（ホロス『イリアス』17.32）ようなものである。さてヘブライ人たちは脱出する際に、エジプト人から多くの分捕り品を持ち出して運んだ。これは批判者たちが言っているように金銭愛による行為なのではなく（というのも神が、ヘブライ人たちに対し、異民族のものを熱望することを許しはしないのだから）、3) むしろまずは、エジプト人にヘブライ人が仕えていたそのすべての期間の必然的な報酬を持ち去るべきだからであり、次いで、金銭愛の奴隷であるエジプト人たちに対し、分捕り品を持ち去ることで苦痛を返し、ある意味で彼らの欲を制するためであった。それはちょうど、エジプト人がヘブライ人を隷属させたことの返礼とも言えよう。4) こうして、もしこれが戦争のようなものであったと言うのであれば、敵の物を持ち去ってよいのは法の定めである。その際には力において勝る者が勝利者として敗者のものを略奪するのであるから（戦争の理由も正当なものである。なぜ



ならヘブライ人たちは飢餓のために、嘆願者としてエジプトに赴いたのであった。しかるにエジプト人たちは、ヘブライ人たちを隷属させ、捕虜のような扱いをし、自分たちに奉仕するよう強いて、その報酬も払わなかったのだ。あるいはまた、これが平時のことであったというのであれば、長き期間を自ら返すことをせず、むしろ奪い去った者どもから、分捕り品を報酬として受け取ったということになる。

## XXV. 指揮官としてのモーセ.

158.1) モーセはわれわれにとって、預言者、律法家、戦術家、将軍、政治家、哲学者である。彼がどのようなあり方で預言者であったかに関しては、後ほど預言について扱うおりに述べることになる。しかるに戦術というのは将軍職の一部であろうし、将軍職は王職の一部であろう。あるいは律法術というもの、ちょうど司法職と同様に王職の一部であろう。2) しかるに神的部分というものは王職に属す。たとえば神とその聖なる子に関する事柄のように。彼らから地上や、外界の善、あるいは完全な幸福がそこから導き出されるためである。＜まず大いなるものを求めよ。そうすれば小さなものは、それに加えてあなたがたに与えられるであろう＞（マタイ6,33）。3) 王職の第二の種類とは、混じりけなく理性的で神的な振る舞いの後に、靈魂の気概的な部分だけが王国に入ることを許されるあり方である。このあり方によるのが、ヘラクレスがアルゴスの、アレクサンドロスがマケドニアを治めたケースである。4) 第三のケースは、ただ一人の人に、勝利を収め、征服することが許される場合である（このような形で勝利を収めることが良きことか悪しきことかに関しては問わない）。ペルシア軍がギリシアに進軍してこれを圧した場合がこれに属する。5) 気概に属するのは勝利を愛する部分だけであり、まさしく征服するために王朝を作った人間、もしくは美を愛し、靈魂が気概を美のために用いるような場合である。159.1) 第四は、すべての中で最悪のものであり、欲望に従っておこなわれる王制であって、たとえばサルダナパロスの王制や、可能な限り欲望を悦ばせることを最終目的とする者どもによる王制がこれである。2) しかるに王術というものは、力をもってよりもむしろ、まず徳をもって勝利を収めることである。戦術は道具であり、本性や質料が異なれば、それに柔軟に対応するというのがこれである。3) 実に、武具や好戦的な動物にあつては、靈魂ある部分靈魂なき部分を問わず、靈魂と理性とが統御者である。しかるに靈魂の情動

的な部分に関しては、この情動をわれわれは徳でもって制御する。理性的判断が統御者であり、これが、克己と節制とを敬虔さでもって、善き覚知を真理でもって封印し、目的として、神に対する敬神の念を奉ずるのである。4) というのも、このようにして徳を用いる人々にとっては、賢慮が統御者であり、神的部分は智慧、人間的な部分は共同体性、全体として王的なのである。5) こうして王は、法に従って治める者であり、彼は進んで治めることへの知識を有する。ちょうど主が、主に向かって、主を通して信じる者たちに近づくのと同様である。6) 神はキリスト、われわれの王に、すべてを委ね、すべてを支配させた。＜それはイエスの名の下に、天上のものも地上のものも地下のものも、すべてが膝をかがめ、すべての舌が声を揃え、父なる神の栄光のために、「イエス・キリストは主である」と告白するためである＞(フィリ<sup>2</sup> 2,10)。

160.1) さて将軍術は、三つの種のうちに収まる。安全さ・奇抜さ・それらの混合である。これらの各々を、三つのやり方のうちから、すなわち言葉によるか、業によるか、あるいはそれらの双方をともに用いるか、を通じて併せ用いるのである。2) これらは、すべて用いてよいのであるが、説得したり、強いたり、防御の際に不正を用いたりすることができる。これらは、正義を実行するか、もしくは虚偽を用いるか、または真実を言うか、あるいはこれらのいくつかを同時に、適宜用いるかのうちに包含される。3) これらのすべてを、またこれらの各々をいかに用いるべきであるかについて、ギリシア人たちはモーセから取り入れて役立てたのである。4) 例示のために、一つ二つ具体的な兵法の場合を取り上げてみよう。モーセは民を導き出す際に、エジプト人たちが追跡してくる可能性を案じて、短距離で容易な道を棄て、荒れ野に向かい、夜間、大に行軍した。5) もう一つは経綸の観点であり、これに関してヘブライ人たちは、どこまでも続く砂漠の間に、長い時間をかけて教育された。すなわち、唯一なる神の存在を信じることに、賢慮ある堪忍を通じて慣れるということである。161.1) 実に、モーセの将軍術は、危険を前にして有益なことを見抜き、それに挺身すべきであることを教える。2) もちろん彼には、疑いさえするような出来事も起こった。2) というのもエジプト人たちが馬と戦車に乗って追跡して来たからである。だが彼らは、海が砕け、馬や戦車もろともに彼らを飲み込んだために、速やかに滅び去り、彼らの残骸すら残らない有り様であった。3) その後、炎の柱が先に立ち(つまり彼らの前で導いたのである)、道なき道を通して夜の間もヘブライ人たちを先導した。それは、労苦と長旅の間に勇氣と刻苦に向けて彼らを鍛錬し教え諭し、一見恐るべき事柄

が試みとして起ころうとも、その後その場所の有益な事柄が明らかとなるためであった。神は、道なき道からこの試みに向けて、彼らを遣わしたのである。162.1) 実に彼は、この場所を先に占めていた敵方を敗走させたが、この際に、荒野と道なき道から彼らに対して攻撃を仕掛けたのである（將軍たる者の卓越性・徳はそのようなものである）。敵方の地域を奪取することは、経験と戦術の為せる業だからである。

2) さてアテナイの將軍ミルティアデスは、このことを知悉し模倣して、マラトンでの戦いにおいてペルシア軍に対して勝利を収めた。その方法とは次のようなものである。まず夜間に、道なき道を歩いてアテナイ軍を先導し、ペルシア軍のうち彼を見張っている者を迷わせた。というのもアテナイから離反したヒippiasなる者が、ペルシア軍を先導してアッティカへと引き入れ、格好の場所をまず占領し守備隊を置いた。彼は土地勘を経験により有していたのである。3) かくしてヒippiasの目を盗むことは困難となり、それゆえミルティアデスは道なき道と夜を巧みに活用し、ダティス率いるペルシア軍に対して攻撃を仕掛け、配下の軍勢とともに、合戦を成功裏に終えたのであった（*Ἀποδοῖς* 『歴史』 6.107 – 115）。

163.1) そればかりでなく後に、フュレーから亡命して来た者たちを率い、人目を避けようと望んだトラシュブロスが<sup>35</sup>、道なき道を進んでいたとき、導き手として柱が現れたという（cf. *Κενοφών* 『ギリシア史』 2.4.3 – 7; *Ἀριστοτέλης* 『アテナイ人の国制』 37.1）。2) トラシュブロスに、月のない夜間、天候も荒れ模様のなかを、先立つ炎が現れ、この炎が彼らが無事に先導し、ムニキア<sup>36</sup>のあたりで消えたという。そこには現在、フォスフォロス（「光をもたらす」）女神の祭壇が建っている。3) かくして、われわれの話はここでもギリシア人にとって信頼できるものとなるだろう。すなわち全能の神には何が可能であるかが明らかとなろう。ヘブライ人たちに対して夜間、炎の柱となって先導することができた方が、ギリシア人に対してもその導き手となったのであるから。4) ある神託のなかでもこう語られている。

「テバイ人にとって、ディオニュソスは喜ばしき柱」

（神託第 207 番、ヘンデス）。

これはヘブライ人たちの許での物語から取られたものである。だがそればかりでなく、エウリピデスも『アンティオペ』の中でこう述べている。

「牛飼いの寝屋の中で、ツタに絡まれて眠る

エウイオス神の柱を」（*Εὐριπίδης* 『アンティオペ』 断片 203）。

6) こうして柱は、神のなぞらえられなさを表す一方、光を放つ柱は、そのなぞらえられなさを意味することに加えて、神が直立し、唯一であること、そしてその光が変わることなく、形象を有しないことを明らかにするものである。164.1) 実際、彫像の形状を正確に規定する以前、古代の人々は柱を建て、これを神の姿であるとして崇めていた。2) 実に、『フォロニス』を作った人物は次のように記している。

「カッリトエは、オリュンピアの王国の番人。  
アルゴスのヘレの。彼女は首輪と飾り房で、  
最初に、女主人の高い柱を飾りつけた」(フォロニス、断片 4)。

3) だがそればかりでなく、『エウポリア』を作った詩人もまた、デルフォイにあるアポッロンの彫像は柱であるということを、次のような詩行でもって述べている。

「神には十分の一として、また初穂として献げよう。  
神聖な穂からの、また高い木からの実りを」

(エウメロス『エウポリア』断片 11)。

実にアポッロン (a-pollon) は、「神は一者である」ということが「多くの事物の剥奪」により、神秘的な仕方と思惟されるということを表したものである。

4) だが実に、柱に見えたかの炎、芝の中から語りかけた火とは、聖なる光の象徴なのであり、その光とは、大地に降り、十字架を通して再度天に昇るものである。この十字架を通じてわれわれには、思惟的に見るという賜物が与えられたのである。

## XXV. プラトンの『法律』はモーセに負うこと。

165.1) 一方哲学者のプラトンは、モーセの事例から律法に関わる事柄を借用し、ミノスとリュクルゴスの国家が、ただ勇気だけに目を向けていることを批判しながらも、それらの国家が、一つことを崇高なものとして語り、変わることなく一つの教説に目を向けていることを賞賛している (プラトン『国家』626A)。というのもプラトンによれば、われわれが、天的な事柄に関してそのような見解を悔いることなく用い、天の誉れに目を注ぐためにいっそう哲学することは、力や荘厳さや節度に適わしいと言うのである。2) 実際彼は、『法律』に記されている事柄を、唯一なる神に眼を注ぎ、高潔に行動することを命じて説いているのではないだろうか (プラトン『法律』626A ; 688A ; 705D)。

3) しかるに彼が言うには、政治家には二つの種類があり、一方は法律的であり、もう一方は同一語彙を用いて名づけるなら政治的である。そして同名の著作において彼が勝義的に仄めかすところでは、政治家とは創造者であり、創造者に目を向け、観想とともに生命力を持って正しく生きる人々が、政治家と名づけられるのである。4) 一方同様に、法律家という名で呼ばれる人は、政治を宇宙の大思惟と個人的な秩序に振り向ける人である。プラトンはこの秩序のことを似つかわしさ・調和・節制と名づけ、それは被支配者に相応しく統治者が統治するときだと述べる（プラトン『政治家』307B；『ゴルギアス』508A；『国家』403E）。そうすれば被支配者は統治者たちに対して従順となるが、これこそモーセの取り組んだ事柄が、真摯に実現する場合であろう。166.1) しかるに司法術は誕生に関わるが、政治術は友情と協和に関わり、この点でプラトンはモーセに負っている。彼は『法律』篇に、『エピノミス』篇における哲学者を配している。この男は、あらゆる誕生のめぐりを、惑星の周期から知悉している。もう一人の哲学者はティマイオスである。この男は天文学者にして、天体の運行、共感、相互の共同体性などに関する観想者である。プラトンは『国家』篇にこの男を配している。2) したがってわたくしとしては、観想とは、政治家および法に則って生きる者にとっての究極目的であるように思われる。実に、真っ直ぐに政治をおこなうことは必須であるが、哲学することこそ最善なのであるから。3) 理性を有する者は、すべてを自らの覚知のうちに伸べて生きることができるだろう。生活に関しては、善き業をもってこれを真っ直ぐにし、逆行するものはこれを蔑み、真理に適う事柄は、これを学ぶために追究するのである。4) しかるに法というものは、考えつかれたものではなく（視覚とは視られたものではない）、憶念のすべてでもない（それは悪ではない）。むしろ法とは有用な憶念であり、真なるものは有用であり、存在者を見出しそれを獲得するものは真理である。モーセはく「ある」という方がわたしを遣わした（出エジプト3,14）と言っている。5) 他の人々は、有用な憶念に従って、法を「直き言葉」と規定した。つまり法とは、為すべき事柄を規定し、為すべきでない事柄を禁ずるものだからである。

## XXM. モーセの律法と対比してみた場合のギリシア人.

167.1) ここから、法律はモーセによって与えられたと語られるのは相応しい、これは正義と不正との尺度だからである。またこの法律についてわれわれ

が、神からモーセを通じて伝えられた規範であると言うのもまったく理に適っている。実に、法律は神的なるものへの導きを有している。2) かのパウロも次のように述べている。〈律法は、約束を与えられたあの子孫が来るときまで、違反を明らかにするために定められたものである〉(ガラテヤ3,19)。その後いわばその考えを敷衍するかのようにこう付言している。〈信仰が到来するまで、われわれは律法の下に鍵を掛けて閉じ込められていた〉。これはすなわち、罪に対する恐れにより、という意味である。〈来たるべき信仰に向けて拓かれるためである。かくして律法はキリストに向けて、われわれにとっての訓導者となったのである。それはわれわれが信仰によって義とされるためであった〉(ガラテヤ3,23)。3) しかるに立法者とは、靈魂の各々の部分と、その業に適切なるものを配する者を言う。しかるにモーセは、かいつまんで言えば、魂を受けた法なのであって、有益な言葉によって導く導き手である。168.1) 実に彼は、善き政治術(politeia)を求めて腐心した。善き政治とは、〈人間の食物〉(プラトン『メネセノス』238C)として、共同体にとって美しいものである。また彼は直ちに裁判術を手がけた。それは、正しき者のため、罪を犯した者どもを矯正させる上での知識のことである。2) 懲罰術は裁判術と同質のものであり、懲罰に関わる基準をめぐる知識だと言える。懲罰とは靈魂の矯正である。3) 言ってみれば、モーセには、美しく善き人間となりうるためのすべての教育的階梯が備わっていた。狩猟術も、これらと同類のものに属す。これは指揮術とも言えるだろう。しかるに神託術は、狩猟で得た動物に対し、御言葉に従って施すものであり、ある意味で、律法に基づく智慧であるとも言えよう。というのもこれを身につけ、これを行使するのは、最も王的な固有の特質だと言えようからである。4) ただ哲学者だけが、知恵ある王、律法家、将軍、裁判官、敬虔なる者、神を愛する者を告げ知らせることができる。もしこれらの事どもをモーセのうちにわれわれが見出しうるのであれば、同じ聖書の中から示されるとおり、モーセを真の賢人として大いに確信をもって述べてよいのではないか。169.1) したがって、たとえば言うならば、牧羊術とは、羊に関する事どもをよく先慮することであるとわれわれは言う。〈よき羊飼いは、羊のために自らの命を棄てる〉(ヨハネ10,11)。まったくそれと同じように、法制定術とは、人間の徳を備えることであり、人間の善性を、力の限り燃え立たせることだとわれわれは言う。それはまつりごとの術であると同時に、人間の群れに配慮する術なのである。2) もし「群れ」ということが、主によって語られた比喩的な用法であり、人間の群れを指すに過ぎないのだとすれば、牧者と善き律法家とは、彼の声を聞き分



ける羊の一なる群れに対して、同一人物となるだろう。それは一なる庇護者であり、失われたものを探し、律法と御言葉とによって見出す人物であろう、もし律法が霊的なものであり、幸福に導くものであるのならば、なぜなら、聖なる霊によって成ったものは霊的なのであるから（ヨハネ3,6）。3）このような人物こそ真の律法家であり、彼は善きこと・美しきことを告げ知らせるだけでなく、それをよく知っている。律法とは、救いの掟を知識として有している者のものである。否むしろ、律法とは知識の掟である。＜神の言葉は力であり、知恵である＞（1コリント1,24）。4）この同じ人物が律法の解説者でもあり、彼を通じて＜律法が与えられた＞（ヨハネ1,17）。彼こそは、神的な掟の最初の解説者であり、父のふところを開示して見せたひとり子である（ヨハネ1,18）。170.1）しかる後、法に従う者たちは、法に対する何らかの覚知を有するために、真理を信じないことも真理を知らぬこともできない。しかるに信じない者たちは、もし他の人々またこの人々が、真理を知らないことを認めるような場合には、法の業の世界に可能な限り入らないことを望む。2）ではいったい、ギリシア人たちの不信とはどのようなものであるのだろうか。それは、律法がモーセを通じて神から与えられたということを公言する真理に従うことを望まないことである。それは彼ら自身、自分たちの許にあるものに従ってモーセを崇敬しているにもかかわらず、である。3）ミノス王は、9年間にわたってゼウスから法を受けるためにゼウスの洞穴に足しげく通ったと伝えられている。またプラトン（『法律』624A）やアリストテレス（断片535）、あるいはエフォロス、リュクルゴスが、法的な事柄を教わるために、しばしばデルフォイのアポロン神殿に詣でたと記している。あるいはヘラクレオンの人カマイレオンは『酩酊について』と題した著作の中で、アリストテレスも『ロクリス人の国制について』の中で、ロクリスの人ザレウコスが、アテナから法を受け取ったと注記している。4）ギリシア人の間での法の制定に関して、信ずるに足る話は、モーセによる預言に倣いながらもそれを知らずに、彼らにできる範囲で、神殿へと奉じたということである。彼らはその場で、真理と彼らの許で語られている事柄の原型に同意することはなかったのである。

## XXVII. 律法はわれわれを教育するために刑罰を科すこと。

171.1）さて、懲罰に関わる法律を、善美に関わるものではないとして看過することがあってはならない。というのも、肉体上の疾病を取り除く者が恩恵

者と見なされるのに対して、靈魂から善からぬ部分を切り取ろうと試みる者が守護者と言われることがない、ということではないはずであるから、なぜなら靈魂のほうが肉体よりも貴重なのである。2) 肉体の健康のために、切断・焼身・服薬などを試み、それらを執行する者が救済者また医師と呼ばれる場合、それは患者に対する一種の悪意・敵意に基づくものではない。ちょうど術という語が示唆しているように、どこか肉体の一部を切断する場合には、健全な部分がそれによってあわせて傷むことのないようにするのであるから、悪意からその医師の術に責を負わせるようなことはない。3) しかるに靈魂の場合、われわれは、もしある人がただ不正から逃れ、正義を獲得したいだけであれば、同じように逃げたり、罰せられたり、縛られたりするのに耐えるだろうか。4) なぜなら法とは、それに聴き従う者を氣遣い、敬神に向けて教育し、なすべき事柄を示唆し、過ちの各々を阻み、些少な場合には罰則を定める。しかるにある者が不正の極みへと直進し、矯正しようがないと思われる場合には、思い切って、他の部分がそのために傷を受けないように氣遣い、いわば全身のうちの一部分を切り落とすように、そのように至極健全である部分をも殺すような手段に出る。172.1) 使徒は次のように言っている。〈われわれは主によって裁かれ、教育される。それは世とともに裁かれないためである〉(1コリント11,32)。2) というのも預言者は公言して止まない。〈主はわたしを教育し、教育した。そしてわたしを死に引き渡さなかった〉(詩篇117,18)。〈あなたに、主の正義を教えるために、主はあなたを教育した〉(申命8,2以下)と聖書は述べている。〈そしてあなたを試み、飢えさせ、荒れ野の地で渴かせた。それは今日わたしがあなたに命ずる限りのすべての主の正義と裁きを、あなたの心のうちに知らしめるためであった。こうして、ちょうどある人がその息子を教育する際にように、われわれの主である神はあなたを教育するであろう〉。3) また、範例が節度を教えるということについては、まさしく次のように述べられる。〈思慮深い者は、悪人が罰せられるのを見てしたたかに自らを教え諭す〉(箴言22,3以下)。なぜなら〈主を恐れることは、知恵の始まり〉だからである。173.1) しかるに、最大にしてもっとも完全な善とは、ある者に対し、悪しき行動から徳と善行へと転向させることができた場合である。これは律法の為せる業である。2) あるいはまた、ある人が不正と貪欲に囚われて、何か癒しがたい悪に陥ってしまった場合、もしその人が殺されるならば、善行がおこなわれるのかも知れない。3) なぜなら律法は、善き賜物を与えるものであり、不正なる者から善き者を産み出すことができるものである。もし不正なる

者が、律法に耳を傾けることさえ望めば、彼らを現在の悪から解放することができるものなのである。4) 節度をもって正義のうちに生きることを選択する者を、不死なる存在にすると律法は公言している。＜律法を知することは、善き思惟のなせる業である＞（箴言 9,10）、あるいはまた＜悪人は律法のことを考えないが、主を求める者は、あらゆる善のうちに主を理解する＞（箴言 28,5）。5) 実に、治めの先慮は主のものにして善きものでなければならない。両者の力が救いの経綸となって作用する。まず一方は、主のものとして賢慮を働かせつつ懲罰する。もう一方は、善行者として、善き行いを通じて憐れみ深くある。6) ＜不従順の子＞（エフェソ 2,2）となることはできず、むしろ＜闇から生命へと移り＞（1ヨハネ 3,14）、掟に基づいた聴覚を知恵に差し出し、まずは神の隷僕となり、しかる後忠実な僕となり、神である主を恐れる。だがもし誰かがさらに登ってこようとすれば、彼もまた子らのうちに数え入れられる。だが＜愛は幾多の過ちを覆う＞（1ペトロ 4,8）。幸いなる希望を完成に向けて育てる者を愛のうちに受け入れ、選ばれた子として、神に愛された者と呼ばれることになる。すでに彼は次のような祈りを歌いまた語る者である。＜主がわたしの神となれんことを＞（創世 28,21）。174.1) しかるに善行が法に属すということを、使徒は、ユダヤ人たちに宛てた一節を通じてこう記している。＜さて、もしあなたが自らユダヤ人と称し、律法に安んじ、神を誇りとし、御旨を知り、律法に教えられて何が大切なことかをわきまえているとし、また、もし、律法のうちなる覚知と真理の具体化を持しているとして、盲人の手引き、闇にいる者の光、愚かな者たちの導き手、未熟者の教師であると自負しているならば＞（ローマ 2,17-20）。2) というのも彼は、たとえ法に従って生活していない者どもが、法のうちに生きていると大法螺を吹くとしても、これらを法が成し遂げるということに同意しているのである。＜智慧を見出す人、死すべき身にして賢慮を知る者は幸いである。その＞（箴言 3,13）、すなわち知恵の、＜口からは正義が流れ出し、彼は法と憐れみをその舌に運ぶ＞。3) というのも活力は唯一、主のものであり、その主とは＜神の力にして智慧＞（1コリント 1,24）、はたまた法にして福音だからである。さらに法はこの方に対する恐れを生み、この法は憐れみ深く救いを目指すものである。＜憐れみと信仰と真理をして、あなたを見棄て置かしめるなかれ。むしろそれらをあなたの首の周りに下げるがよい＞（箴言 3,3）。175.1) またパウロと同様、預言は、民が律法を理解していないとして非難している。＜彼らの道には破壊と崩壊があり、彼らは平和の道を知らない＞（イザヤ 59,7）。＜彼らの目の前には、神に対する畏れがない＞（詩

篇 35,2). 2) <彼らは愚かにも、自らが知恵ある者だと言う> (ロマ 1,22). 使徒は言っている. <われわれは、もし誰かが律法を掟に基づいて用いるなら、律法は美しきものだということを知っている. ところが律法の教師たらんと欲する者たちは、自分が言っていることについても、自分が何について主張しているかについても、考えていない. だがこの命令の核心は、清い心、善き良心、偽りのない信仰から発する愛である> (1 テモテ 1,8 ; 1,7 ; 1,5).

## XXVIII. モーセは弁証法においてプラトンよりも好ましいこと.

176.1) モーセによれば、愛智は四つに分割される. まず歴史的なもの、次に勝義的に律法的なもの、これは倫理的な実践に固有であり、第三に聖事に関わること、これは自然学的観想に属する. そして第四にすべてに関して神学的性格を有するもの、すなわち観照 (epopteia) であり、これをプラトンは「真に偉大なる神秘」と述べ (『ファド羅斯』 250C, 『饗宴』 209E – 210A), アリストテレスはこの類を「形而上学」と呼んでいる. 3) これはプラトンによれば「弁証法」でもあり、彼はこのことを『政治家』の中で述べている. すなわち、これは言わば事物の明証を発見する知識であり、これが賢慮ある者に獲得されるのは、現在弁証法家たちが詭弁論に没頭して行っているように、人間に関わる事どもを述べたり行ったりするためではなく、むしろ神に嘉せられることを語り、行うことを、能うかぎりすべてできるようにするためである. 177.1) 真なる弁証法は、真なる哲学と混交し、事物を観じては力と能力を吟味し、万物を統御する実体 (ousia) へと登攀せんとする. その際、万物の神に向けて上方へと仰ぎ行き、死すべきものどもの経験ではなく、むしろ神的また天的なものの知識を告げる. その知識には、人間的な事どもに関わる、言論と実践をめぐる固有の用い方があい伴うのである. 2) 実に聖書もまた、われわれがこのような弁証法的な存在となることを望み、こう勧告している. <思慮ある両替商たれ>. すなわち、物事を十分に吟味して、美しきものを選択するように、との意である. 3) というのも実に、弁証法的な思慮は、思惟的な事どもに関して選択的で、諸事物の先言指定の各々を混交なく純然と指し示す. あるいはこれは物事の種類に関する選択的な力だとも言える. つまり個々のものにまで降り立って、諸事物各々がどのように映るか、それを指し示すのである. 178.1) それゆえただこれだけが、真なる智慧、すなわち神的な力に向けての導きをなしうる. これは諸事物を、存在物として知覚する知恵であり、完全性

を内包し、あらゆる情動から解放されていて、われわれの靈魂の視覚から、誤った反転により影を落とす靄の無知を、神的な言葉により取り払い、最良のものを復興する救い主を伴う。それは<われわれが、神をも人をも、善く知覚できるようになるため>である（ヘロス『リ阿斯』5,127以下）。2）この方こそ、自らを如何に認識すべきかを真に示してくださる方であり、望むままに、また人間の本性に可能な限りにおいて、万物の父を開示する方である。<なぜなら、父以外に子を知る者はおらず、子と、子が明らかにする者以外には、父を知る者はいない>（マタイ11,27）からである。179.1）使徒が次のように述べているのはいとも似つかわしい。<神秘を認識することが、啓示によって可能になった。それはわたしが少しく以前に記したことである。それに関して可能な限り、読んでもらえれば、あなた方は、キリストの神秘におけるわたしの理解を知ることができるであろう>（1コリント3,3以下）。2）「それに関して可能な限り」と言っているのは、使徒が、ある人々は乳だけを飲む域にいて、まだ食物を摂る域にはないが、まもなく乳だけを摂る域から脱すということを知っているからである。3）われわれは律法の意向を、三様に受け取るべきである。それは、徴しとして強調しているのか、あるいは正しき生き方に向けて命令を含んでいるのか、あるいは預言として前もって語っているのか、である。4）彼は、そのようなことを判断し述べることは、人間の能力に属すということをよく知っているのである。というのも、格言家たちが述べているように、聖書はすべて思惟に訴えるのだから<ひとりミュコノスに限らない>。しかるに神的な教えの連関に目を向ける者たちは、できる限り弁証法的に聖書に近づかねばならない。

### XXX. ギリシア人たちは、エジプト人に比べてみな 「子供」であること。

180.1）かくして、プラトンの中でエジプト人の神官が次のように述べているのはいとも美しい。<おおソロン、ソロン、あなたがたギリシア人は、つねに子供である。あなた方は靈魂のうちに、古の声による昔の名声をまったく有していない。ギリシア人の中には、一人も老人がいないのだ>（プラトン『ティマイオス』22B）。2）わたくしが思うに、老人と言われているのは、古の事柄、すなわちわれわれに属す事柄を知っている人々のことを指しているのであろう。逆に「若者」とは、より新しく、ギリシア人たちによって手がけられた事柄に関わる人々のことを指し、昨日そしてそれ以前に起こったこと、古の古い事柄を語

る人々を老人としているのであろう。3) 彼はさらに付言して「学は時とともに白髪となる」と言う。われわれならここで、異邦人的な仕方では、つくりわすれ明確でない隠喩を用いるところであらう。つまり善き思いの人々は、特に策を弄することなく、解釈のあらゆる形式に近づくことができるのである。4) しかるにギリシア人たちに関して、プラトンは「彼ら子供たちの思いなしは、神話とさして変わらない」と述べている（プラトン『ティマイオス』23B）。というのも子供じみた神話や、こどもたちによって作られた神話には、耳を傾けるべきでないからである。5) しかるに、プラトンが「子供たち」と言っているのは、かの神話そのもののことであり、これはギリシア人たちの許にいる「思いなし賢人」たちが少しく見抜いていることである。すなわち、プラトンが暗示しているのは、古びた教え、異邦人たちの間に先行する真理（これに彼は「子供」である神話を対置させている）であり、プラトンは若き人々による着想を「神話」とし、これを「子供たちのよう」「何ら年長の事柄を含んでいない」として反駁し、双方を概して彼らの「神話」、「子供じみた言論」として提示しているのである。181.1) かくしてその力は、ヘルマスに対し、神的に黙示のかたちをとって語りかけ、＜この幻影とこの黙示とは、それらが存在するのか存在しないのかに関して、二心の人々、自らの心のうちに論じ合っているような人々のためのものである＞。2) 同じように、博学の充溢から発した証明は、なお彼らが、若者のつねで＜その心が浮ついている＞（ヘロス『イリアス』3.108）限りにおいて、指示の言葉を力づけ、固め、基礎づける。3) 聖書によれば＜よき掟は灯火＞（箴言6,23）であり、＜律法は道の光。教養は生涯の道を吟味する＞。

#### 4) 「法は万人の王、

死すべき者にとっても、不死なる者にとっても」

（ピンドロス断片 169）.

とピンダロスは言っている。5) わたしはこれらから、法を制定した人の声を聞き届け、次のヘシオドスの言葉が、万物の父に関して語られたものであると受け取る、もしこれが詩人によって、明確ではなく、推測をさせるように語られているとすれば。

#### 6) 「クロノスの御子がこの法を人間どものために定めた。

魚にも、獣にも、翼ある鳥のためにも。

彼らは互いに食しあう。彼らの許では正義が存在しないから。  
だが人間どもには、ずっと優れた正義を与えた」

（ヘシオドス『農と暦』276 - 279）.



182.1) したがって彼が、誕生とともに法がある、と言っているにせよ、その後すぐに与えられるのだ、と言っているにせよ、神からを除いて、本性と学ぶには法があり、それは一なるものである。これは、プラトンも『政治家』のなかで、立法者は一者であると述べ（プラトン『政治家』301C）、また『法律』のなかでは、「音楽を理解できる者はただ一人」（プラトン『法律』658E）と述べているように、これらの表現をもって彼は、法は一つであり神もただ一人である、ということをお教えているのである。2) しかるにモーセは主のことを契約と呼んでいるようである。彼は、〈見よ、わが契約はあなたとともにある〉（創世17,4）と言っている。彼はそれ以前に、契約を、書き物の形で求めるべきではない、と言っているからである（創世17,2）。というのも、万物の原因である神が置いたものが契約であり、神（theos）とは設置（thesis）また秩序、規則と呼ばれるからである。3) 一方『ペトロの宣教』の中にも、主が「法にして言葉」と語られているのが見出されるであろう。

真なる愛智に基づいた覚知の覚書、『ストロマトイス』の第1巻については、以上をもって筆を擱くことにする。

## 注

- 1 「アレクサンドリアのクレメンス『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』）—全訳—」、筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』57, 1—82, 2010.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴース』（『訓導者』）第1巻—全訳—」、同『文藝言語研究 文藝篇』59, 1—62, 2011.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴース』（『訓導者』）第2巻—全訳—」、同『文藝言語研究 言語篇』59, 1—74, 2011.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴース』（『訓導者』）第3巻—全訳—」、筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第3号, 25—76, 2011.3.
- 2 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマトイス』（『綴織』）第2巻 —全訳—」、筑波大学大学院人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 言語篇』63, 2013.3 刊行予定.
- 3 タレスが予言した日食は、前585年5月25日のこととされる.
- 4 古代における占いの一種、腸占術の根拠がここに記されている.
- 5 この箇所は、キリスト教文献の中でもっとも早く仏教に言及した箇所として知られる.
- 6 前304年、パタリプトラに派遣される。ニカトルとはセレウコス1世のこと（在位：前305—281）.
- 7 韻律の一種。音節の長さが「長」「短」「短」型のものを言う.

- 8 エウセビオスから補う。
- 9 アルゴスでの月の名。
- 10 アルゴ号の遠征隊には、ヘラクレスも加わっていた。アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』1.122 参照。
- 11 ルペルカル祭は、豊穡を促進し災いを避けるための祝祭で、ルペルキ祭司たちにより、2月15日にパラティウムの丘で行われた祭り（リウイウス『ローマ建国史』1.5.1）。パラティウムの丘の麓にある洞穴もルペルカルと呼ばれ、ここでは祝祭の前にいけにえが捧げられた（ウェルギリウス『アエネイス』8.343）。エウアンドロスは、『アエネイス』にはエウアンデルとして登場し、アルカディア出身の王でイタリアに移住し、パッランテウムを創設したとされている（『アエネイス』8.52。リウイウス1.5.2。ウァルデウス『祭暦』1.471）。もとよりパンはアルカディアの牧神であるとされるので、クレメンスの記述は適確である。
- 12 ギリシア語聖書では『サムエル記』『列王記』の計4巻をあわせて『列王記』の名で呼ぶため、クレメンスの本文上では、ここは『列王記』の第1巻と呼ばれている。以下同様である。
- 13 ヨヤダ（列王下11）であるのかどうかは不明である。
- 14 ホシェアは北王国イスラエルの王であり、ここでクレメンスが思い違いをしているか、もしくはテキストに誤って挿入がなされたか、両者の可能性が指摘されている。
- 15 旧約聖書本文にはこう記されてはいない。ヨシヤ王によるいわゆる「申命記改革」の際の大祭司はヒルキヤであった（列王下22.8）。一方エレミヤの父親の名も確かにヒルキヤであるが（エレミヤ1.1）、アナトトの下級祭司であった。
- 16 マソラ本では語末の子音がmとnで異なる。
- 17 旧約聖書本文では、「5年目」なのは「ヨヤキン王が捕囚になってから」である（エゼキエル1.2）。
- 18 アレクサンドロス・ヘリオスとクレオパトラ・セレネを指す。
- 19 テバイ攻めの「後継者」（エピゴノイ）と呼ばれる人々の中に、トロイア戦争に出征している英雄たちがいること（ディオメデス、ステネロス、エウリュアロス；ホメロス『イリアス』2.563－565）から、この指摘は的確であり、クレメンスによる神話理解の妥当性が立証される。
- 20 この部分に、テキストの欠落が想定されている。欠落を仮定する場合、後続とのつながりから推して「エリザベト、そしてキリストを産んだマリア」を補う読みが考えられる。
- 21 前581年、コリントスの神話的な開祖シシュフォスが、甥にあたるメリケルテス・パライモンの水死を弔うべく始めた祭りで、ポセイドン海神に捧げられる。
- 22 オリュンピア競技祭の創設は前776年のことである。
- 23 スパルタの国政改革者。「レトラ」と呼ばれるプラニに沿っておこなわれた。その年代に関して、諸説あるものの、現在では前7世紀前半説が有力である。
- 24 スパルタに対し、エバメイノンダス率いるテバイ軍が勝利を収める。
- 25 この箇所、「王制の廃止」をミーニュ版のラテン訳はバビロン王制の廃止と取るが、年号の関係から明らかにローマ王制の廃止である。
- 26 シュテターリンの修正読みに従う。

- 27 アレクサンドロスが東征に出発したのは前 334 年のことである。
- 28 アレクサンドロスの没年は前 323 年である。
- 29 第4代皇帝クラウディウス（在位；後 41－54）を指す。ここで言われているのはクラウディウスの登位の年のことであろう。
- 30 クレメンスに対して、年数計算の正確さは求めるべくもないが、興味深いのは、クレオパトラひいてはその夫アントニウスまで、マケドニア王朝（ギリシア系）が存続したと考える発想である。これは、クレメンスがアレクサンドリアに居住していたことと何らかに関連がありそうである。アントニウスの死没をもってアウグストゥスの単独支配が確立し、ローマが帝政に移行することを考えれば、ペルシア→マケドニア→ローマという支配者の推移が、アレクサンドリアからは帝政（王政）において間断なく捉えられることになる。
- 31 捕囚からの帰還として、前 359－338 年在位のアルタクセルクセス 3 世当時を想定しているようである。現在では『エズラ記』に見られる帰還と神殿再建の記事（エズラ 7 参照）を、アルタクセルクセス 1 世（前 464－424）ないしアルタクセルクセス 2 世（前 404－359）のどちらの時代のものと解するかで説が分かれている。
- 32 明らかな誤認もしくは計算間違いとなるため、テキストの修正が必要かもしれない。
- 33 これはプトレマイオス 7 世エウエルゲテス 2 世（在位；前 145－117）のことを指すものと思われる。
- 34 コンモドゥスの在位期間が 180 年から 192 年であるから、この数字が正しいとするとカエサルの皇帝即位は前 44 年に置かれることになる。カエサルの没年が前 44 年であることはよく知られているが、ここではカエサルの皇帝在位年代も算定されているわけで、若干の誤差が生まれることになる。
- 35 トラシュブロス（前 448？－388）は、ペロポネソス戦争（前 431－404）による敗戦国アテナイに跋扈した三十人政治体制、すなわち専制的恐怖政権を打倒し、アテナイに民主政を復活させた立役者（ハ<sup>ρ</sup>ウ<sup>α</sup>ニ<sup>α</sup>ス『ギリシア案内記』1.29.3）。
- 36 ムニキアは、ペイライエウス半島の東南岸。